小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

郷　　土

―― 長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書 ――

1993. 3

小諸市教育委員会

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

郷　　土

―― 長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書 ――

1993. 3

小諸市教育委員会

序　　文

小諸市教育委員会
教育長　矢　嶋　正　一

本報告書は、郷土遺跡発掘の記録であります。上信越自動車道の用地にかかわり、新たに駐車場その他の造成が必要となりました。造成される場所が、郷土遺跡であることから、長野県土地開発公社及び小諸市高速交通対策課の委託を受け、調査したものです。

この場所は、県立小諸高校の北側に位置します。浅間の裾野が南西に緩い傾斜で広がった標高830～840mの地点にあります。南には佐久平の向うに蓼科、八ケ岳の連峰が見渡され、西には日本アルプスが遠望できるすばらしい場所です。

調査面積は、延べ1,500㎡であり、調査期間は、平成4年7月28日から9月26日までありました。調査の結果、縄文中期から後期にかけての竪穴住居址7棟、土坑49基が確認されました。主な遺物としては、縄文時代前期から後期にかけての土器であり、打製石斧、石匙、多孔石、石皿、石鏃などの石器類があります。

遺跡に立って見れば、縄文期におけるわれわれの先祖が、陽に抱かれたゆるやかな傾斜地で、助け合いながら生活したであろう様々なことが思い巡らされます。他の出土品ともども今後の歴史研究の資料として生かされることが期待されます。

本発掘にあたられた小淵武一団長、星野保彦学芸員、井出喜八氏はじめ調査員の皆様、また、県埋蔵文化財センターの臼田武正先生、桜井秀雄先生はじめ佐久調査事務所の方々、地元郷土地区の皆さんにもお世話になりました。心からお礼を申しあげ序にかえる次第です。

例　　言

1　本書は、平成4年7月28日～9月26日までにわたって調査された、長野県小諸市大字甲字上郷土に所在する郷土遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、長野県土地開発公社及び小諸市高速交通対策課の委託を受け、小諸市教育委員会が実施した。

3　本調査は、星野保彦を発掘担当者とし、有識者を調査員とし、地元郷土地区の方々のご協力を得て実施した。

4　遺構実測図の作成は、次の者が行ったほか、臼田武正氏の協力を得た。井出喜八、小野山清、松本甲子雄、山浦実、佐藤君代、星野保彦

5　遺物実測図の作成・トレースは、星野保彦が行ったほか、株式会社パスコ、有限会社やまいちやの協力を得た。遺構実測図のトレースは、星野保彦が行った。

6　土器拓本は、佐藤君代が行った。

7　遺構・遺物の写真撮影は、星野保彦が行った。遺構全体図の作成は、有限会社ユーアール測量設計によるものである。

8　本書の執筆は、第II章1を小淵武一が、他を星野保彦が行った。

9　本書の付編については、パリノ・サーヴェイ株式会社より玉稿を賜わった。

10　本書の編集は、太田史夫・星野保彦が行い、小淵武一・花岡弘がこれを校閲、監修した。

11　本遺跡の出土資料は、小諸市教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査及び報告書作成に関しては、次の方々に御指導・御配慮・御協力を賜わった。なお、縄文土器については福島邦男氏より貴重な御助言を戴いた。ここに御芳名を記して厚く御礼申し上げる。(50音順、敬称略)

市沢英利、臼田武正、小山岳夫、草間重男、近藤尚義、桜井秀雄、堤　隆、福島邦男

（関係機関）　財団法人長野県埋蔵文化財センター、株式会社パスコ、有限会社やまいちや、有限会社ユーアール測量設計、パリノ・サーヴェイ株式会社、有限会社堀籠重機

凡　　例

1　各遺構の略号は、次のとおりである。
竪穴住居址――ＳＢ　ピット群――ＳＡ　土坑――ＳＫ

2　遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。
竪穴住居址・ピット群・土坑――1/80　炉址――1/40　遺構全体図――1/400

3　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。
土器――1/4　石器――1/2（但し、第27・50図は1/3、第17・45図は1/4）

4　水糸レベルの原点は、次のとおりである。
834.711m、830.399m、827.379m、829.566m、830.440m、834.104m

5　図版中、遺物の縮尺は次のとおりである。
土器――約1/4　石器――約1/2（但し、第６号住居址と遺構外出土の磨石は約1/3、第３号住居址出土の石皿と、第14号土坑出土の多孔石は約1/4）

6　図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第８図１は８－１と表わす。

7　土層の色調は、『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

本文目次

序文
例言
凡例
本文目次
付表目次
挿図目次
図版目次
Ⅰ　発掘調査の経緯……1
1　調査に至る動機……1
2　調査の概要……2
3　調査の経過……2
Ⅱ　遺跡の概観……4
1　遺跡の自然的環境……4
2　遺跡の歴史的環境……6
Ⅲ　層　　序……9
Ⅳ　遺構と遺物……10
1　竪穴住居址……10
(1)　第1号住居址……10
(2)　第2号住居址……16
(3)　第3号住居址……17
(4)　第4号住居址……21
(5)　第5号住居址……22
(6)　第6号住居址……23
(7)　第7号住居址……26
2　ピット群……28
(1)　第1号ピット群……28
(2)　第2号ピット群……28
(3)　第3号ピット群……29
3　土　坑……29
4　遺構外出土遺物……39
Ⅴ　総　　括……48

引用参考文献
付編１　郷土遺跡出土炭化材の同定……52

付表目次

第１表　郷土遺跡とその周辺遺跡……8
第２表　土坑一覧表……30
付編１
表１　炭化材同定結果……56

挿図目次

第１図　遺跡の位置（１：50,000）……1
第２図　調査区（１：5,000）……3
第３図　遺跡付近の地質図……4
第４図　遺跡と周辺遺跡分布図（１：10,000）……7
第５図　層序模式図……9
第６図　第１号住居址実測図……10
第７図　第１号住居址炉址実測図……11
第８図　第１号住居址出土遺物(A)……12
第９図　第１号住居址出土遺物(B)……13
第10図　第１号住居址出土遺物(C)……14
第11図　第１号住居址出土遺物(D)……15
第12図　第２号住居址実測図……16
第13図　第２号住居址炉址実測図……17
第14図　第２号住居址出土遺物……17
第15図　第３号住居址実測図……18
第16図　第３号住居址炉址実測図……19
第17図　第３号住居址出土遺物(A)……19
第18図　第３号住居址出土遺物(B)……19
第19図　第３号住居址出土遺物(C)……20
第20図　第４号住居址実測図……21
第21図　第４号住居址出土遺物(A)……22
第22図　第４号住居址出土遺物(B)……23
第23図　第５号住居址実測図……23
第24図　第５号住居址出土遺物……24
第25図　第６号住居址実測図……25
第26図　第６号住居址炉址実測図……25
第27図　第６号住居址出土遺物(A)……26
第28図　第６号住居址出土遺物(B)……27
第29図　第７号住居址実測図……27
第30図　第１号ピット群実測図……28
第31図　第１号ピット群出土遺物……28
第32図　第２号ピット群実測図……28
第33図　第３号ピット群実測図……29
第34図　第１～６号土坑実測図……32
第35図　第７～12号土坑実測図……33
第36図　第13～18号土坑実測図……34
第37図　第19～25号土坑実測図……35
第38図　第26～33号土坑実測図……36
第39図　第34～39号土坑実測図……37
第40図　第40～45号土坑実測図……38
第41図　第46～49号土坑実測図……39
第42図　土坑出土遺物(A)……40
第43図　土坑出土遺物(B)……41
第44図　土坑出土遺物(C)……42
第45図　土坑出土遺物(D)……42
第46図　土坑出土遺物(E)……43
第47図　遺構外出土遺物(A)……44
第48図　遺構外出土遺物(B)……45
第49図　遺構外出土遺物(C)……46
第50図　遺構外出土遺物(D)……47
第51図　郷土遺跡遺構全体図……49・50

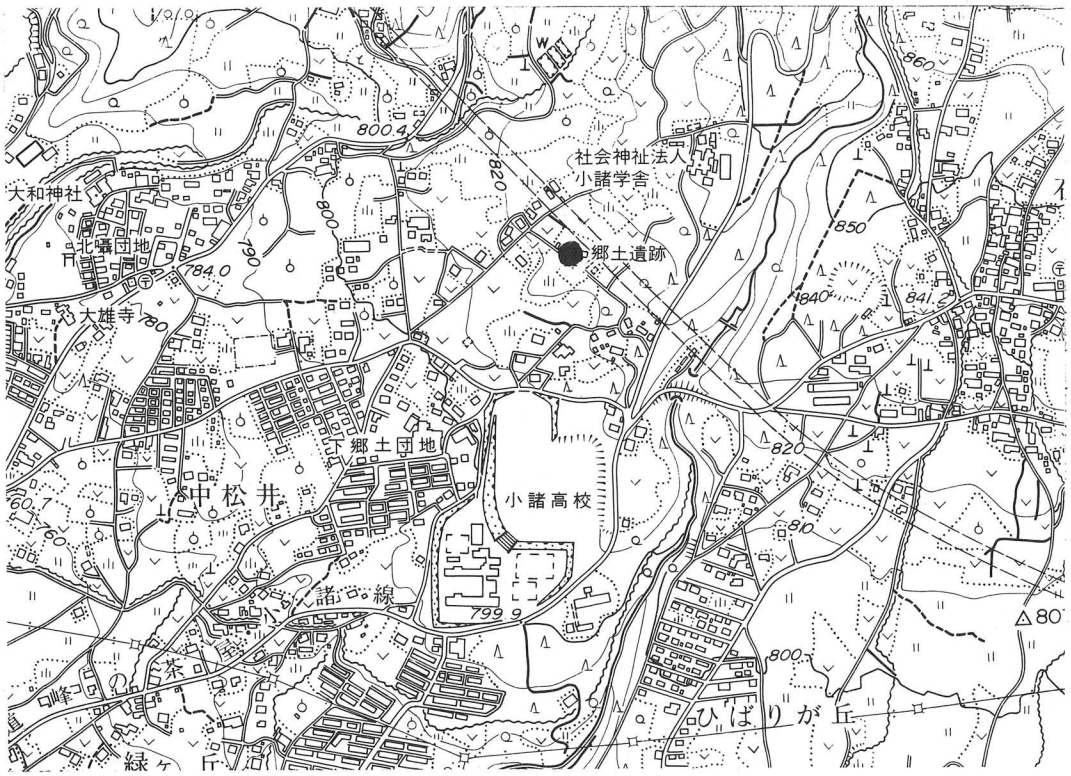
図版目次

図版１　第１～４号住居址
図版２　第５～７号住居址
図版３　第１～３号ピット群
図版４　第１～10号土坑
図版５　第11～20号土坑
図版６　第21～30号土坑
図版７　第31～40号土坑
図版８　第41～49号土坑
図版９　第１・３・４・６号住居址出土遺物
図版10　第１・３・４・５・６号住居址、遺構外出土遺物
図版11　第11・14・17・36・37号土坑、遺構外出土遺物
図版12・13　炭化材の顕微鏡写真

Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

長野県小諸高速道事務所では、上信越自動車道の早期完成を目指しているわけであるが、小諸市大字甲字中郷土の会社駐車場が本線用地内にかかるため、移転の必要が生じた。また、小諸市高速交通対策課では、上信越自動車道の建設に伴い、市道を新たに建設することになった。株式会社エイワの新駐車場の造成地、及び市道を建設する場所が、郷土遺跡の埋蔵文化財包蔵地内であることから緊急調査することになった。このため小諸市教育委員会では、株式会社エイワ及び小諸市高速交通対策課の依頼を受理し、長野県教育委員会文化課指導主事市沢英利先生の御指導を受け、株式会社エイワ駐車場分については、擁壁が建設される地点と盛土が２ｍ以上となり今後調査される可能性の少ない地点、さらに削土される部分の面的調査、それ以外をトレンチを入れて遺構分布の確認調査、市道分については全面調査することになり、平成４年７月28日より着手した。



第１図　遺跡の位置（１：50,000）

2　調査の概要

○遺 跡 名　郷土遺跡

○所 在 地　長野県小諸市大字甲字上郷土4127－１・16、4129、4135、4146

○調査期間　平成４年７月28日～９月26日

○調査に関する事務局の構成組織は下記のとおりである。

中澤一晃　小諸市教育委員会教育次長

依田茂美　　〃　　社会教育課長

清水隆夫　　〃　　社会教育課長補佐、社会教育係長

花岡　弘　　〃　　学芸員

前田洋子

○調査団の構成組織は下記のとおりである。

顧　問　関　三郎　小諸市教育委員会教育委員長

　　矢嶋正一　小諸市教育委員会教育長

団　長　小淵武一　小諸市文化財審議委員長

副団長　井出喜八

担当者　星野保彦　小諸市教育委員会学芸員

調査員　小野山　清、松本甲子雄、山浦　実

調査補助員　佐藤君代

3　調査の経過

調査日誌（抄）

７月28日　（火）　晴れ

重機による試掘トレンチを入れ、範囲確認作業を開始する。

８月３日　（月）　曇り

第１号住居址の掘り下げを始める。

８月６日　（木）　晴れ

重機による削土作業に併行して遺構検出作業を行う。

８月11日　（火）　晴れ

第５・６・７号土坑の掘り下げなどを行う。

８月18日　（火）　晴れ

第２号住居址、第10・13号土坑掘り下げ、遺構実測、写真撮影を行う。

８月24日　（月）　晴れ

土坑の掘り下げ、実測、写真撮影を行う。

8月29日　（土）　晴れ

重機による削土作業に併行して、遺構検出作業、土坑の掘り下げを行う。

9月7日　（月）　晴れ

第7号住居址、土坑の掘り下げ、実測、写真撮影などを行う。

9月14日　（月）　晴れ

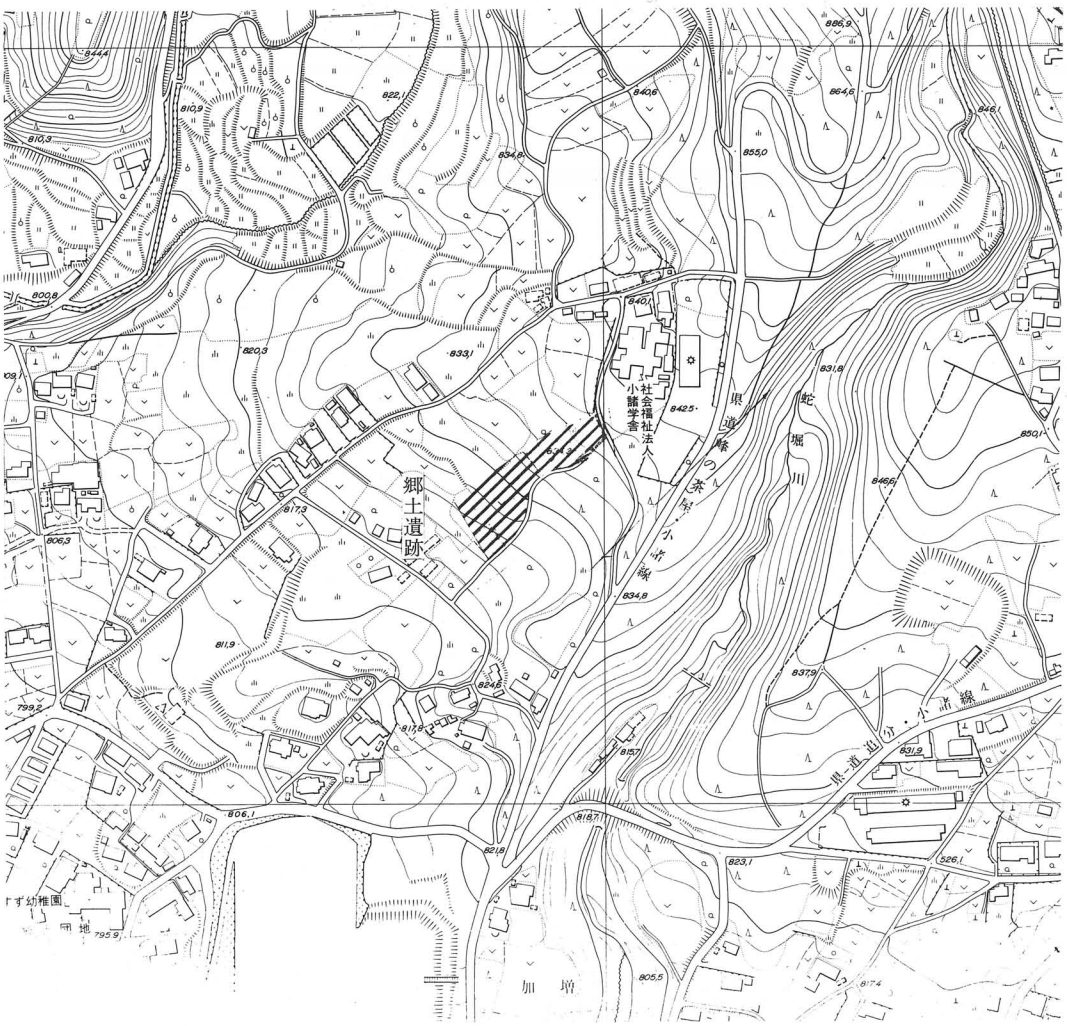
第3号ピット群、土坑掘り下げ、実測、写真撮影などを行う。

9月21日　（月）　晴れ

第6号住居址、土坑の掘り下げ、実測、写真撮影などを行う。

9月26日　（土）　晴れ

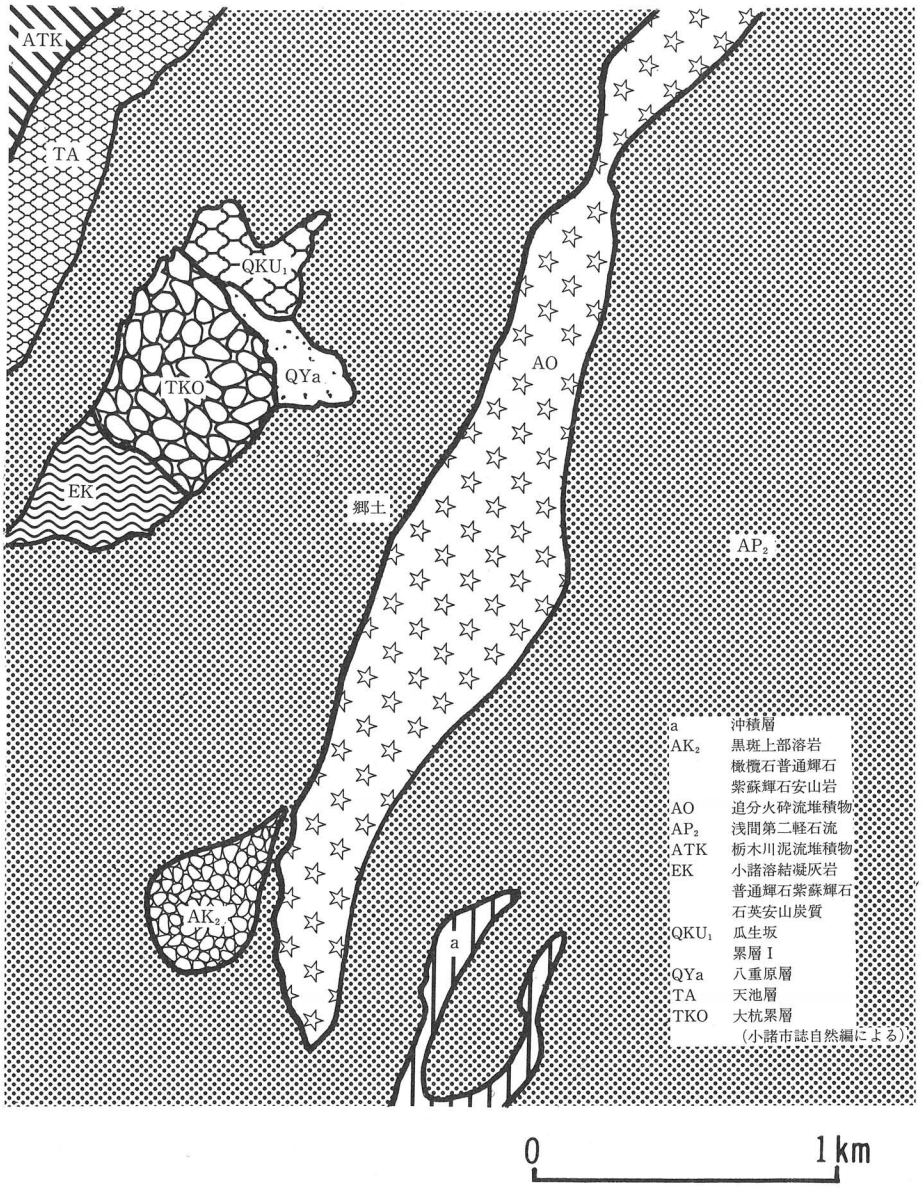
器材撤収。調査終了後、報告書作成作業を行った。



第2図　調査区（1：5,000）

II　遺跡の概観

1　遺跡の自然的環境



第３図　遺跡付近の地質図

調査対象の地籍は地字、中郷土である。この地は小諸市与良区郷土（上郷土、中郷土、下郷土、東郷土、西郷土）の中心的な位置にある。

調査対象地は東北方に現在も火山活動を続ける浅間山（標高2560m）の聳えている南西のゆるやかな斜面の標高およそ830m付近に位置している。東南に平尾山に続いて群馬県境の山々がならび、荒船山が望める。南に目を転じると広い佐久平が開け、千曲川の流れが蛇行するのも見える。その向うには八ケ岳連峰があり西の端には蓼科山が見える。また気象条件がよい時には遥か彼方に霊峰の富士山を望むこともある。西の方は、御牧ケ原台地、その西には美ケ原が重なり、台地の北方には日本アルプスも望める遠望のきく展開された地である。

遺跡周辺の地層は黒斑山の噴出物の火山弾や火山砂の堆積は遺跡の東側を流れる蛇堀川（源は浅間山の火口原湯の平）のV字形の谷に見られる。その上に浅間山の第一軽石流が重なり表面には第二軽石が堆積している、透過性に富んだ地層である。

水利については前述の蛇堀川の遺跡の東に多量の湧水（地籍名、和久井）があり、下流の集落の水田を潤している。隣接する下郷土にもきれいな湧水があったが現在は小諸市の上水道に利用されている。耕作地は水利関係と地質の為か畑地のみで水田は見られない。畑作物も時代と共に変り、養蚕の盛んのころは桑園も野菜や雑穀などとなり、更に次第に宅地化している。

遺跡の周辺の植生は終戦ごろまでは赤松林や雑木林が多く見られたが、県道（峰の茶屋小諸線）が開かれたことや、高度経済の成長期を迎え開発が進み住宅、工場、学校などが建設されている。

周辺の植生で木本の高木は、ケヤキ、アカマツ、カスミザクラ、ヒノキ、カラマツ、クヌギ、クリ、コナラ、カエデ、サトザクラ、低木、ズミ、ヌルデ、ヤマウルシ、クワ、ニシキギ、クロツバラ、蔓性のもの、アケビ、ノダフジ、ツルウメモドキ、スイカズラ、クマヤナギ。

草本は、ススキ、ハギ、チガヤ、ヨモギ、ギシギシ、ホタルカズラ、アカツメクサ、シロツメクサ、ウシハコベ、ヤエモグラ、スギナ、ワラビ、ツリガネニンジン、クサフジ、ナンテンハギ、カワラマツバ、オケラ。江戸末期以降外国から入ったもの、ヒメジョオン、ハルシオン、ヒメムカシヨモギ、アレチマツヨイグサ、ハキダメギク、クワモドキ、セイヨウタンポポ、シナダレスズメガヤ。

従来このあたりで見られた、秋の七草でなじみ深い、キキョウ、オミナエシ、ワレモコウ、カワラナデシコなどはすくなくなり、外来植物が非常な勢で繁茂するようになり自然植生が変りつつある。

2　歴史的環境

郷土遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る間の幾つかの遺跡が分布している。

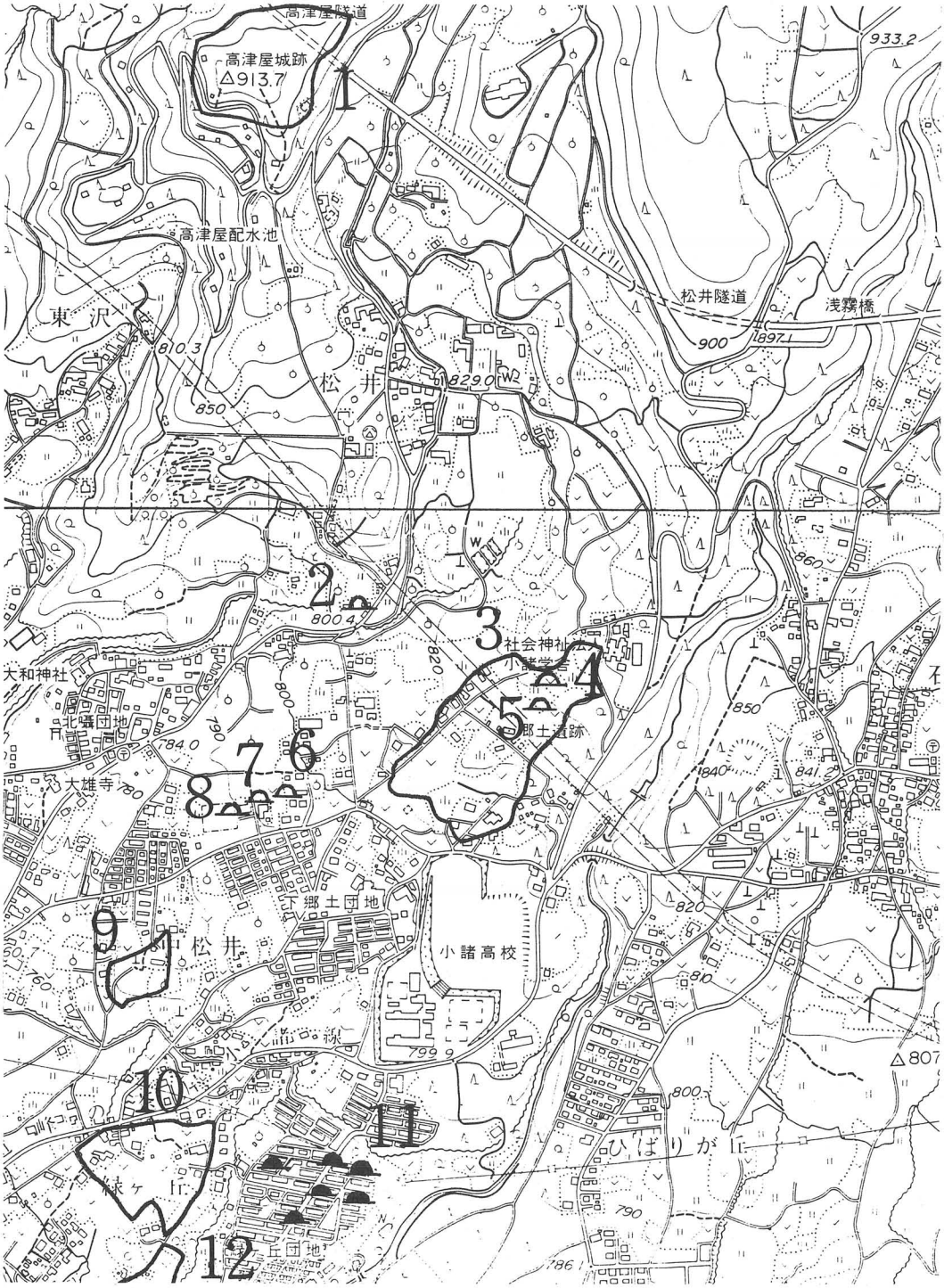
各時代毎にみていくと、まず縄文時代では、主なものとして、本遺跡、南東約２㎞程のところに石神遺跡群[1]、北西約1.2㎞を隔てて東丸山遺跡がある。これらは東隣りの御代田町から続く浅間山麓800～900m内外の地帯に立地し、湧水があり当時生活するのに適した環境であったためといえよう。郷土遺跡は、今回以前に昭和36・40年と２回調査されている。昭和36年の調査は、その年の３月に小諸市甲4159－１の農業草間正三氏の畑の一隅より、敷石住居の一部と炉が発見され、周囲の地籍からも縄文土器の破片や石器等が出土していたことから、市誌編纂委員会では是非発掘調査したいとの希望を持ち、４月の委員会で東京教育大学の八幡一郎先生に調査をお願いすることが具体化し、５月に実現した。この時には敷石住居址が１棟、検出調査された。出土した土器は、加曽利Ｅ式が最も多く、他に勝坂、堀之内、加曽利Ｂ式など、中期から後期にかけての資料が出土した。昭和40年の調査も八幡一郎先生を担当者として、草間氏所有の畑において行われ、縄文時代中期末葉の敷石住居址が１棟、平安時代に下降するものと考えられる竪穴住居址が１棟検出、調査された。敷石住居址の基底面には、厚さ1.5～２㎝の鉄平石が敷きつめられ、たがいに巧く接し合うように、必要に応じて打調が施されていた。また、数本の打製石斧が壁際の狭い部分で検出された。これらも敷石の一部として敷かれた可能性も考えられる。炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央に構築されていた。出土した土器は、加曽利Ｅ式の新しい段階の資料だった。竪穴住居址からは、復元可能の杯３点、甕の破片などが出土した[2]。今回は縄文時代の竪穴住居址が７棟検出された。このうち中期のものが５棟、後期が１棟、あと１棟については、出土遺物が皆無で、切り合い関係もなく時期は同定できなかったが、プランから中期以降と考えられる。

弥生時代については、付近での遺跡の調査が行なわれておらず不明な点が多い。

古墳時代の遺跡には、松井古墳、郷土古墳群、北霞古墳群、堰下古墳群などがある。松井古墳は、小形の円墳で郷土遺跡から北西約200m程離れた、なだらかな畑の南斜面に位置し、横穴式石室をもつ。副葬品は出土していない[3]。郷土古墳群はかつて５基確認されていたが現存するのは、２基のみである。副葬品は、１基から「直刀」が出土した[4]。北霞古墳群は、郷土遺跡の西150m程のところにあり３基よりなる。いずれも僅かに痕跡をとどめているに過ぎず詳細は不明である。堰下古墳群は、６基よりなっていたが昭和41～43年にかけての団地造成で開発され現存していない。古墳の墳形、規模等についての詳細は不明であるが、かつて６号墳近くを耕作したところ、直刀、鉄鏃、轡、金環等が出土した[5]。

奈良時代については付近の発掘調査が行われておらず不明である。

平安時代の住居址は先にふれたように昭和40年の郷土遺跡の調査において１棟検出されている。また、同遺跡の平成４年の長野県埋蔵文化財センターの調査において、同時代の土坑１基が検出



第4図　遺跡と周辺遺跡分布図（1：10,000）

第１表　郷土遺跡とその周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	備考
1	高津屋城跡	大字甲字高津谷	山麓					○		
2	松井古墳	大字甲字寺久保	〃			○				
3	郷土遺跡	大字甲字上郷土・中郷土	〃	○			○			昭和36・40年一部発掘調査、平成4年発掘調査。
4	郷土古墳群1号墳	大字甲字中郷土	〃			○				
5	郷土古墳群2号墳	〃	〃			○				
6	北霞古墳群1号墳	大字甲字北霞	〃			○				
7	北霞古墳群2号墳	〃	〃			○				
8	北霞古墳群3号墳	〃	〃			○				
9	中松井城跡	大字甲字中谷地	〃					○		
10	熊野裏A遺跡	大字甲字熊野裏	〃	○	○		○			
11	堰下古墳群	大字甲字堰下	〃			○				現存せず
12	熊野裏B遺跡	大字甲字熊野裏	〃				○			

されている。

中世の遺跡には、高津屋城跡、中松井城跡がある。このうち高津屋城跡は、郷土遺跡の北北西約１㎞のところにある。形態は山上を削平し回字状に土塁をめぐらしたものである。単郭で他にはさしたる防備が見あたらないことから、築城に到らなかったのではないかとする説、また武田・上杉両氏が合戦を繰り返していた頃の狼煙台がここに設置されていたとする説がある。(6)

註

(1)　小諸市大字八満字石神。平成３年（1991年）に発掘調査が行われ、縄文時代の竪穴住居址46棟、平安時代の竪穴住居址８棟などが検出された。

(2)　小諸市誌編纂委員会編　1974　『小諸市誌　考古編』　小諸市教育委員会

(3)　註(2)の文献。

(4)　註(2)の文献。

(5)　註(2)の文献。

(6)　小諸市誌編纂委員会編　1984　『小諸市誌　歴史編㈠』　小諸市教育委員会

III　層　　序

第Ⅰ層　黒褐色土層（10YR3/2）

第II層　褐色土層（10YR4/4）

第III層　黄褐色土層（10YR5/6）

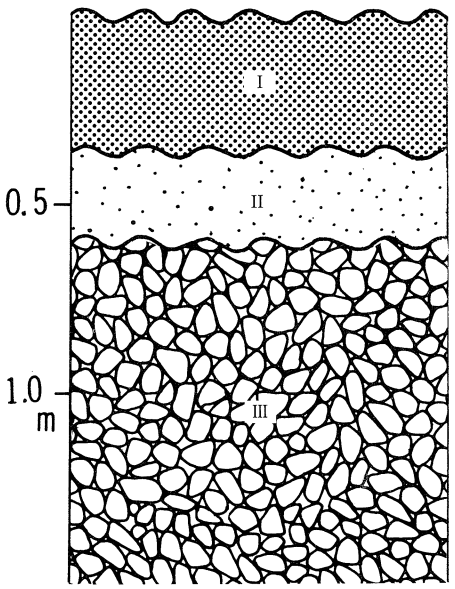
郷土遺跡は、浅間の裾野が南から西に続く緩斜面に位置する。

今回調査した地点の標高は、830m前後である。

第Ⅰ層は、耕作土層で、層厚は30～40cmを測る。ローム粒子、φ0.5～10cm前後のパミスを含み、締まっていない。

第II層は、漸移層で、層厚は20～30cmを測る。ローム粒子、φ0.5～20cm前後のパミスを多く含む。

第III層は、浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物である。遺構の確認は、本層上面において行った。



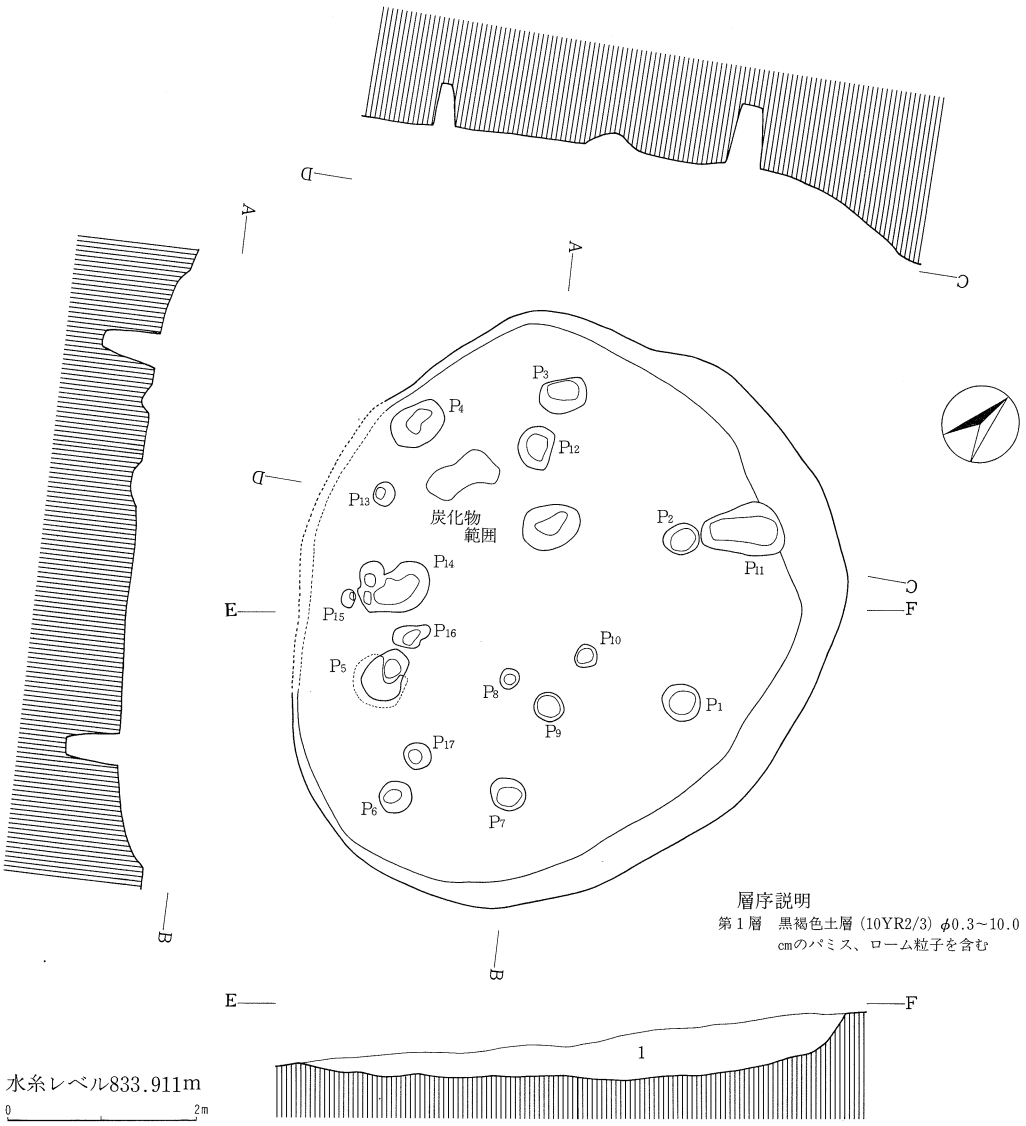
第5図　層序模式図

IV　遺構と遺物

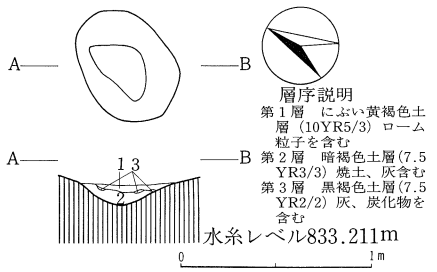
1　竪穴住居址

(1)　第1号住居址

遺構（第6・7図、図版1）



第6図　第1号住居址実測図



第7図　第1号住居址炉址実測図

本住居址は、C－2グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、後世の削平や耕作により、プラン南西部がはっきりしなかった。平面形は、東西571cm、南北645cmのやや歪んだ楕円形である。壁高は傾斜上方、すなわち東北側の壁で40cmを測る。床面は中央部に向かって緩く傾斜し、軟弱であった。

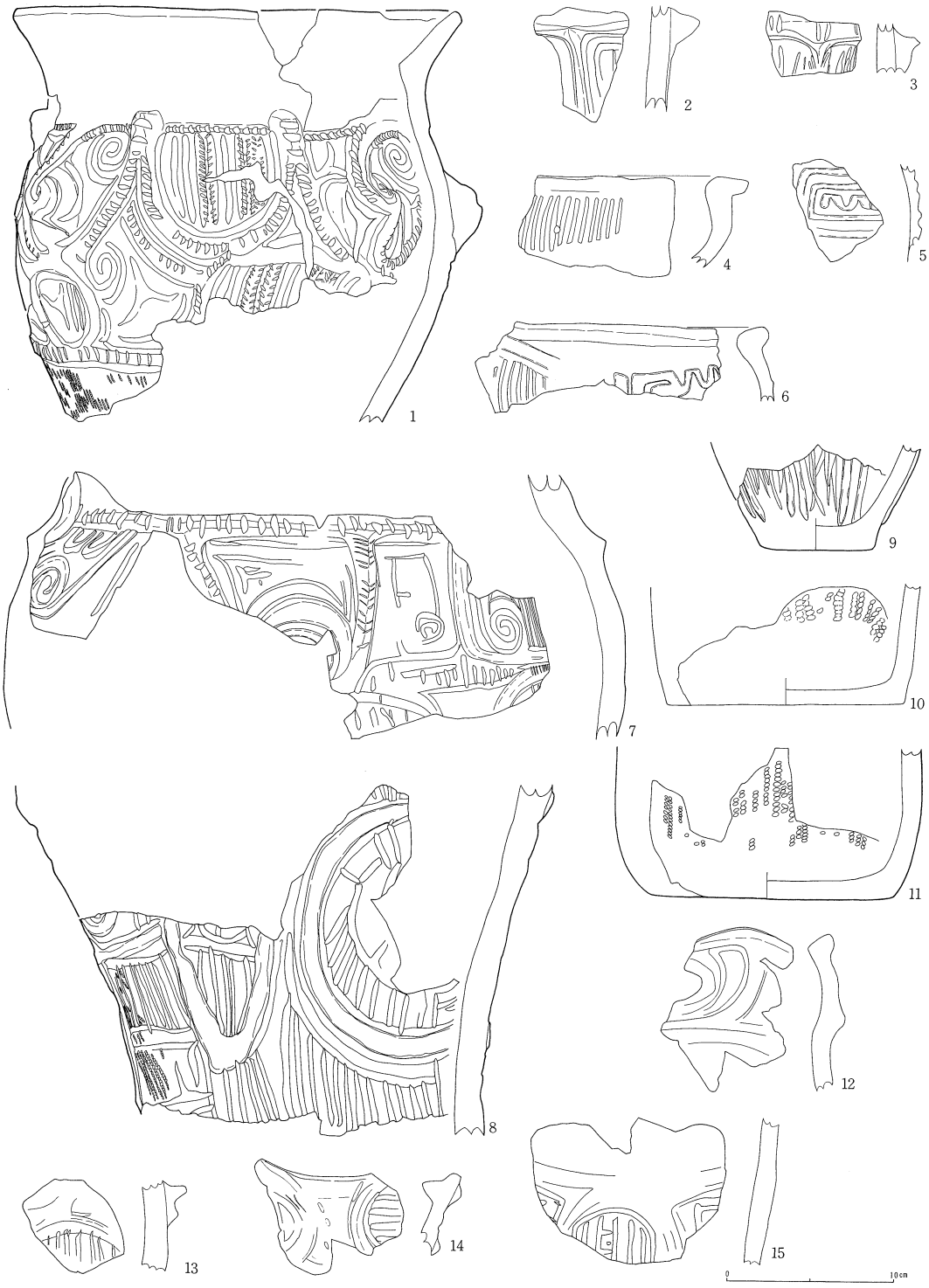
炉址は中央部北西寄りにあり、その規模は、南西47cm、南北65cm、深さ11cmを測る。覆土からは、灰、炭化物、焼土が若干量検出された。炉石の抜き取り痕は確認されず、地床炉であったと考えられるが、断定はできない。

ピットは17基検出された。このうちP_1～P_7の7基が、深さ50～66mを測り、主柱穴と考えられる。

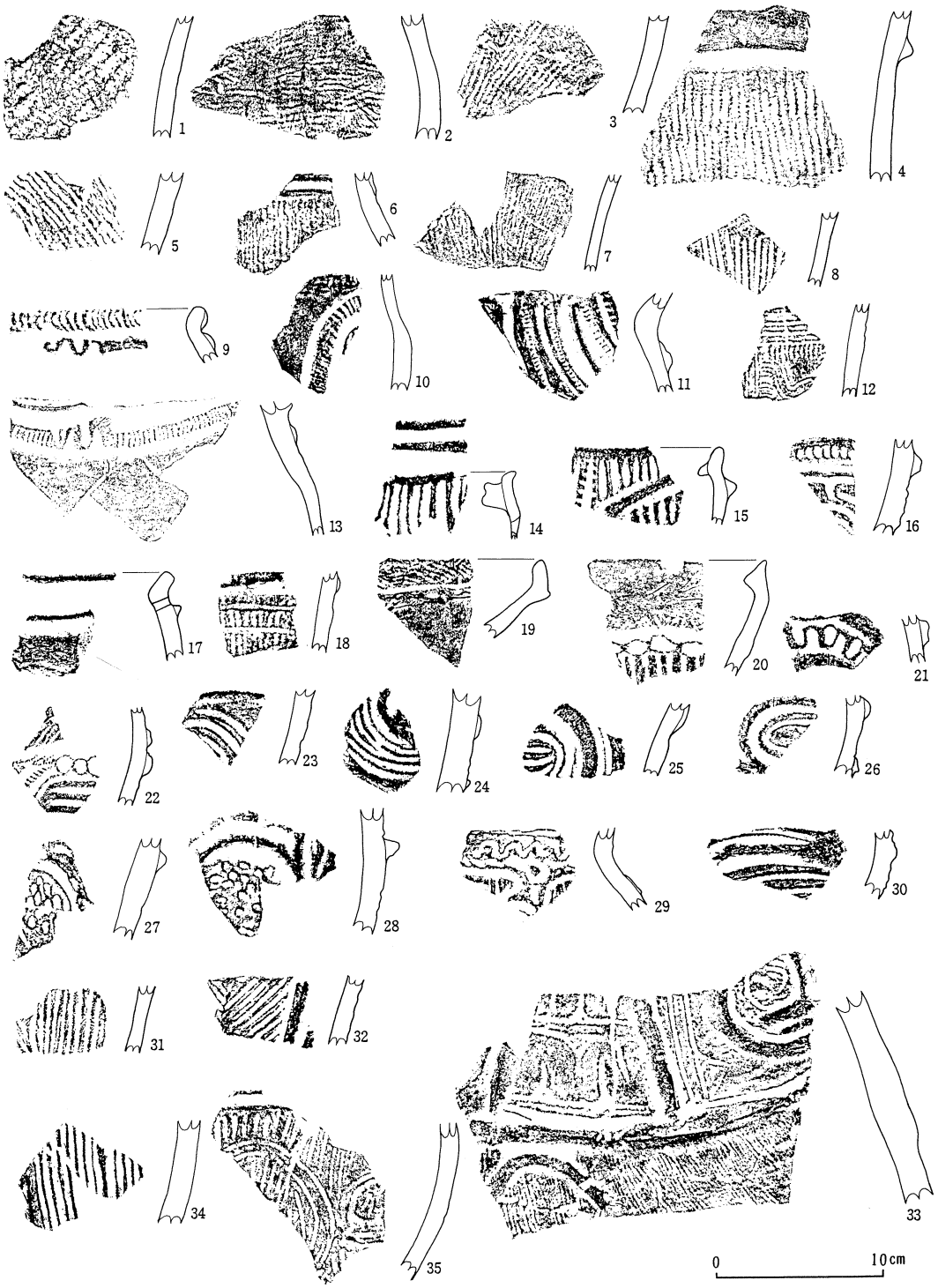
遺物（第8～11図、図版9・10）

縄文土器と石器、自然遺物として炭化材が炉址より出土している。土器は覆土及び床面から相当量出土した。このうち図示したものが26点、拓影が35点である。中期中葉から後葉の資料が出土したが、中葉のものが大半を占めた。第8図10、第10図23～28は、焼町式土器である。第8図10は、眼鏡状の環状突起をもつ。また第10図27・28は、隆帯による区画文の中に刺突が施されている。第8図1は、藤内式の浅鉢形土器の破片。9は、同時期の深鉢形土器の把手部の破片である。第10図9～16も同時期に帰属する。第9図1は、口縁部直径26.5cm、器厚0.9～1.9cmを測る井戸尻式の深鉢形土器である。口縁部から頸部にかけては無文で、頸部から胴部の張出部にかけてU字状に隆帯が貼付され、刻み目が付けられている。またその間に渦巻状の隆帯が施され、同様に刻み目が付されている。隆帯間には、沈線による渦巻文と三叉文が充填されている。7も、同様の文様構成がみられる。8は、隆帯による区画文の内側、及び隆帯に沿うかたちで、棒状工具による沈線が施文され、さらに縄文も施されている。また三叉文も確認される。第8図3は、図上復原で口縁部直径38.5cm、器厚1.0～1.8cmを測る大形の深鉢で、口唇部はほぼ直角に内曲している。口縁部から頸部にかけて器面を4区画に分けるかたちで、紐状の隆帯が貼付され、その部位に当たる口唇部には、直径1.2cm、深さ0.5cmの円錐状の穴が穿たれている。頸部及び胴部やや下方に、横位に隆帯が貼付され、頸部の隆帯には刻み目が施されている。頸部から下には縄文が施され、胴部下半部には、縦位、横位、渦巻文のほか、欠損しているため定かではないが、三叉文も沈線で施文されている。第9図4～6も井戸尻式期に比定される資料である。同図12は、深鉢形土器の口縁部の突起と破片と考えられる。表面には赤色の顔料が付着している。同図9は、隆帯と沈線による懸垂文が施された深鉢の底部の破片で、第10図29の隆帯による楕円区画文と波状沈線文が施文された破片や、同図32の綾杉状沈線が施文された資料と共に中期後葉に比定される。

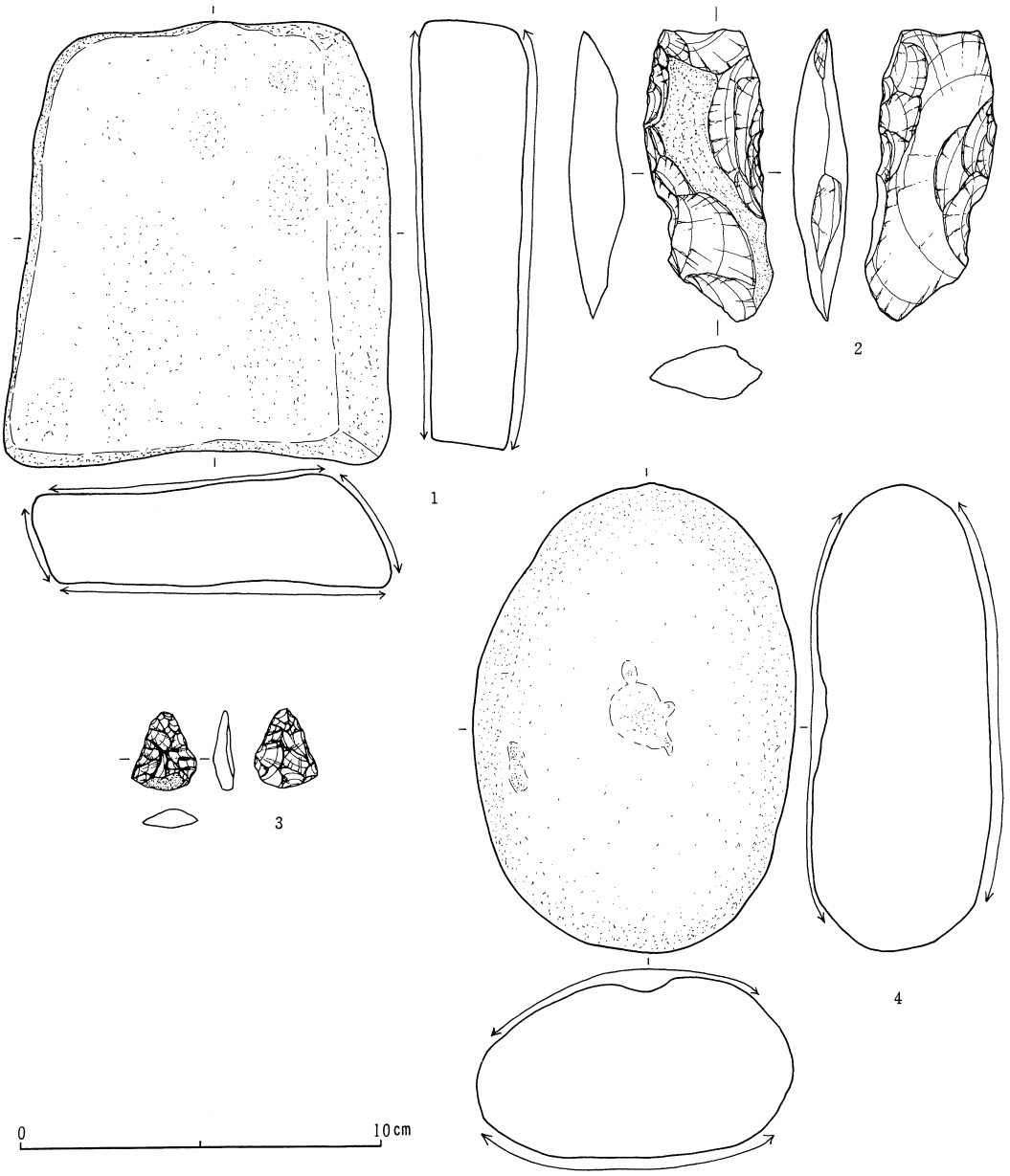
第８図　第１号住居址出土遺物(A)



第 9 図　第 1 号住居址出土遺物(B)



第10図　第１号住居址出土遺物(C)



第11図　第１号住居址出土遺物(D)

石器は４点出土した。黒曜石製の石鏃１点、安山岩製の石核１点、安山岩製の磨石２点である。本住居址は、出土土器から縄文時代中期中葉に位置付けられる。

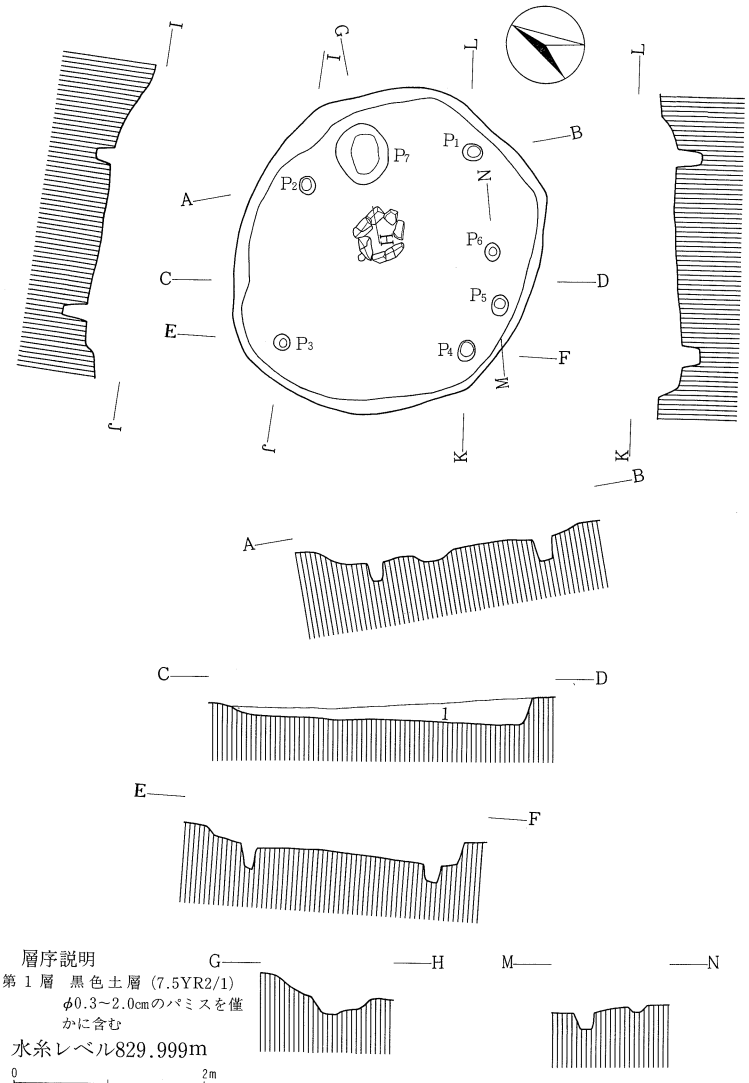
(2) 第２号住居址

遺構（第12･13図、図版１）

Ｂ－３グリッドに位置する。プランは、東西355cm、南北312cmの不整円形を呈する。壁高は９～28cmを測り、床面はやや軟弱で平坦な面をなす。

炉址は中央部北寄りにあり、炉石には厚い鉄平石が使用されていた。規模は、東西59cm、南北56cm、深さ16cmを測る。覆土からは灰、焼土が確認された。

ピットは７基検出された。P_1～P_5が深さ18～25cmを測り、主柱穴と考えられる。

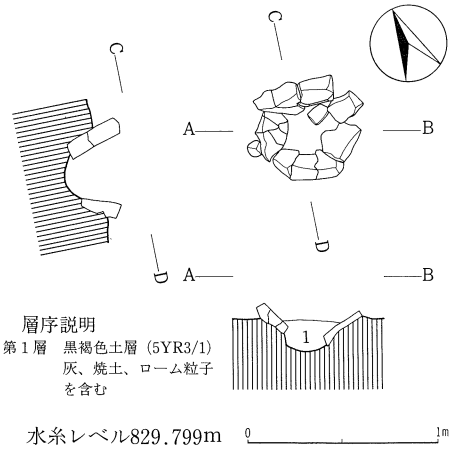


第12図　第２号住居址実測図

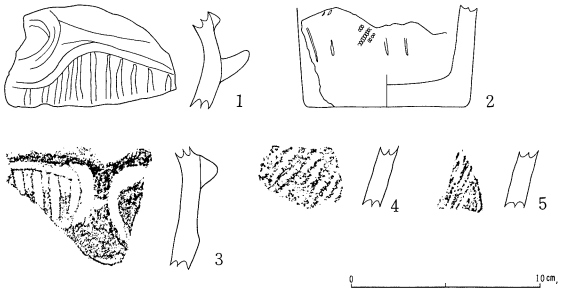
遺物（第14図）

縄文土器片が出土している。図示し得たものは２点、拓影が３点である。２は、沈線と縄文が施文された深鉢底部片、１・３は隆帯と沈線による区画文の中に、棒状工具により縦位の沈線が施文された唐草文系の深鉢形土器の胴部破片である。ほかに図示し得なかったが、混入したと考えられる繊維を多く含んだ前期の資料も１点出土した。また石器は出土しなかった。

本住居址の所産期は、プラン及び炉、数少ない土器から推して縄文時代中期後葉に位置付けられようか。



第13図　第2号住居址炉址実測図



第14図　第2号住居址出土遺物

(3)　第3号住居址

遺構（第15・16図、図版1）

Ｂ－4グリッドに位置する。第24・31号土坑、県埋蔵文化財センター調査分の住居址と重複関係を有し、そのいずれにも切られている。

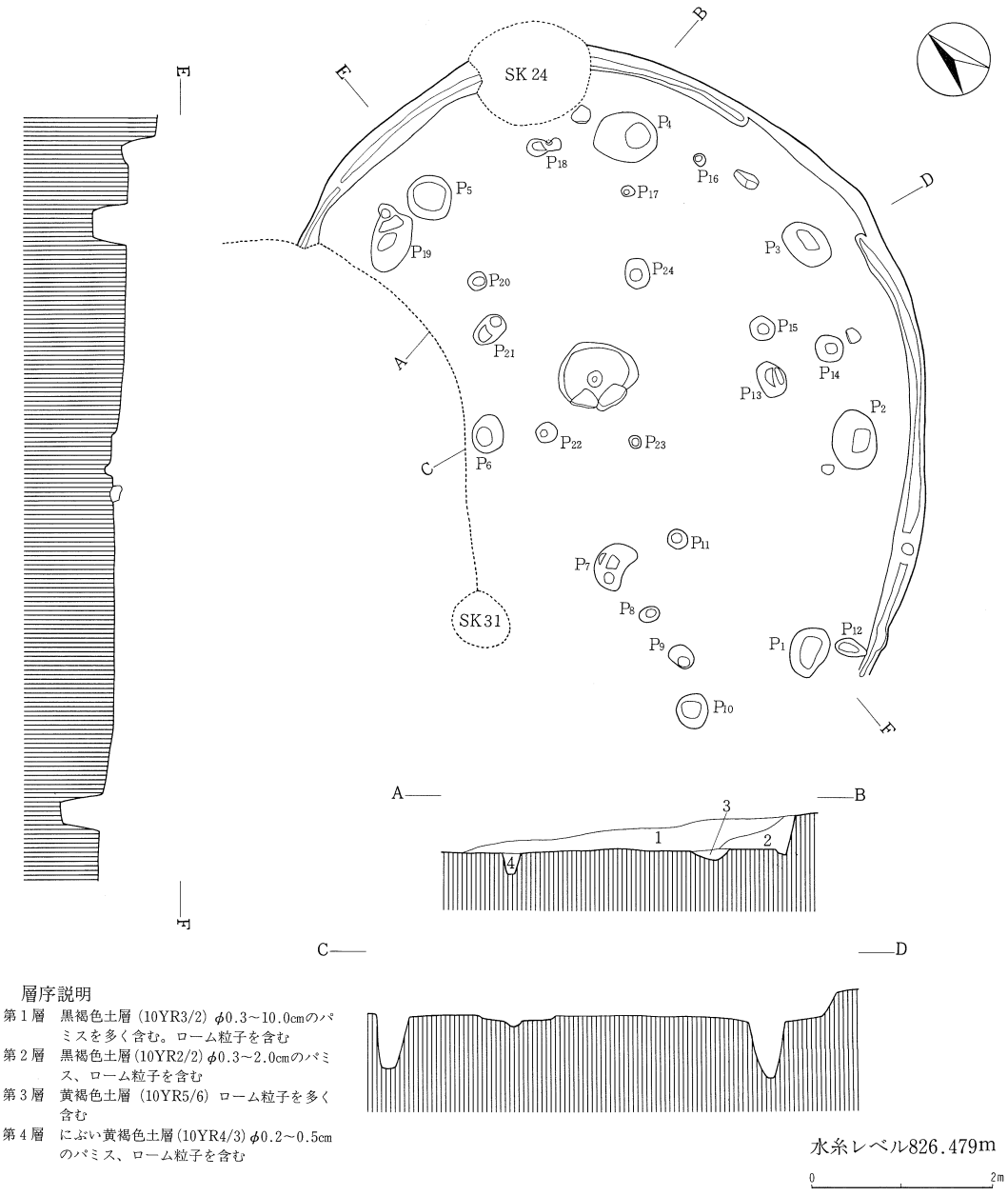
東西は残存部で527cm、南北817cmを測る。南から南西部にかけて壁及び床面が、後世の削平、耕作により確認できなかったが、円形プランを呈するものと考えられる。床面はやや軟弱であるが平坦な面をなす。壁高は最大で40cmを測る。壁溝は、壁の残存部の東側で約1.8mの間が途切れているが、他では確認された。その掘り込みは最も深い北側で27cmを測り、東から南側は浅く4cm前後である。

炉址は中央部やや北寄りにあり、その規模は長軸長92cm、短軸長72cmのやや歪んだ楕円形で、深さ11cmを測る。炉縁石に用いたと考えられる河原石2個が残っていた。炭化物、灰、焼土は確認されなかった。

ピットは23基検出された。このうち、P_1・P_2・P_3・P_4・P_5の5基が主柱穴と考えられる。深さは40～60cmを測り、P_1とP_5の間は不明であるが、5基がだいたい170cm前後の間隔で配置されている。

遺物（第17～19図、図版9・10）

縄文土器と石器が出土している。第18図1は、浅鉢形土器の突起部の破片で、直径3.3cmの孔をもつ新道式期の資料である。器面内側には赤色の塗料が僅かに残る。色調は内面、外面ともに、にぶい褐色を呈し、焼成はよくない。図示しなかったが、同一個体の破片も出土している。2・3は、無文の深鉢形土器の底部の破片で、胎土、焼成ともに1に似ている。4・5・6は、中期後葉の資料で、4は唐草文系の、5・6は沈線による区画文の中に縄文が施文された破片である。



層序説明

第１層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.3～10.0cmのパミスを多く含む。ローム粒子を含む

第２層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

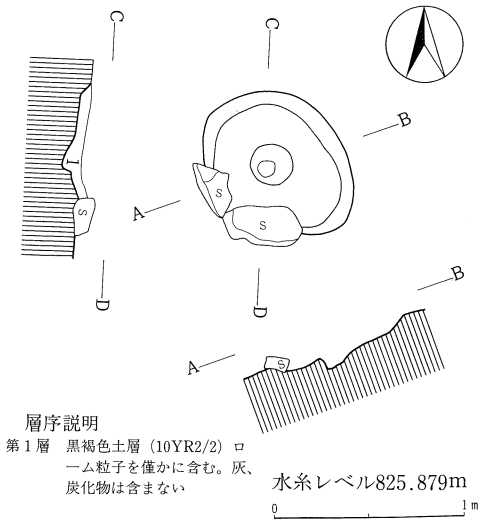
第３層　黄褐色土層（10YR5/6）ローム粒子を多く含む

第４層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

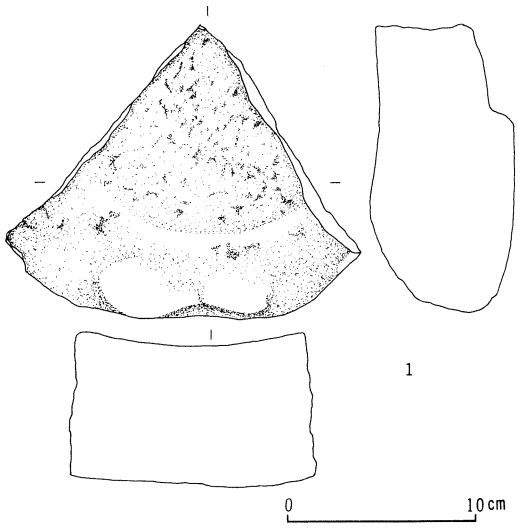
第15図　第３号住居址実測図

石器は、７点出土している。第17図は安山岩製の石皿、第19図１・２は、安山岩製スクレイパー、３～５は安山岩製の磨石である。

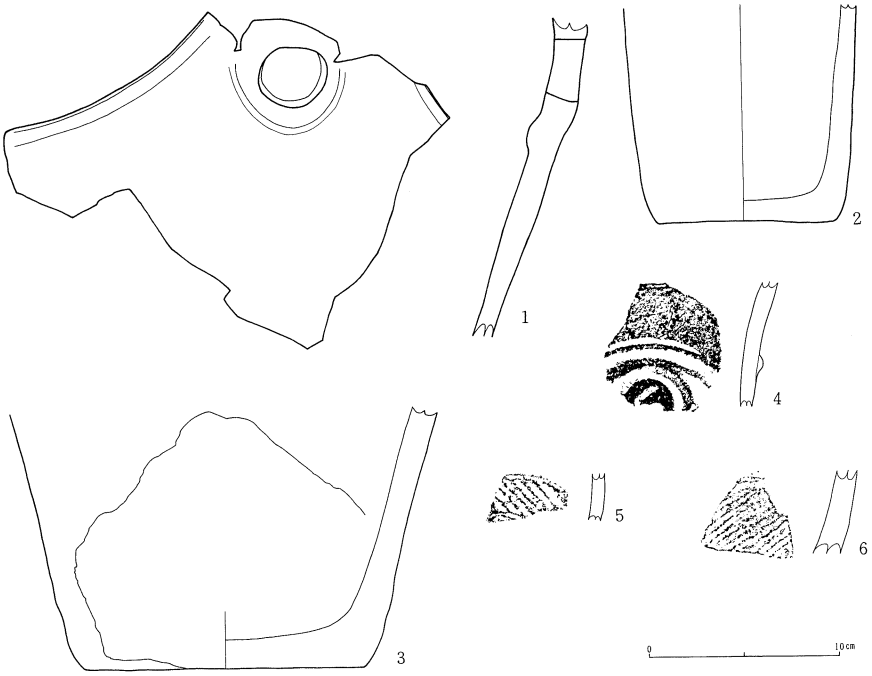
本住居址の所産期は、中期中葉から後葉の資料が得られたが、その出土状況から中期中葉に比定される。



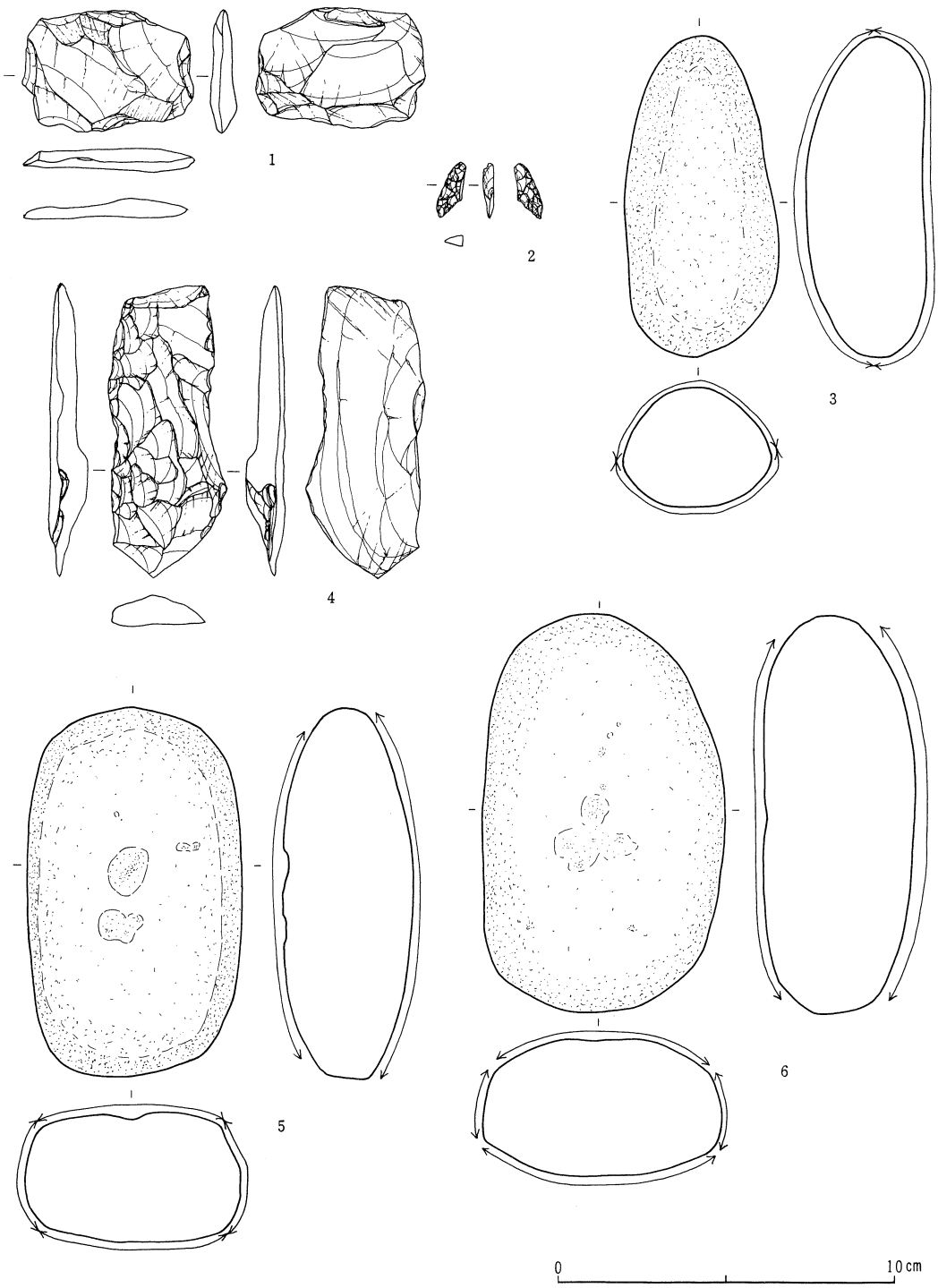
第16図　第３号住居址炉址実測図



第17図　第３号住居址出土遺物(A)



第18図　第３号住居址出土遺物(B)



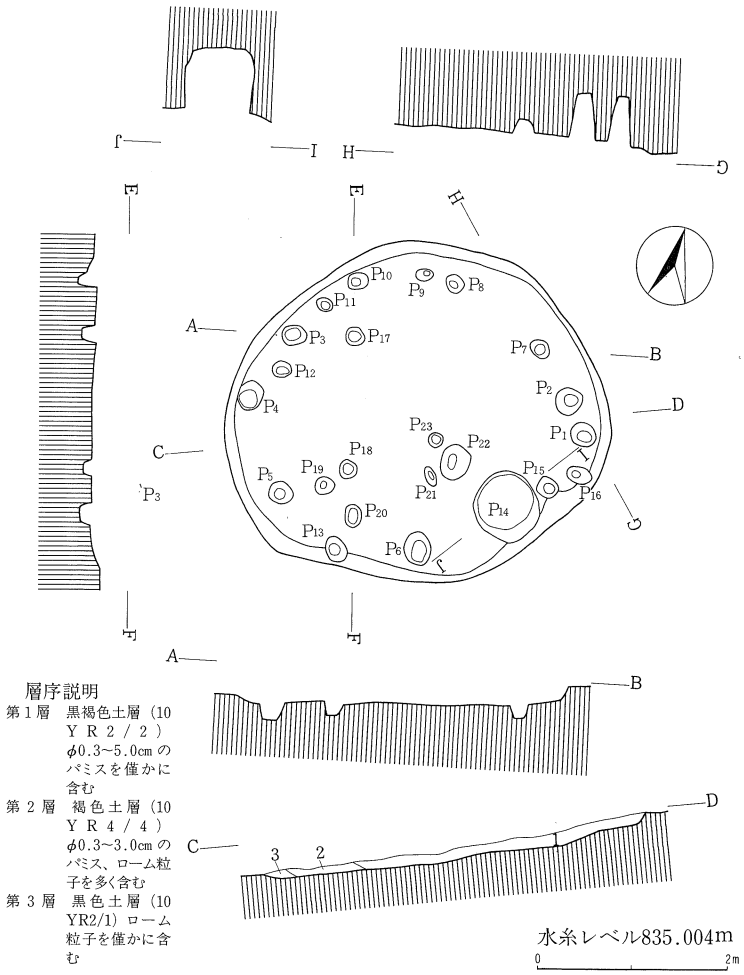
第19図　第３号住居址出土遺物(C)

(4) 第４号住居址

遺構（第20図、図版１）

本住居址は、Ｃ－１グリッドに位置する。平面形は、東西398cm、南北358cmの不整楕円形を呈する。他の遺構との重複関係はない。壁高は、傾斜上方、北東部で15cmを測るが、全般に後世の削平をかなり受け、西側では３cmを測る程度であった。床面は軟弱で、中央部に向かい緩く傾斜している。炉は、精査にもかかわらず確認されなかった。

ピットは23基が検出された。このうちP_1・P_2・P_6が深さ45～53cmを測り、柱穴と考えられるが、配置に規則性がみられず断定はできない。P_{14}は径77×70cmの不整円形を呈し、断面は円筒状をなす。床面からの深さは60cmに達し、覆土は、φ0.5～5.0cmのパミスを僅かに含む黒褐色土層（7.5YR3/2）であった。



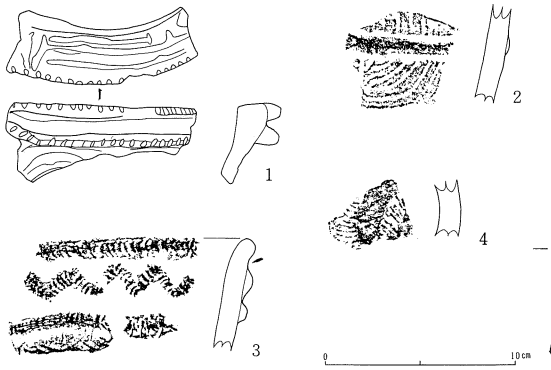
第20図　第４号住居址実測図

遺物（第21・22図、図版９・10）

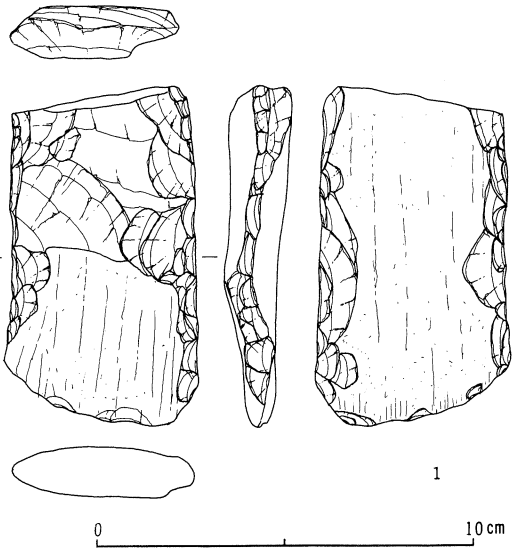
縄文土器と石器が出土している。第21図１は、深鉢形土器の装飾的な口縁部破片であろうか、焼成は固い。３・４は、中期中葉の藤内式期の破片である。隆帯を貼付した後、刻み目を付けている。３はP_{14}から出土した。４は、赤色の顔料が僅かに付着している。２は、隆帯を区画文とし、唐草文系の沈線を施文した中期後葉の土器片である。

石器は、粘板岩製の打製石斧が１点出土した。

本住居址の所産期は、中期中葉と後葉の資料が出土しているが、その状況から中期中葉に比定されよう。



第21図　第４号住居址出土遺物(A)



第22図　第４号住居址出土遺物(B)

(5)　第５号住居址

遺構（第23図、図版２）

Ｃ－２グリッドに位置し、第39号土坑により切られている。プランは、東西290cm、南北330cmの不整楕円形である。他の住居址同様、後世の削平を受け、壁高は８～11cmを残すにすぎない。

床面は平坦だが、軟弱である。

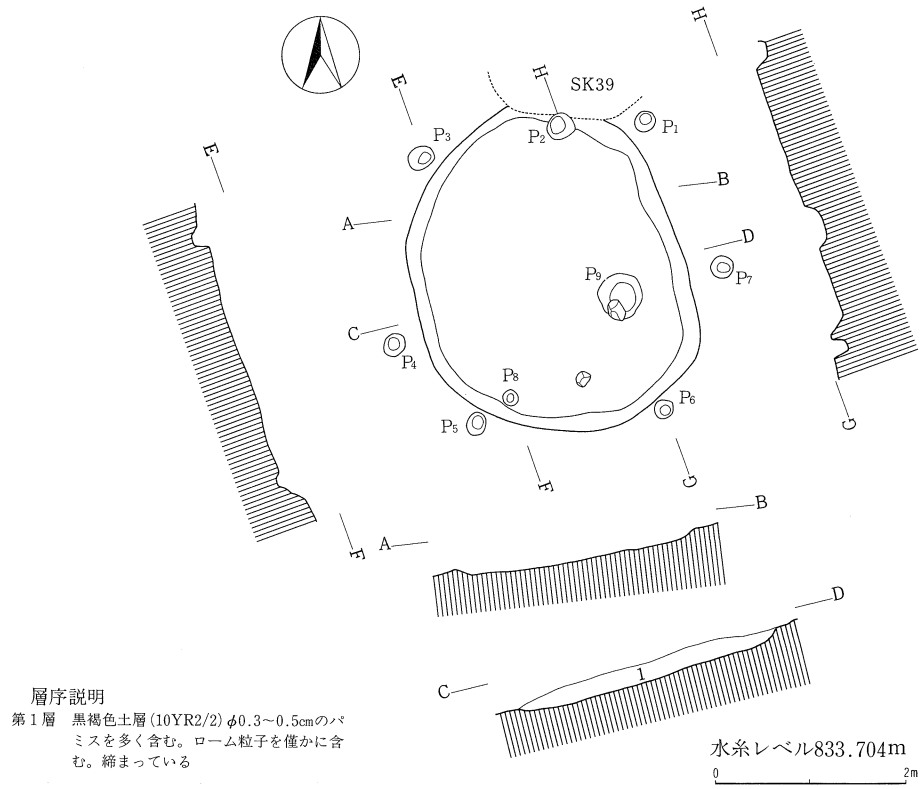
炉址は検出されず、また焼土・炭化物等も確認されなかった。ピットは、プラン内側で３基、周囲で６基検出された。周囲のピット間の距離は、98～178cmを測る。ピットはいずれも円形、もしくは不整円形を呈し、直径はP_8の16cm、P_9の48cmを除き、他は22～29cmである。掘り込みは、P_1が26cmを測るが、他はいずれも20cm未満と浅い。

遺物（第24図、図版10）

前期から後期の土器片が出土している。３・４・６～８・11は、前期の羽状縄文、斜縄文が主体の土器で、３を除き繊維を多く含む。１は、中期後葉の深鉢で口縁部に台形の突起をもち、胴部には波状沈線と縄文が施文されている。２は、深鉢形土器の把手で沈線と縄文が施されている。５・12～20は、沈線、隆線による渦巻文、方形区画文、および棒状工具による縦位沈線文が施文された中期後葉の土器片である。21・22は、後期前葉堀之内Ⅱ式期の資料で、前期の破片同様、混入したものと考えられる。

石器は出土しなかった。

本住居址の所産期は、中期後葉に比定されよう。



第23図　第5号住居址実測図

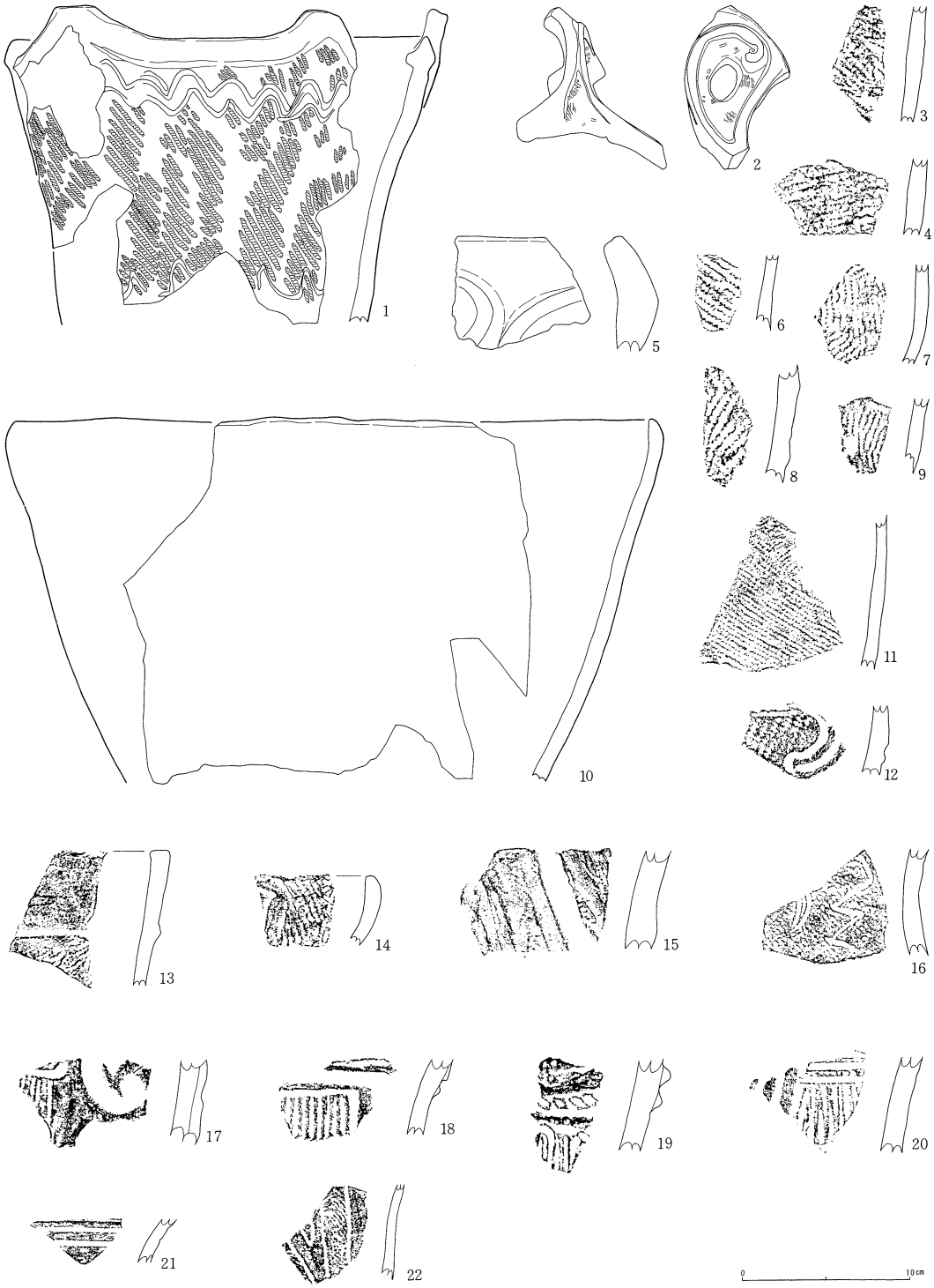
(6)　第6号住居址

遺構（第25・26図、図版2）

本住居址は、D－1グリッドにおいて検出された柄鏡形の敷石住居址である。調査区の境界で検出されたため、北側が一部、未発掘となった。また後世の削平を受けたため、壁は主体部東側で確認されたにとどまり、張出部では一切みられなかった。敷石は、東から北側にかけての壁下に多く、他の床面からは検出されなかった。これは当初から敷かれなかったか、廃棄する際に抜き取ったか、あるいは先に記した耕作・浸食によるためかのいずれかが考えられる。

炉址は、主体部中央に検出された。規模は、東西95cm、南北87cm、深さ19cmを測る。覆土からは、炭化物、焼土が僅かに検出された。石囲炉であったとも考えられるが、炉址内にかかっていた石には、カーボンは付着していなかった。

ピットは、35基検出された。殆どが壁下をめぐるかたちで穿たれている。径は8～37cmを測るが、25cm前後のものが多い。深さは、5～66cmを測る。このうち、P_1～P_3・P_8・P_{10}・P_{14}の6基が40cm以上あり、またその配置から主柱穴とみられる。



第24図　第５号住居址出土遺物

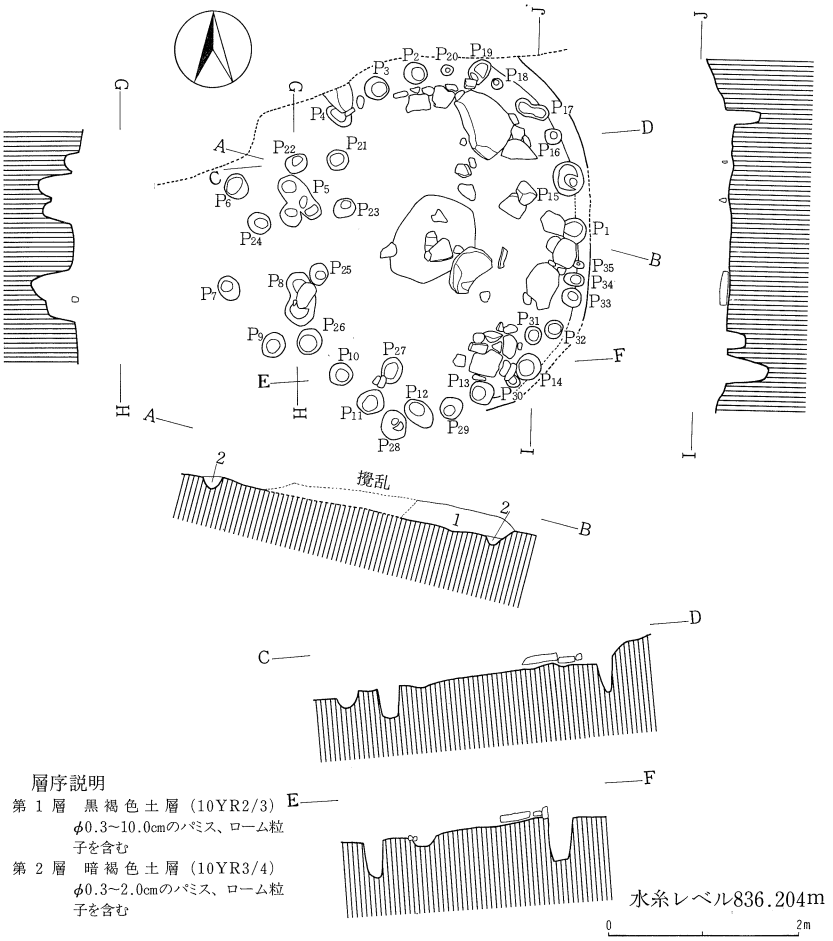
遺物

（第27・28図、図版9・10）

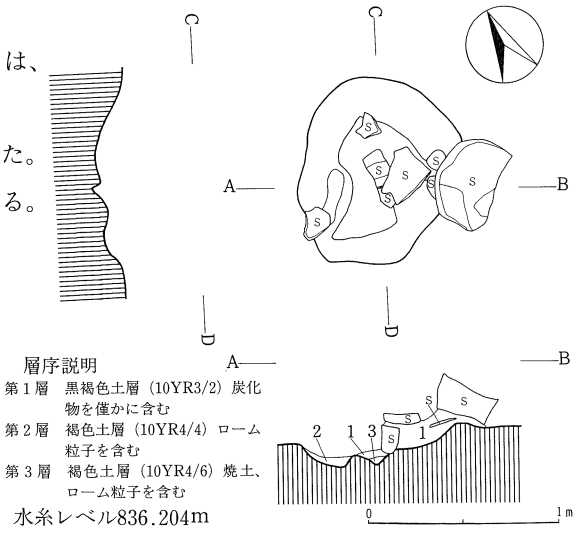
縄文土器、石器、炉址より炭化物が出土している。土器は、後期前半のものが大半を占めたが、4の前期の繊維を多く含む斜縄文の破片や、3の中期後葉の同心円文が施文された資料も出土した。1は、口径5.1cm、器高3.4cm、底径2.2cmを測る高杯状の土器で、沈線による同心円文と、U字状沈線が5単位、花弁状に施文されている。同図5・6は、精製土器の破片で、5は櫛歯状工具による条線文が施されている。2・7は、深鉢形土器の底部、8・9は、堀之内II式期の胴部破片である。

石器は、4点出土し、いずれも磨石であった。

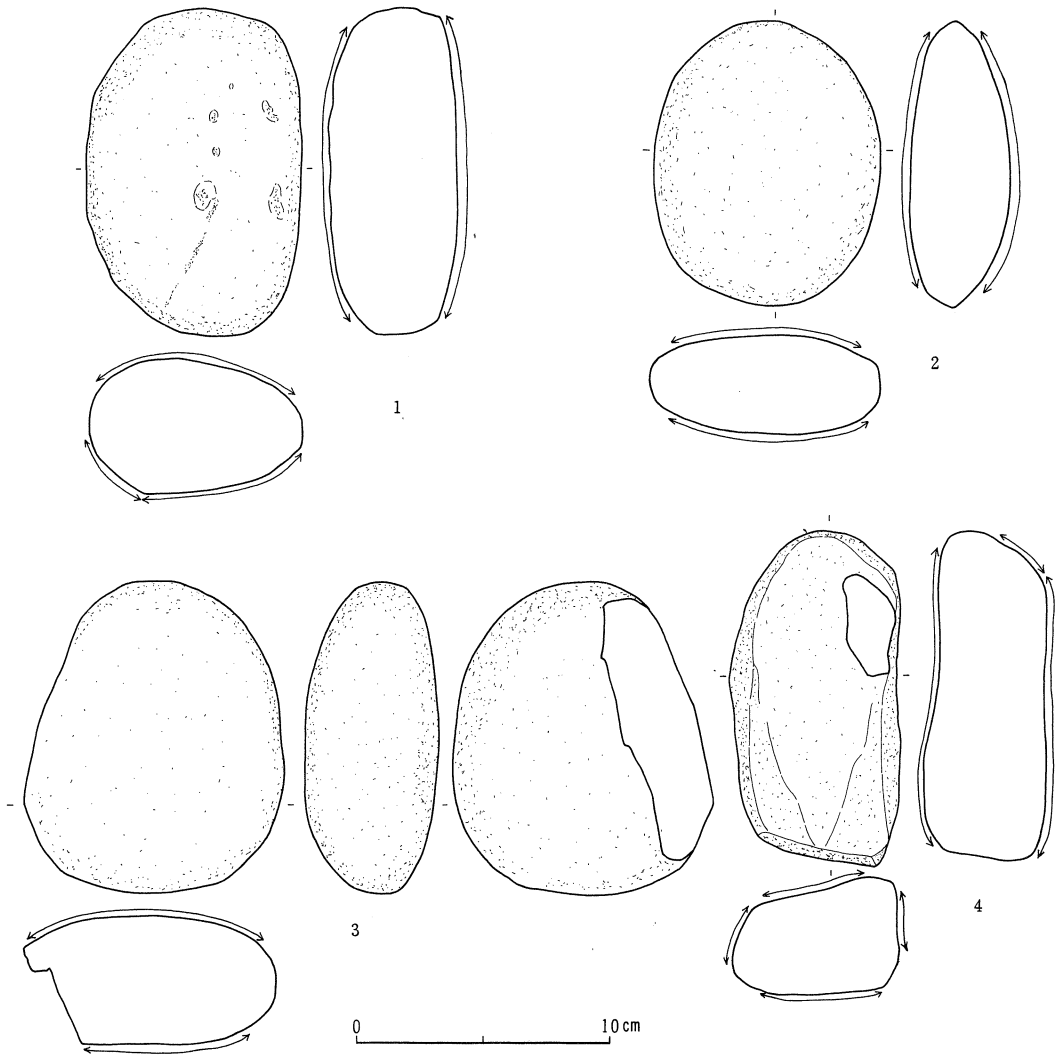
本住居址の所産期は、後期前葉に比定される。



第25図　第6号住居址実測図



第26図　第6号住居址実測図



第27図　第６号住居址出土遺物(A)

(7)　第７号住居址

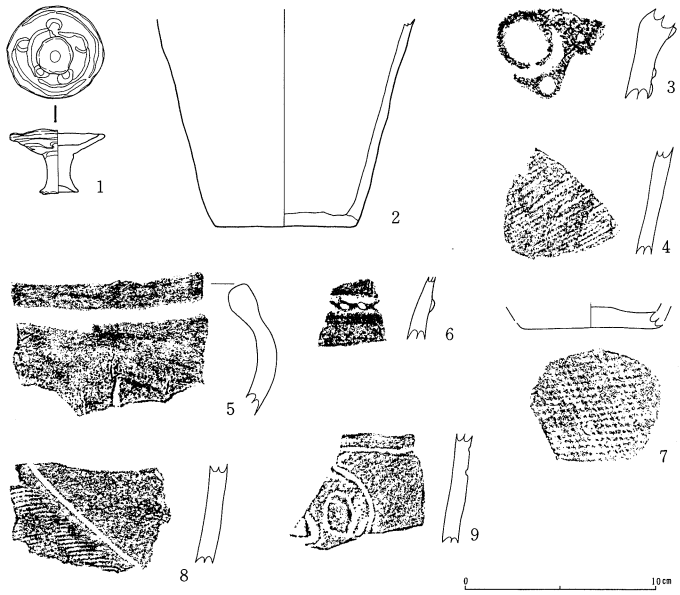
遺構（第29図、図版２）

本住居址は、調査区の南西部の隅、Ａ－３グリッドにおいて検出された。他の遺構との重複関係はなかった。プランは東西383cm、南北394cmでほぼ正円形をなしており、壁高は８～35cmを測る。壁溝は認められず、床面は平坦だが堅緻な面はみられなかった。また、焼土等は検出されず、炉址は確認できなかった。

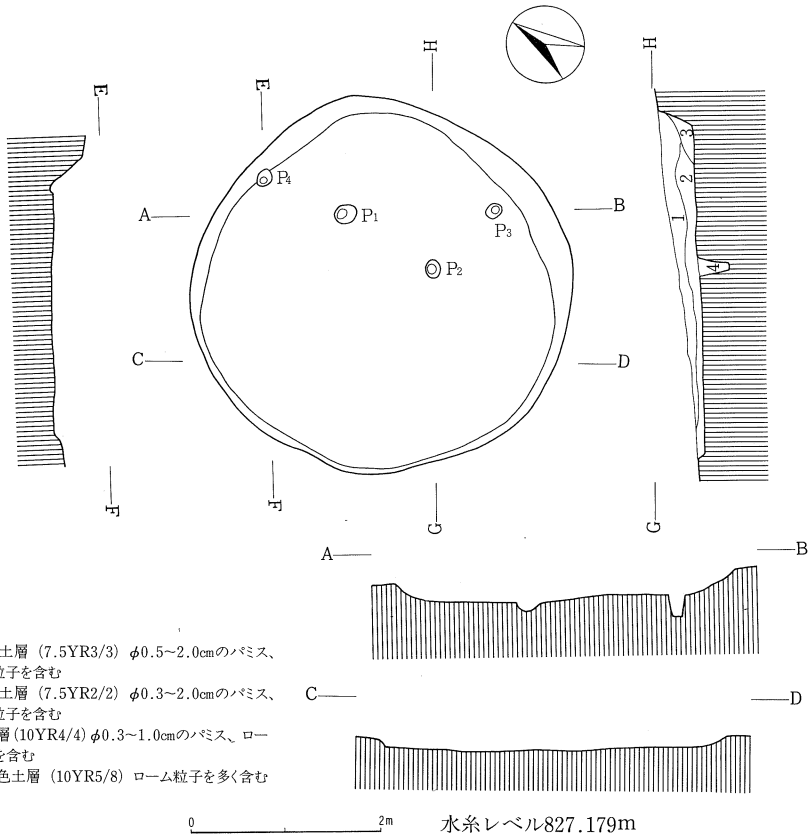
ピットは４基が検出された。P_2は深さ34cm、P_3は24cmを測り柱穴の可能性も考えられるが、P_1・P_4については不明である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。



第28図　第６号住居址出土遺物(B)



層序説明

第１層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0㎝のパミス、ローム粒子を含む

第２層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.3～2.0㎝のパミス、ローム粒子を含む

第３層　褐色土層(10YR4/4)φ0.3～1.0㎝のパミス、ローム粒子を含む

第４層　明黄褐色土層（10YR5/8）ローム粒子を多く含む

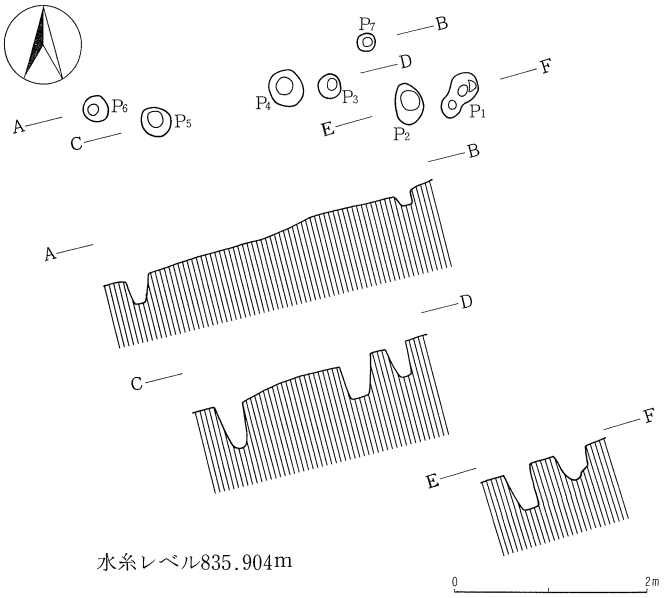
第29図　第７号住居址実測図

2　ピット群

(1)　第1号ピット群

遺構（第30図、図版3）

D－1グリッドに位置する。7基のピットよりなる。径21～38cm、深さ15～46cmを測る。他の遺構との重複関係はない。覆土は、黒褐色土が大半で、ローム粒子、パミスを含む。

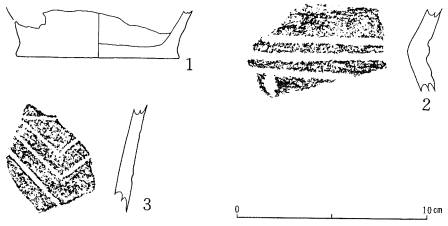


水糸レベル835.904m

第30図　第1号ピット群実測図

遺物（第31図）

縄文土器片が3点出土している。1は、P_1出土の深鉢形土器の底部片、2は、P_6から出土した中期後葉、唐草文系の深鉢の胴部片、3は、P_5より出土した後期堀之内II式の深鉢の土器片である。他に図示し得なかったが、前期の羽状縄文が施文された土器片が、P_4から出土している。



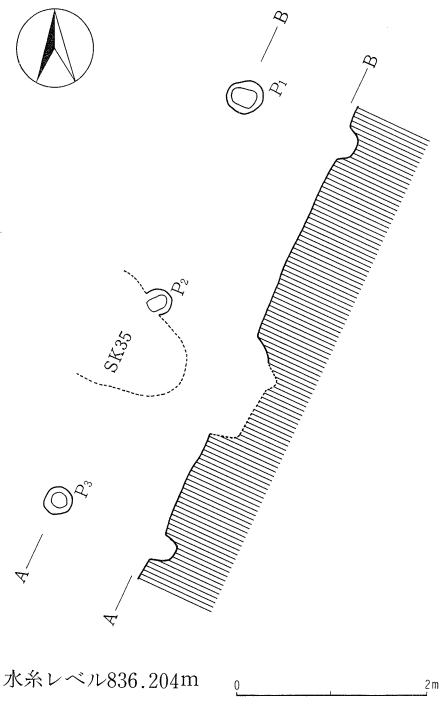
第31図　第1号ピット群出土遺物

本遺構の所産期は、遺物が混在しているため明確でない。

(2)　第2号ピット群

遺構（第31図、図版3）

D－1グリッドに位置し、3基のピットよりなる。P_2が、第35号土坑に切られている。径は、31～40cm、深さ18～25cmを測る。覆土は、暗褐色を呈し、ローム粒子、パミスを含む。



水糸レベル836.204m

第32図　第2号ピット群実測図

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、第35号土坑より、縄文時代後期

前葉の土器片が多く出土していることから、それ以前といえよう。

(3) 第3号ピット群

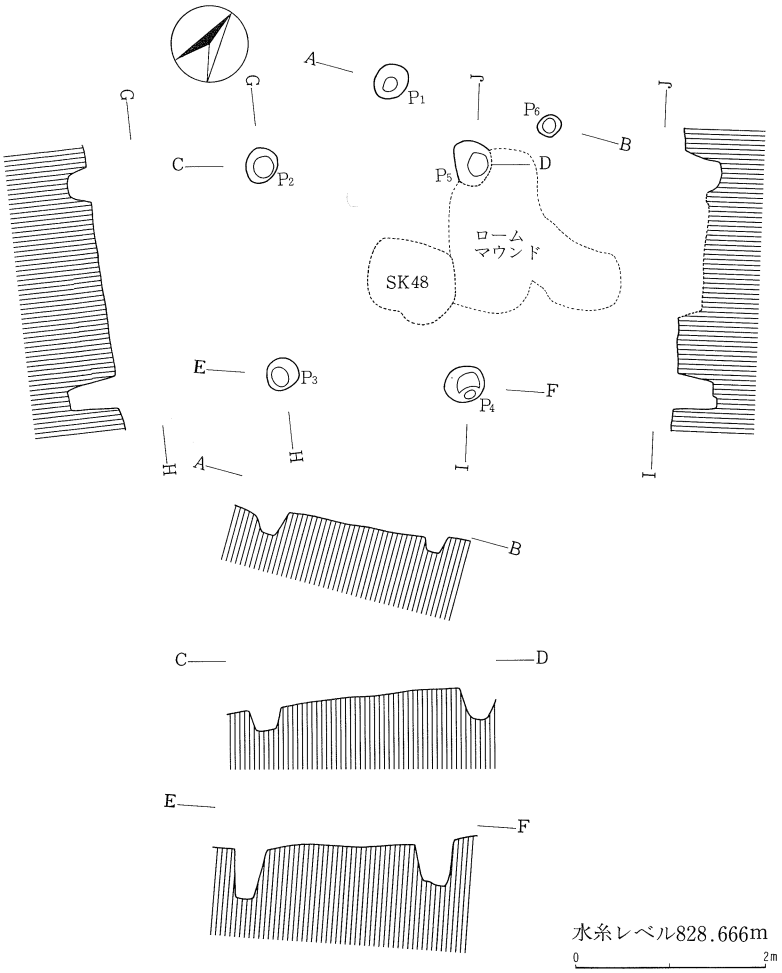
遺構（第33図、図版3）

A・B－3グリッドに位置し、6基のピットよりなる。P_5がロームマウンドに切られている。径は、22～44cm、深さ16～55cmを測る。

覆土は、暗褐色を呈し、ローム粒子、パミスを含む。

遺物

出土遺物は皆無で、その所産期も明確でない。



第33図　第3号ピット群実測図

3　土　　坑

遺構（第34～41図、図版4～8）

本遺跡からは、総計49基の土坑が検出された。分布状況は、南西部で密であったが、ほぼ全域で確認された。詳細は第2表に示した。土坑のうち、重複関係のあるものは、第24・31・35・39・48号土坑の5基である。第24号土坑は、第3号住居址を切り、第31号土坑は、第3号住居址の覆土中に掘り込まれ、さらに県埋蔵文化財センター調査分の住居址を切っている。第35号土坑は、第2号ピット群のP_2を切っている。また第39号土坑は、第5号住居址を切り、第48号土坑は、ローマウンドに切られている。

遺物（第42～46図、図版11）

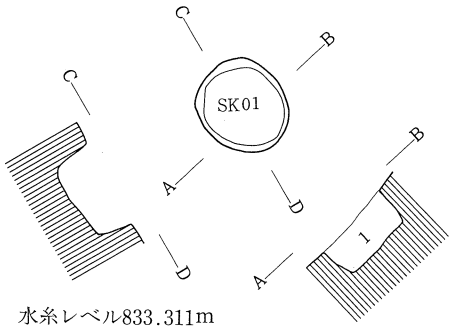
遺物は縄文土器と石器が出土している。土器片は総数317点を数えたが、無文のもの、摩滅して文様が定かでない破片も多かった。ここでは8点を図示し、52点の拓影を載せた。第7号土坑か

第2表　土坑一覧表

土坑No.	平面形	規模(cm)			長軸方位	出土遺物	備考
		東西	南北	深さ			
1	不整楕円形	99	100	36～43	N—32°—W	縄文土器片3	
2	不整楕円形	115	112	34～42	N—27°—E	縄文土器片2	
3	不整円形	99	97	28～37	N—18°—E	なし	
4	不整長楕円形	118	147	67～76	N—35°—E	なし	
5	不整楕円形	119	125	30～38	N—34°—W	なし	
6	不整台形	158	171	10～42	N—51°—W	縄文土器片1	
7	不整長楕円形	120	231	30～54	N— 6°—W	縄文土器片3	
8	不整円形	127	116	16～26	N—81°—W	なし	
9	不整楕円形	65	54	37～42	N—75°—E	なし	
10	不整隅丸長方形	139	248	19～36	N— 5°—E	縄文土器片17	
11	不整円形	161	176	40～57	N— 5°—E	縄文土器片71、打製石斧1	
12	不整円形	100	110	11～20	N—38°—W	縄文土器片4	
13	不整円形	44	45	12～18	N—43°—W	なし	
14	不整円形	94	98	83～86	N—15°—W	縄文土器片4、多孔石1	
15	不整円形	181	169	88～112	N—60°—W	縄文土器片28	
16	不整円形	130	129	12～34	N—76°—E	縄文土器片1	
17	不整円形	130	126	76～88	N—47°—E	縄文土器片35、打製石斧1、スクレイパー1	
18	不整長楕円形	73	99	9～18	N—24°—E	縄文土器片1	
19	不整楕円形	76	67	32～40	N—52°—E	なし	
20	不整楕円形	49	58	16～20	N—50°—W	なし	
21	不整楕円形	92	67	39～54	N—75°—E	縄文土器片3	
22	不整楕円形	81	76	52～58	N—76°—W	縄文土器片4	
23	不整楕円形	61	47	24～28	N—67°—W	縄文土器片2	
24	不整円形	131	126	39～66	N—81°—W	縄文土器片27	第3号住居址と重複
25	不整楕円形	85	94	34～46	N— 2°—W	縄文土器片5	
26	不整楕円形	83	71	16～26	N—88°—E	なし	
27	不整楕円形	39	43	18～20	N— 7°—E	縄文土器片1	
28	不整楕円形	85	93	18～24	N—17°—E	縄文土器片4	
29	不整円形	37	37	23～24	N—29°—W	なし	

土坑No.	平面形	規模(cm)			長軸方位	出土遺物	備考
		東西	南北	深さ			
30	不整長楕円形	112	206	48～66	N—23°—W	なし	
31	不整楕円形	57	69	51～54	N—1°—W	縄文土器片2	第3号住居址と重複
32	不整楕円形	94	67	17～28	N—59°—E	なし	
33	不整円形	19	30	30～34	N—43°—W	なし	
34	不整長楕円形	114	145	39～47	N—38°—W	縄文土器片46	
35	不整楕円形	131	137	33～44	N—47°—W	縄文土器42	第2号ピット群と重複
36	(不整楕円形)	(121)	(42)	32～40	N—78°—W	縄文土器片4、石鏃1	
37	(不整形)	(160)	(115)	5～24	(N—74°—E)	縄文土器片2、磨石	
38	不整円形	30	25	31～32	N—56°—W	なし	
39	不整長楕円形	164	108	11～36	N—73°—E	なし	第5号住居址と重複
40	(不整楕円形)	(135)	(120)	20～50	N—35°—E	縄文土器片1	
41	不整長楕円形	151	97	67～80	N—73°—E	なし	
42	不整楕円形	74	73	47～50	N—35°—W	なし	
43	不整楕円形	107	107	18～23	N—40°—E	なし	
44	不整長楕円形	60	76	41～44	N—16°—W	なし	
45	不整楕円形	64	73	32～33	N—24°—W	なし	
46	不整長楕円形	79	39	12～20	N—70°—E	縄文土器片1	
47	(不整長楕円形)	(206)	(123)	18—36	N—68°—E	縄文土器片2	
48	(不整楕円形)	(102)	(88)	28～35	N—65°—W	なし	ローム マウンドと重複
49	(不整形)	(142)	(151)	36～43	N—15°—E	縄文土器片2	

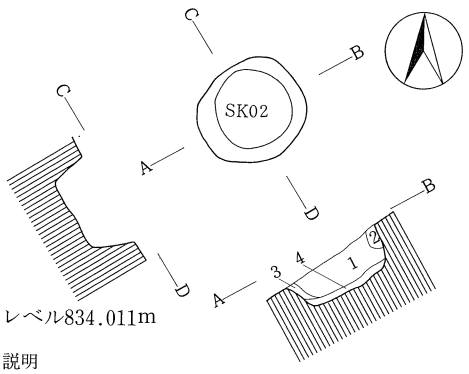
らは、波状沈線文と爪形文が施された中期中葉藤内式の土器片が出土している。第10号土坑からは、中期中葉から後葉の破片が出土した。第43図2は、器厚2cmを測る中葉の深鉢形土器の破片である。第11号土坑からは、前期前半から、後期前半までの資料が出土した。第43図14は、半截竹管工具による平行沈線内に爪形文が施文された前期後半諸磯式期の土器片。第12・15号土坑からは、前期の羽状縄文の土器片が出土している。第14号土坑からは、堀之内II式の破片のほかに、中期の把手部と思われる小片が出土している。第17号土坑からは、第42図4・5の曽利V式の深鉢形土器のほか、中期中葉から後葉の土器片が出土した。第22号土坑からは、中期後葉曽利III・IV式期の資料と、第42図7の藤内式の土器片が出土。第24号土坑からは、中期中葉藤内式の隆帯による区画文内に、半截竹管状工具による沈線が充塡された破片が2点出土したほか、後期堀之内II式の小片も出土。第25号土坑からは、第42図8の堀之内II式の土器片が出土した。第28号土坑からは、中期後葉の隆帯を貼付した後、沈線を施文した破片と、横位に沈線を施した口縁部の小片が出土した。第31号土坑からは、前期前半の繊維を含む破片が2点出土。第34・35号土坑か



水糸レベル833.311m

層序説明

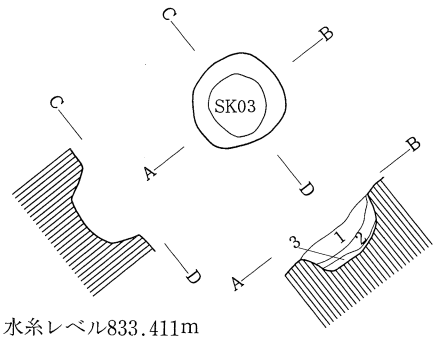
第1層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.5～6.0cmのパミス、ローム粒子を含む



水糸レベル834.011m

層序説明

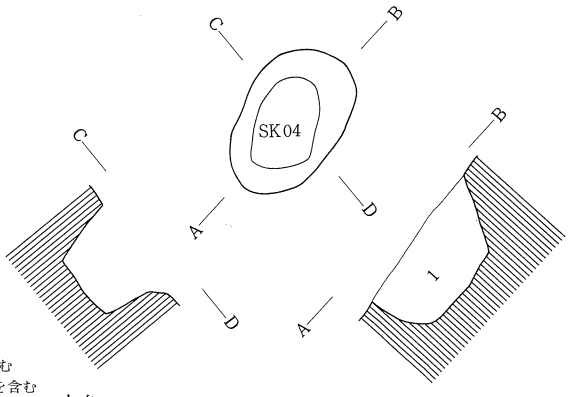
第1層　黒色褐色（7.5YR1.7/1）φ0.5～5.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～5.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む
第4層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～3.0cmのパミスを含む



水糸レベル833.411m

層序説明

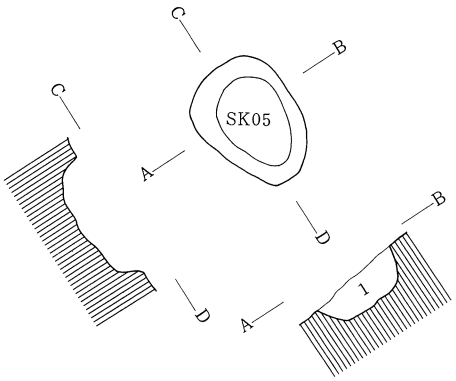
第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミスを含む。炭化物を含む



水糸レベル830.299m

層序説明

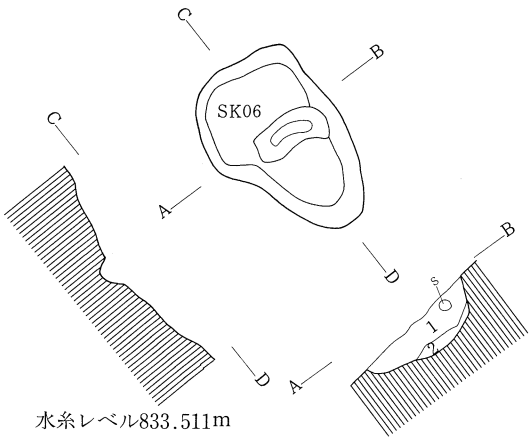
第1層　黒褐色土層（10YR2/2）ローム粒子、φ0.5～15.0cmのパミスを含む



水糸レベル833.811m

層序説明

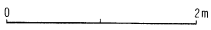
第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～4.0cmのパミスを僅かに含む



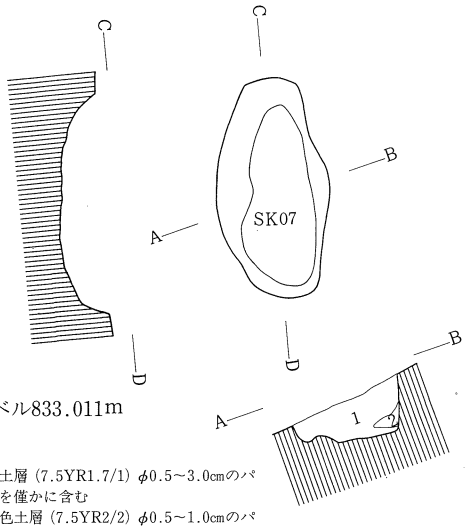
水糸レベル833.511m

層序説明

第1層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.3～3.0cmのパミスを含む
第2層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～3.0cmのパミスを僅かに含む

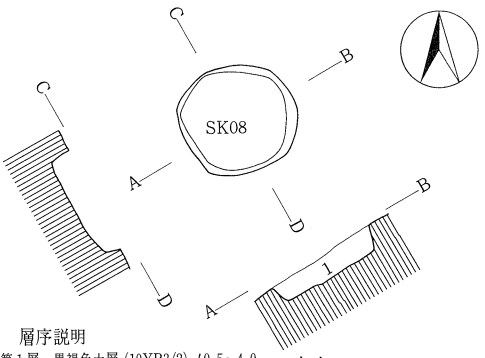


第34図　第1～6号土坑実測図



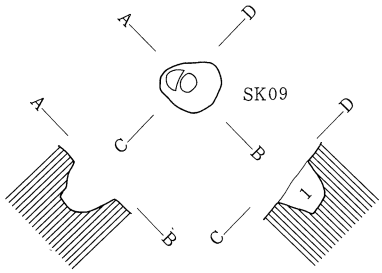
水糸レベル833.011m

層序説明
第１層　黒色土層（7.5YR1.7/1）φ0.5～3.0㎝のパミスを僅かに含む
第２層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～1.0㎝のパミス、ローム粒子を含む



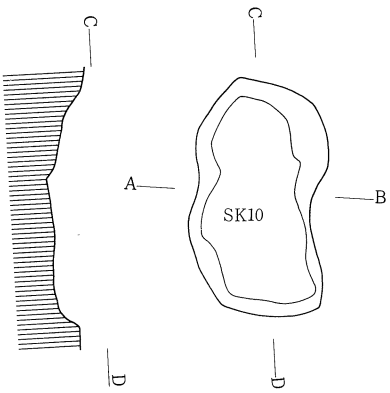
層序説明
第１層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.5～4.0㎝のパミスを僅かに含む

水糸レベル830.799m



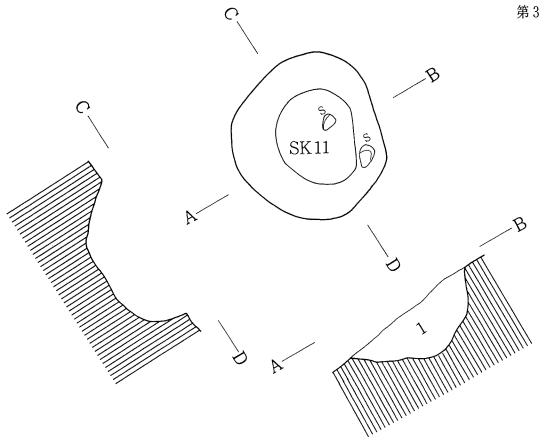
水糸レベル830.199m

層序説明
第１層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～4.0㎝のパミス、ローム粒子を含む



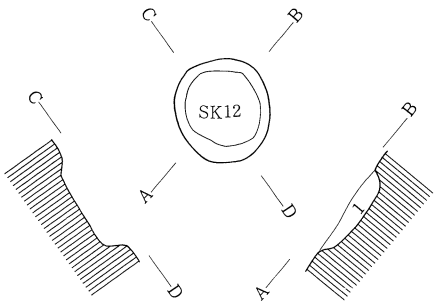
水糸レベル827.479m

層序説明
第１層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～6.0㎝のパミスを含む
第２層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）φ0.3～10㎝のパミス、ローム粒子を含む
第３層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.2～0.5㎝のパミス、ローム粒子含む



水糸レベル826.779m

層序説明
第１層　黒褐色土層（7.5YR3/1）φ0.2～1.0㎝のパミス、ローム粒子を含む

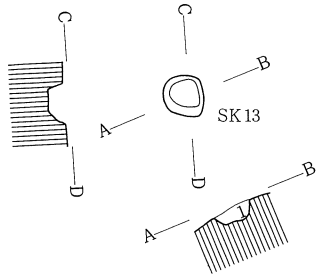


水糸レベル827.679m

層序説明
第１層　黒褐色土層（7.5YR3/1）φ0.2～8.0㎝のパミスを含む

0　2m

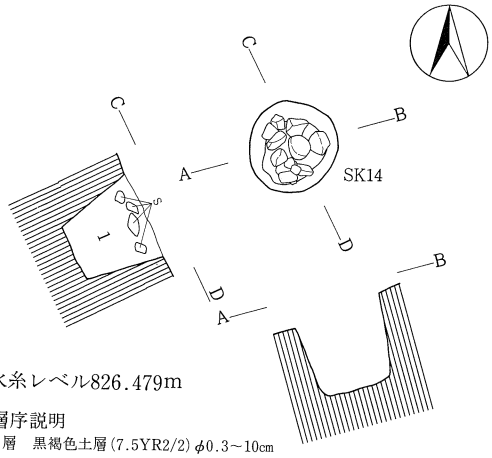
第35図　第７～12号土坑実測図



層序説明

第１層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.3～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む

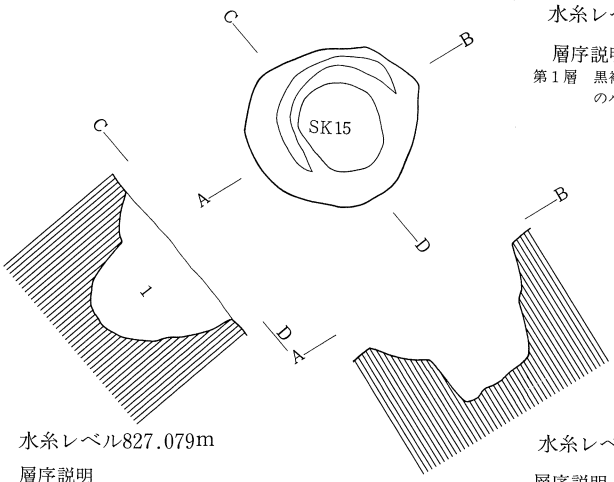
水糸レベル826.879m



水糸レベル826.479m

層序説明

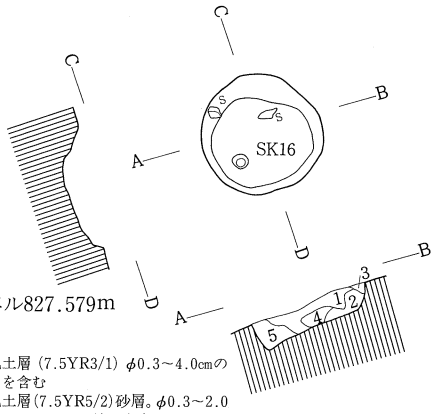
第１層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.3～10cmのパミスを含む



水糸レベル827.079m

層序説明

第１層　黒褐色土層（7.5YR2/1）φ0.3～8.0cmのパミス、ローム粒子、砂を含む



水糸レベル827.579m

層序説明

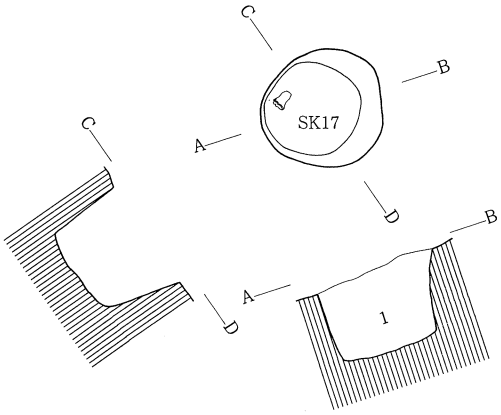
第１層　黒褐色土層（7.5YR3/1）φ0.3～4.0cmのパミスを含む

第２層　灰褐色土層(7.5YR5/2)砂層。φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第３層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～1.0cmのパミスを含む

第４層　褐色土層（7.5YR4/6）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

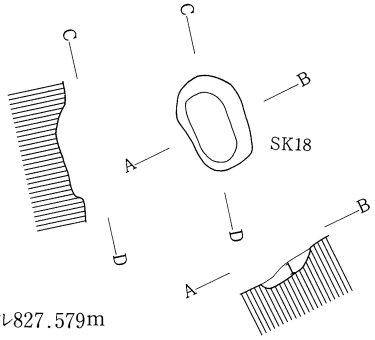
第５層　黒褐色土層（7.5YR3/1）φ0.2～5.0cmのパミス、ローム粒子を含む



水糸レベル827.279m

層序説明

第１層　黒褐色土層（7.5YR2/1）φ0.3～8.0cmのパミス、ローム粒子、砂を含む



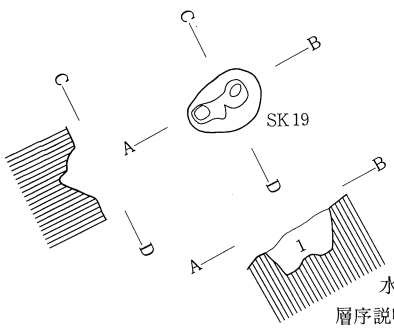
水糸レベル827.579m

層序説明

第１層　灰褐色土層（7.5YR4/2）φ0.3～5.0cmのパミスを含む

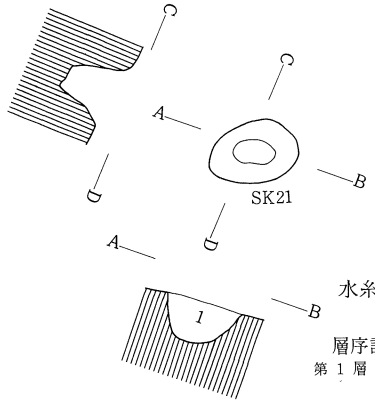
0　2m

第36図　第13～18号土坑実測図



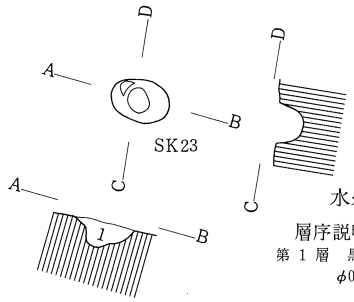
水糸レベル827.379m

層序説明
第１層　黒褐色土層（7.5YR3/1）
φ0.3～8.0cmのパミス、ローム粒子を含む



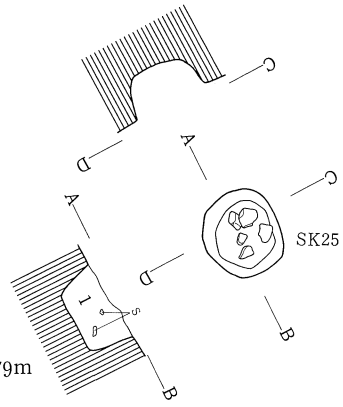
水糸レベル827.679m

層序説明
第１層　黒色土層（7.5YR2/1）
φ0.3～0.6cmのパミス、ローム粒子を含む



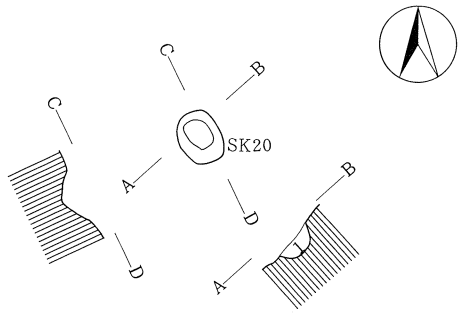
水糸レベル827.279m

層序説明
第１層　黒色土層（7.5YR2/1）
φ0.3～3.0cmのパミスを含む

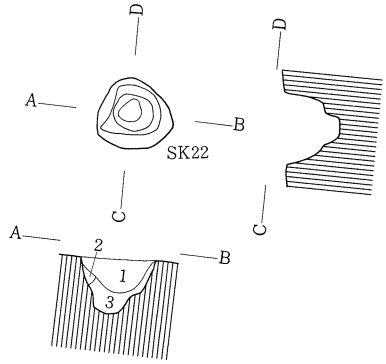


水糸レベル826.879m

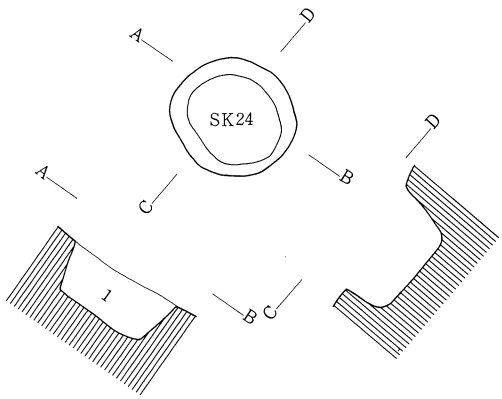
層序説明
第１層　黒色土層（7.5YR2/1）
φ0.5～10.0cmのパミスを含む



水糸レベル826.979m　層序説明
第１層　黒褐色土層（7.5YR3/1）
φ0.3～6.0cmのパミス、ローム粒子を含む



水糸レベル827.679m　層序説明
第１層　黒色土層（10YR2/1）
φ0.5～1.5cmのパミスを僅かに含む
第２層　オリーブ褐色土層（2.5YR4/3）砂、ローム粒子を含む
第３層　暗褐色土層（10YR3/3）ローム粒子を僅かに含む

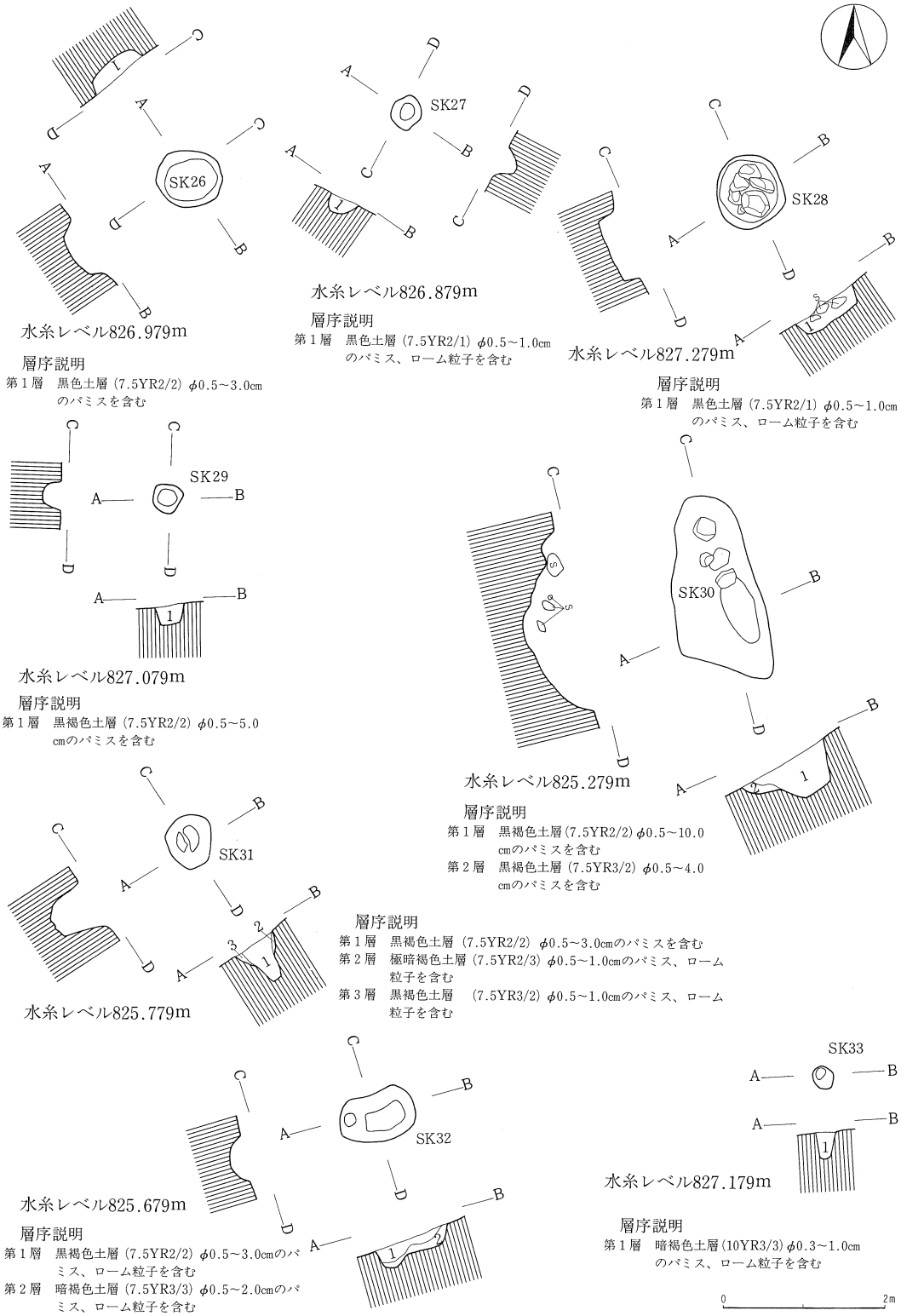


水糸レベル826.479m

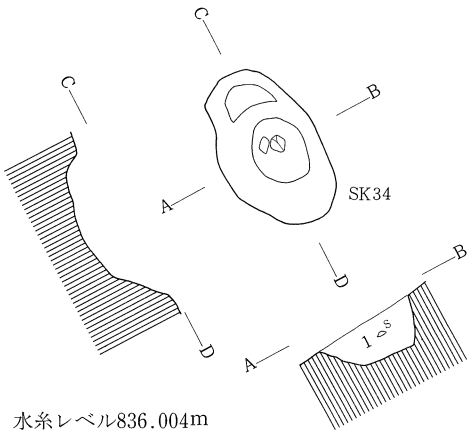
層序説明
第１層　黒色土層（5YR1.7/1）
φ0.5～3.0cmのパミスを含む

0　2m

第37図　第19～25号土坑実測図



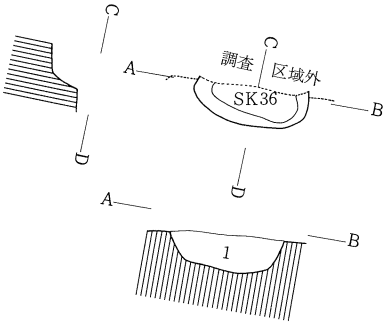
第38図　第26～33号土坑実測図



水糸レベル836.004m

層序説明

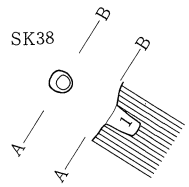
第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.3～6.0cmのパミス、ローム粒子を含む



水糸レベル836.504m

層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

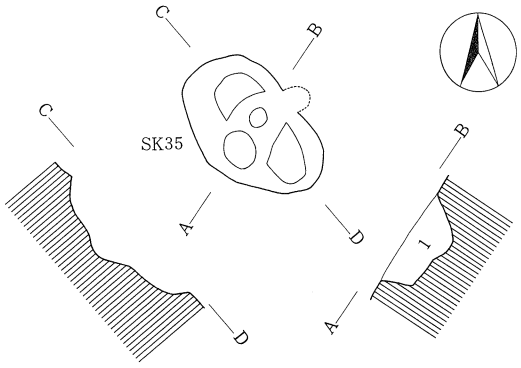


水糸レベル836.304m

層序説明

第1層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子含む

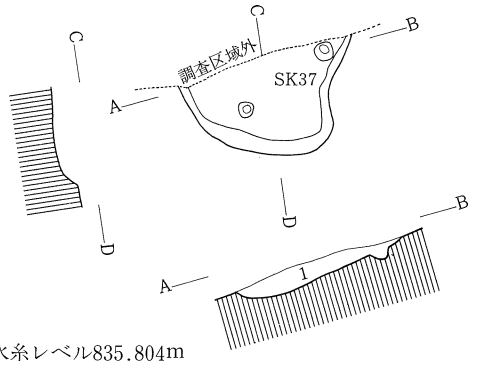
0　2m



水糸レベル836.204m

層序説明

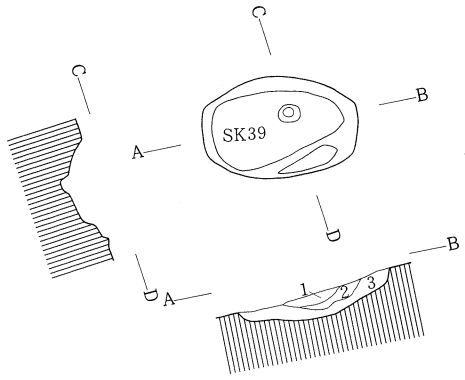
第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～10.0cmのパミス、ローム粒子を含む



水糸レベル835.804m

層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR2/3）φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子含む



水糸レベル833.704m

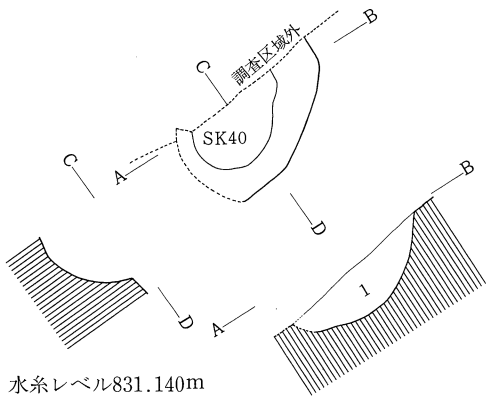
層序説明

第1層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含む

第2層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.3～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第3層　褐色土層（10YR4/4）φ0.3～6.0cmのパミス、ローム粒子を含む

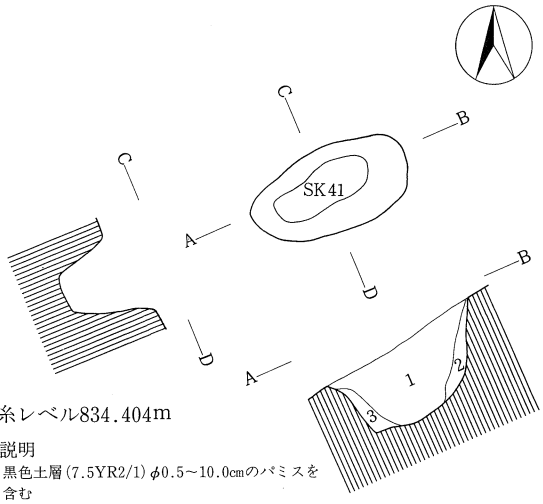
第39図　第34～39号土坑実測図



水糸レベル831.140m

層序説明

第1層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.5～8.0cmのパミス、ローム ブロック、ローム粒子を含む



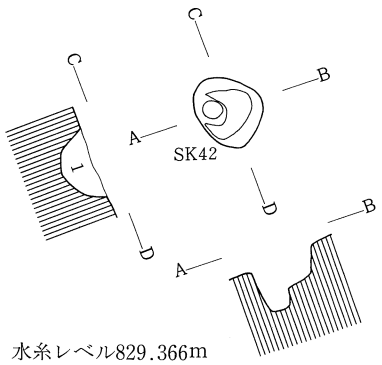
水糸レベル834.404m

層序説明

第1層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.5～10.0cmのパミスを含む

第2層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む

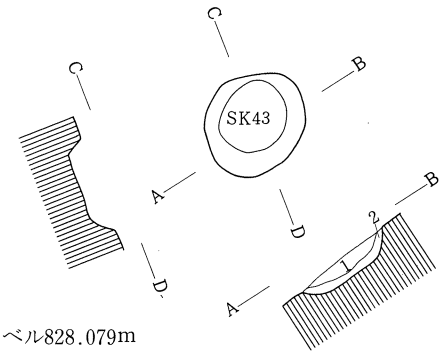
第3層　褐色土層（7.5YR4/6）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む



水糸レベル829.366m

層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

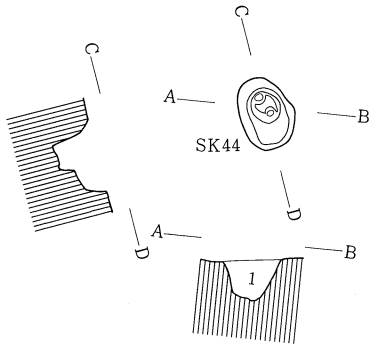


水糸レベル828.079m

層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む

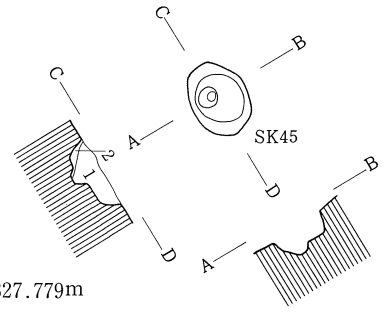
第2層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む



水糸レベル827.379m

層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.3～4.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む



水糸レベル827.779m

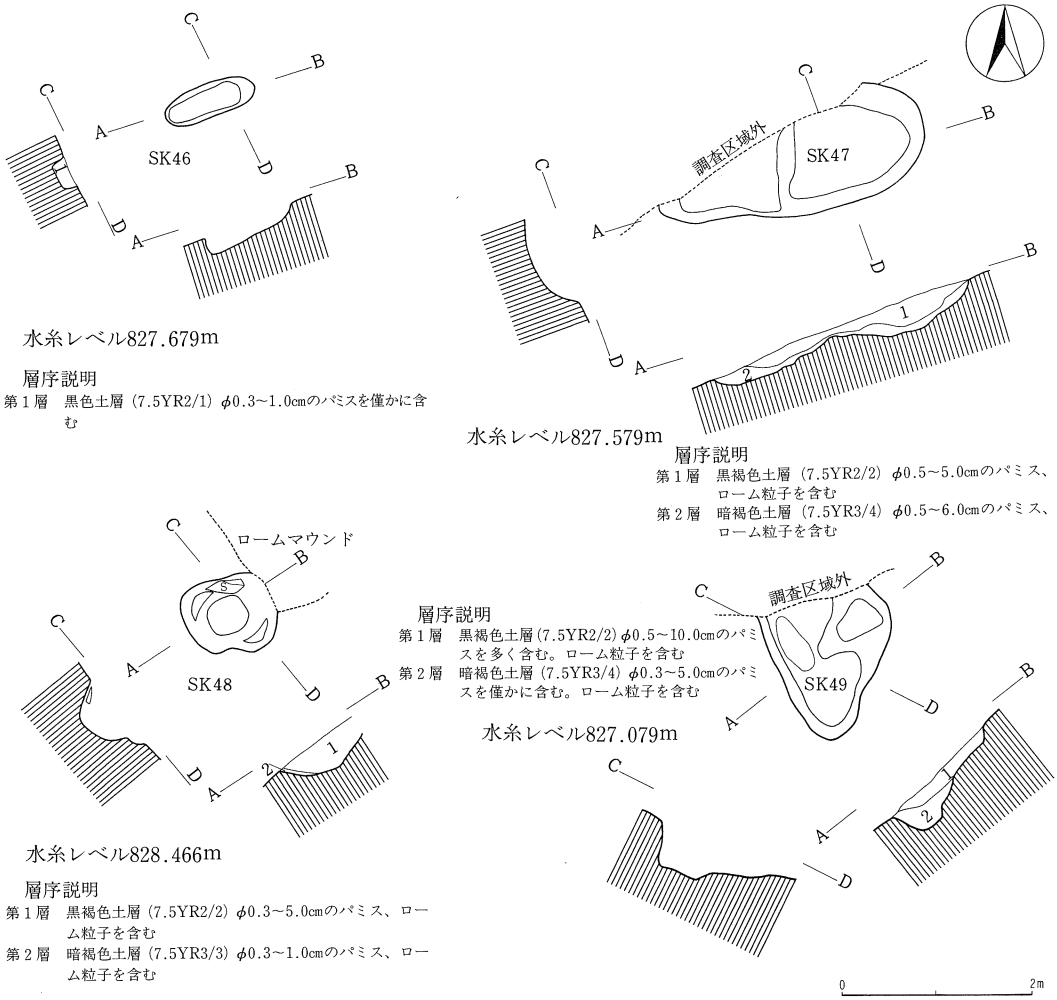
層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～5.0cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む

第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～1.5cmのパミスを僅かに含む。ローム粒子を含む

0　2m

第40図　第40～45号土坑実測図



第41図　第46～49号土坑実測図

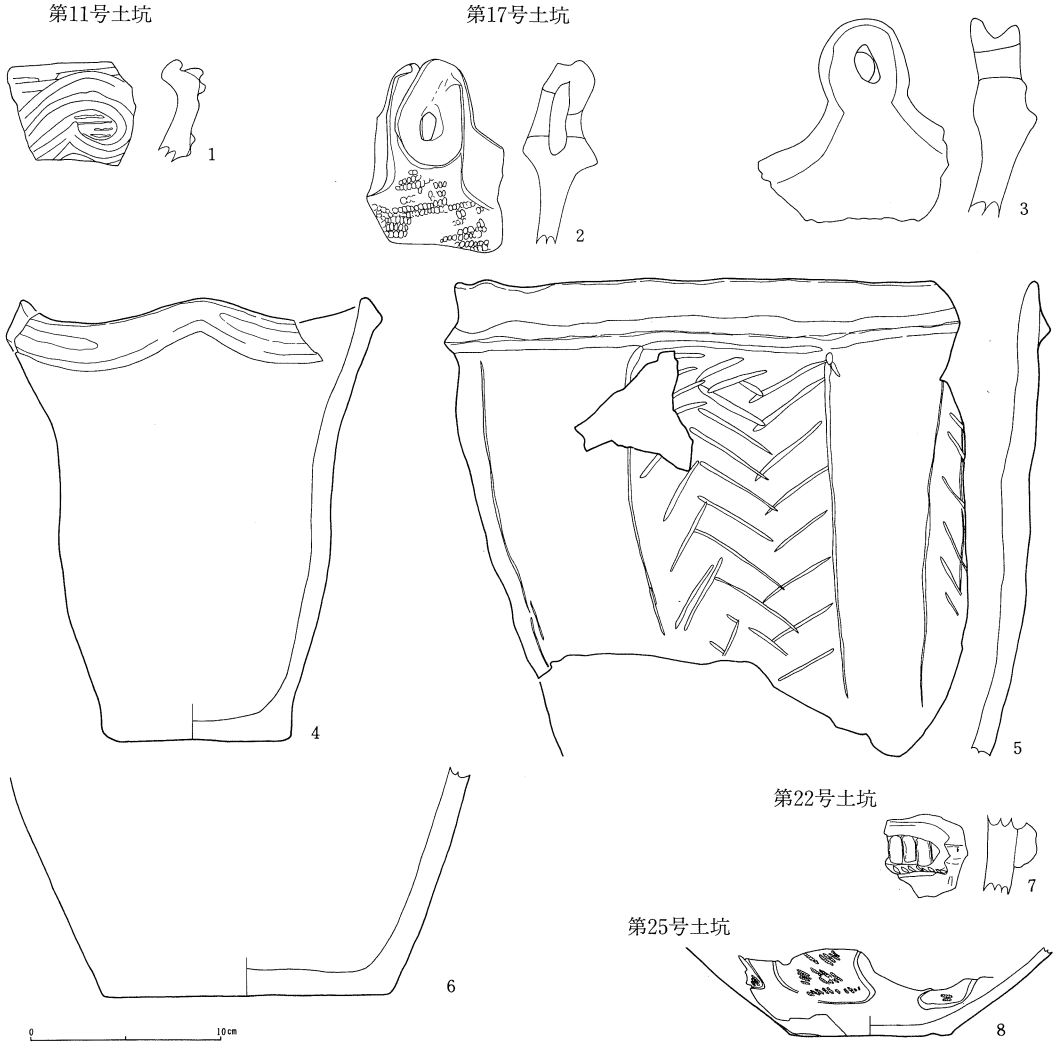
らは、堀之内II式の土器片が、出土した土器片の大半を占めた。

石器は6点出土した。第11号土坑からは、粘板岩製の打製石斧、第14号土坑からは、安山岩製の多孔石、第17号土坑からは、安山岩製のスクレイパーと粘板岩製の打製石斧、第36号土坑からは、珪岩製の石鏃、第37号土坑からは、安山岩製の磨石がそれぞれ出土した。

4　遺構外出土遺物

遺物（47～50図、図版11）

遺構外からは、縄文土器片、石器が出土している。土器は図化したものが8点、拓影が34点である。中期のものが多かったが、前期、後期の資料も出土した。各遺構から出土した土器を含めて、器形、文様を対象に大別すると下記のようになる。



第42図　土坑出土遺物(A)

第Ⅰ群の土器――縄文時代前期前半の土器

第Ⅱ群の土器――縄文時代前期後半の土器

1類――諸磯式期の土器

第Ⅲ群の土器――縄文時代中期中葉の土器

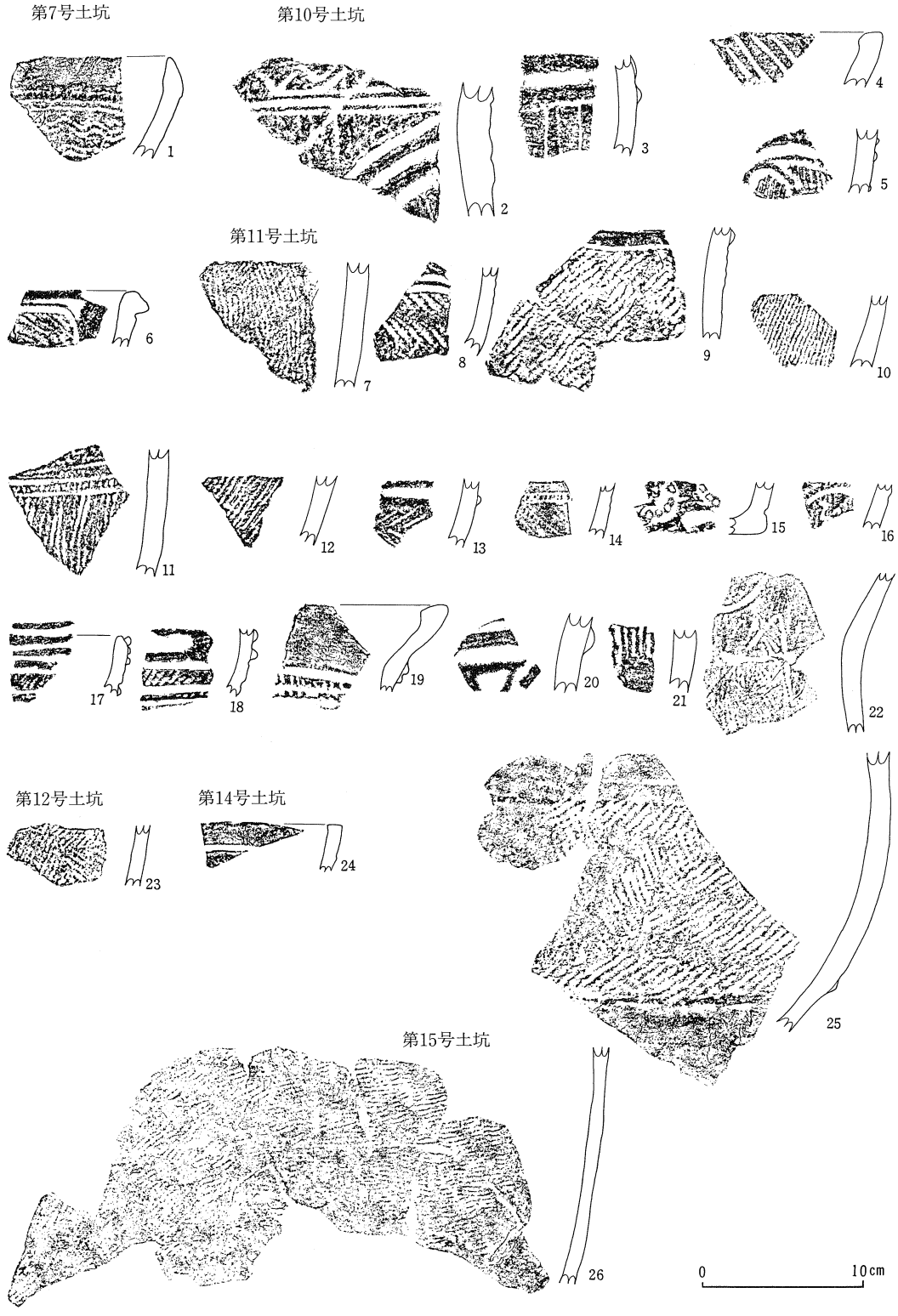
1類――狢沢式期の土器

2類――新道式期の土器

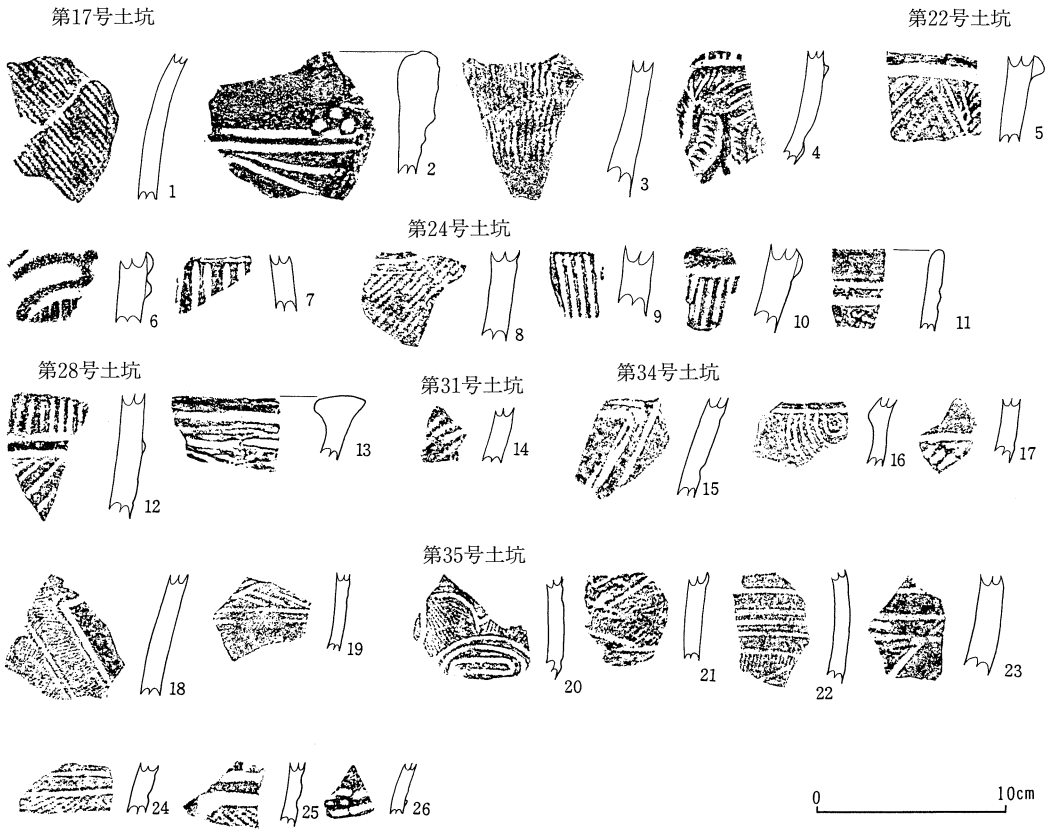
3類――焼町式期の土器

4類――藤内式期の土器

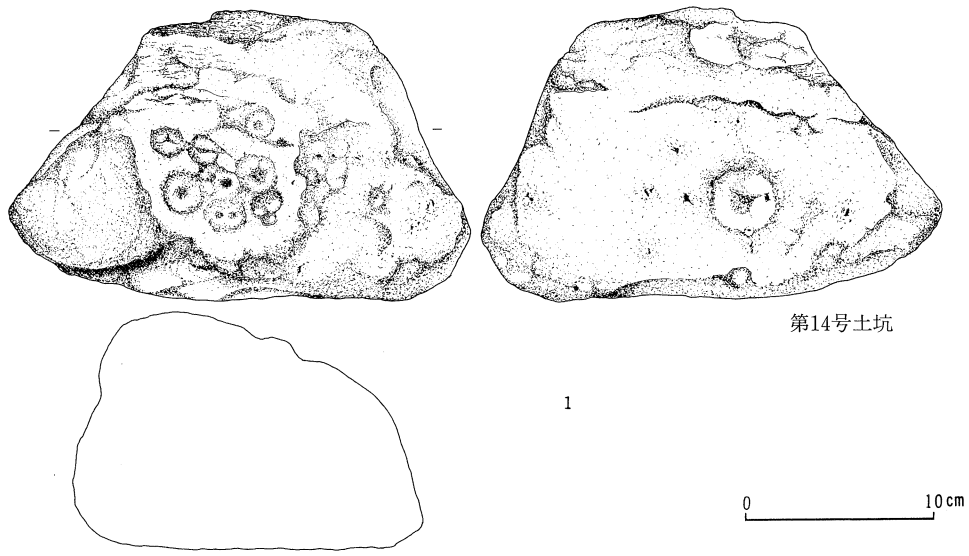
5類――井戸尻式期の土器



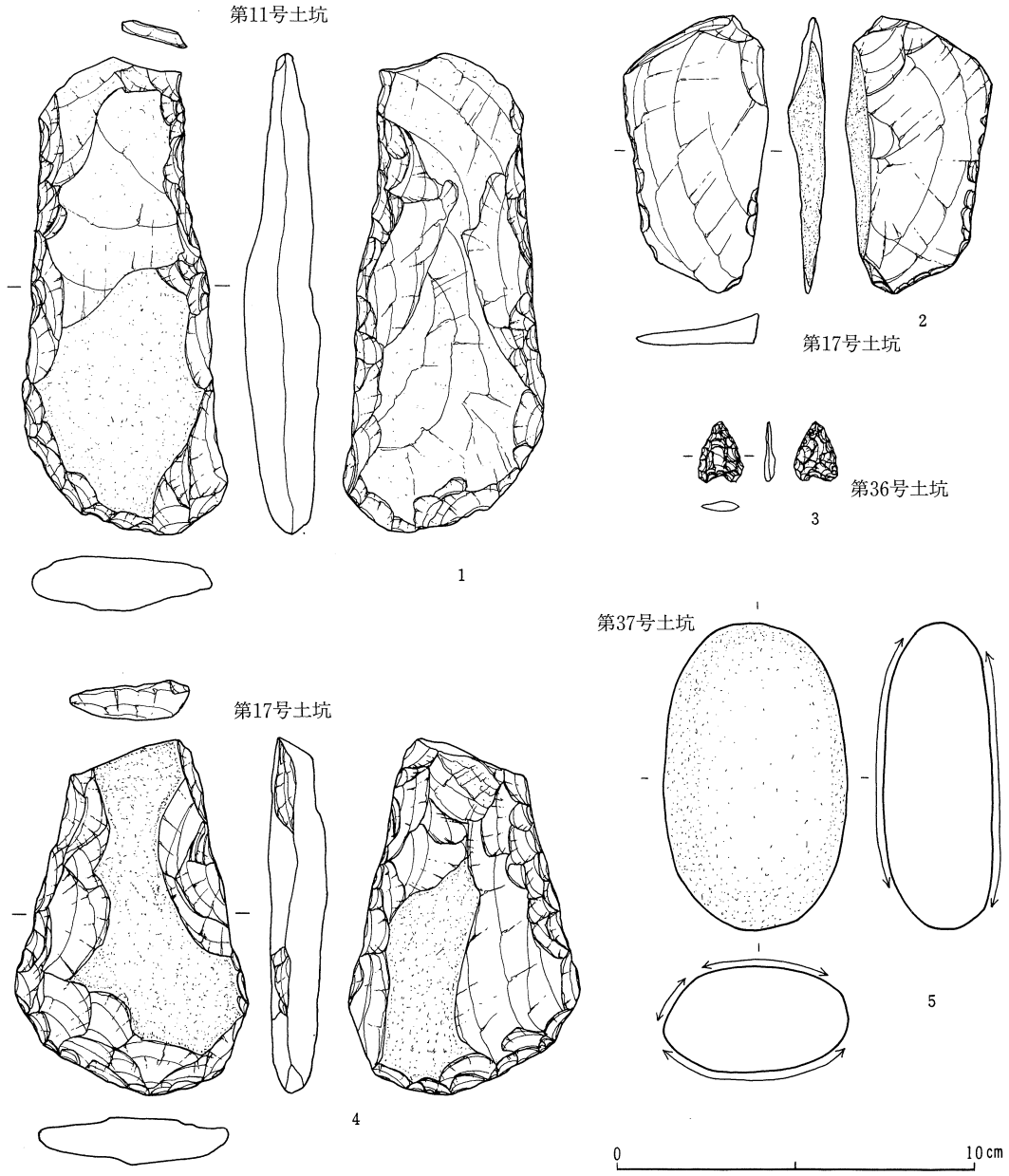
第43図　土坑出土遺物(B)



第44図　土坑出土遺物(C)



第45図　土坑出土遺物(D)



第46図　土坑出土遺物(E)

第IV群の土器――縄文時代中期後葉の土器

1類――曽利Ⅰ、加曽利ＥⅠ式期の土器

2類――曽利II、加曽利ＥII式期の土器

3類――曽利III・IV、加曽利ＥIII式期の土器

4類――曽利Ⅴ、加曽利ＥIV式期の土器

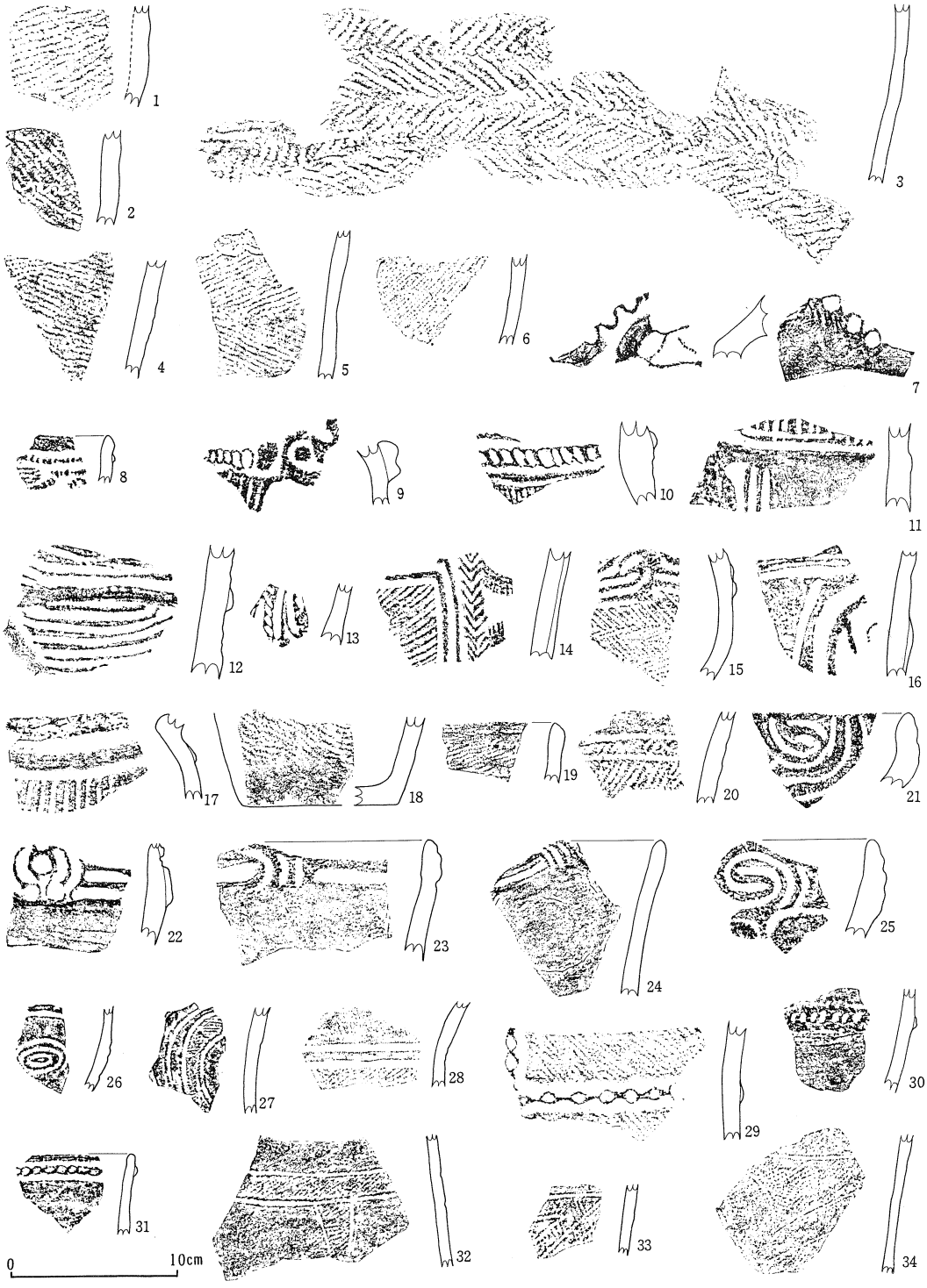
第Ⅴ群の土器――縄文時代後期前葉の土器

第47図　遺構外出土遺物(A)

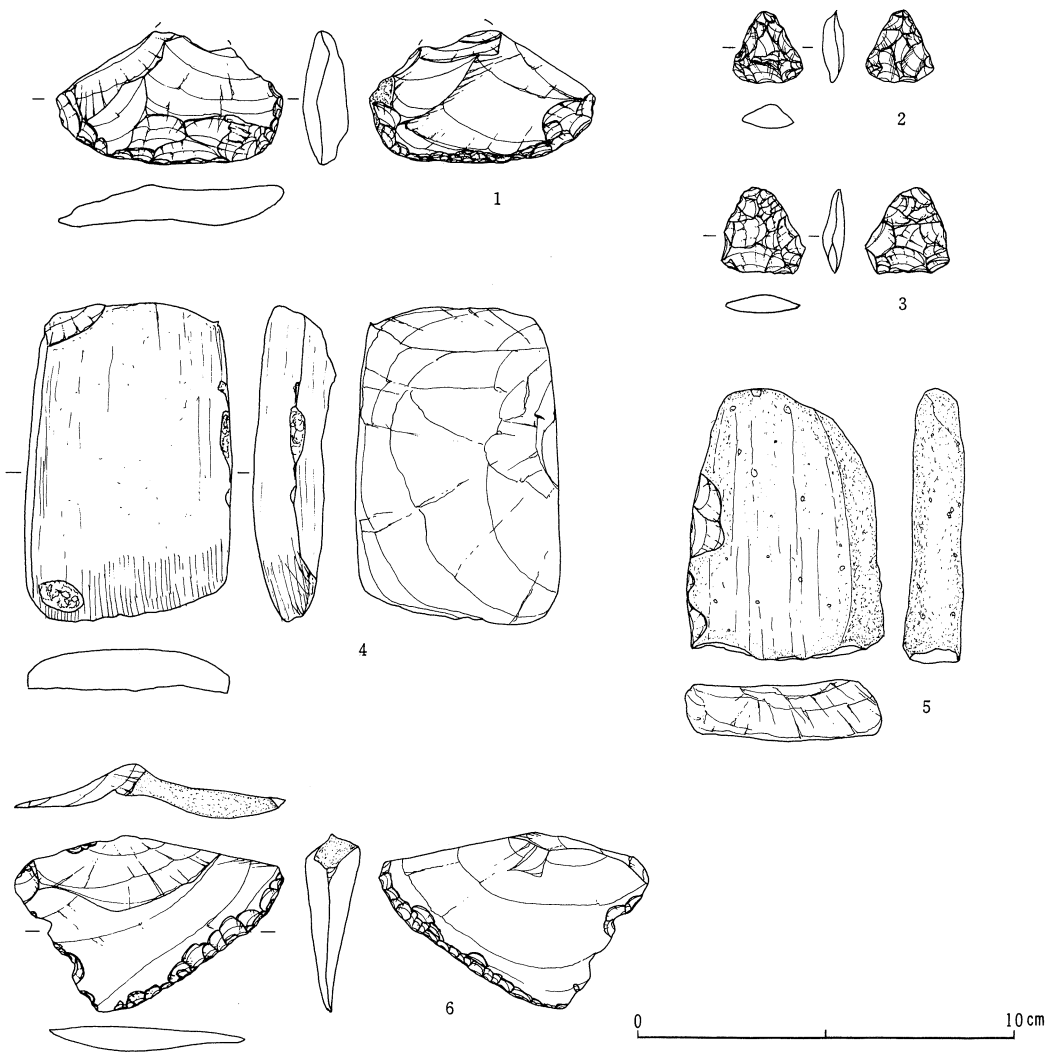
1類――堀之内Ⅰ式期の土器

2類――堀之内Ⅱ式期の土器

第Ⅰ群には、第48図1～6が該当する。斜縄文、羽状縄文が施文され、ばらつきはあるがいずれも繊維を含む。第Ⅱ群1類は、第11号土坑からの出土のみで遺構外からは確認されなかった。第Ⅲ群1類には、第48図8が帰属する。この小片には、北陸の新崎系の土器にみられる結節状隆線が施されている。第Ⅲ群2類には、第3号住居址出土の浅鉢形土器が比定される。第Ⅲ群3類は、第1号住居址から多くの資料が得られた。第Ⅲ群4類は、藤内式期に比定され、第47図2、第48図7がこのグループに入る。前者は胴部の、後者は口縁部の資料だが、ともに装飾的な突起をもつ。第Ⅲ群5類は、第1号住居址から多く出土したが、遺構外からは僅かだった。第48図11・12がこれに当たる。第Ⅳ群1類には、第47図4～6がある。第47図4は、頸部から胴部にかけて大きくJ字状に2単位、隆帯を分けて貼付し、両端には渦巻状の隆帯がみられる。またJの字を模る隆帯の内側は、連続する爪形で施文されている。Jの字と交差するかたちで隆帯の波状懸垂文が施され、さらにJの字がはじまる上部には、隆帯が格子目状に貼付されている。このモチーフは、同図6の深鉢形土器の口縁部突起にも用いられている。第Ⅳ群2類には、第47図7と第48



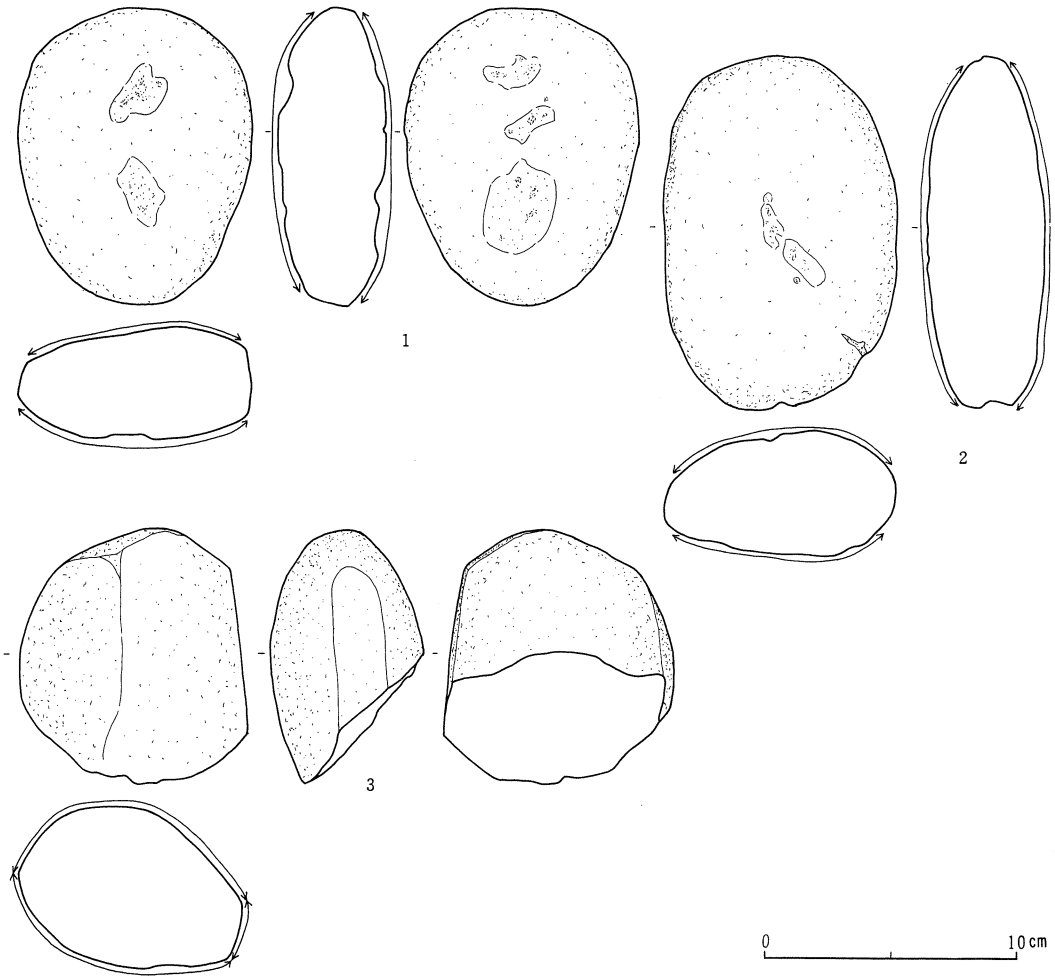
第48図　遺構外出土遺物(B)



第49図　遺構外出土遺物(C)

図15がある。前者は、深鉢形土器の突起の破片で、頂部と口縁部に当たる位置に渦巻文が施文されている。後者は隆帯による渦巻文と、綾杉状沈線文が施されている。第IV群３類には、第47図３、第48図13・14・16・21が分類される。第IV群４類は、第17号土坑から典型的な文様構成の資料が出土したが、遺構外からの出土は少なかった。第Ⅴ群１類には、第48図22～26が該当する。26を除き口縁部の破片で、楕円や円弧状の沈線が施文されている。第Ⅴ群２類には、第48図27～34が分類される。薄手の精製土器と、粗製土器に分けられ、29以外は前者である。

石器は９点出土した。第49図１は、粘板岩製の石匙破片。２は黒曜石製の石鏃、３は安山岩製の石鏃未製品、４は磨製石斧の破片、６は凝灰岩製のスクレイパー。５と第50図の３点は、いずれも磨石である。



第50図　遺構外出土遺物(D)

V 総　括

郷土遺跡において検出された遺構・遺物については、すでに各章で述べたが、要点を簡単にまとめてみたい。

検出された遺構には、縄文時代中期中葉から後期前葉の竪穴住居址、ピット群、土坑がある。

また、出土した遺物には、縄文時代前期前半から後期前半の土器片、石器がある。

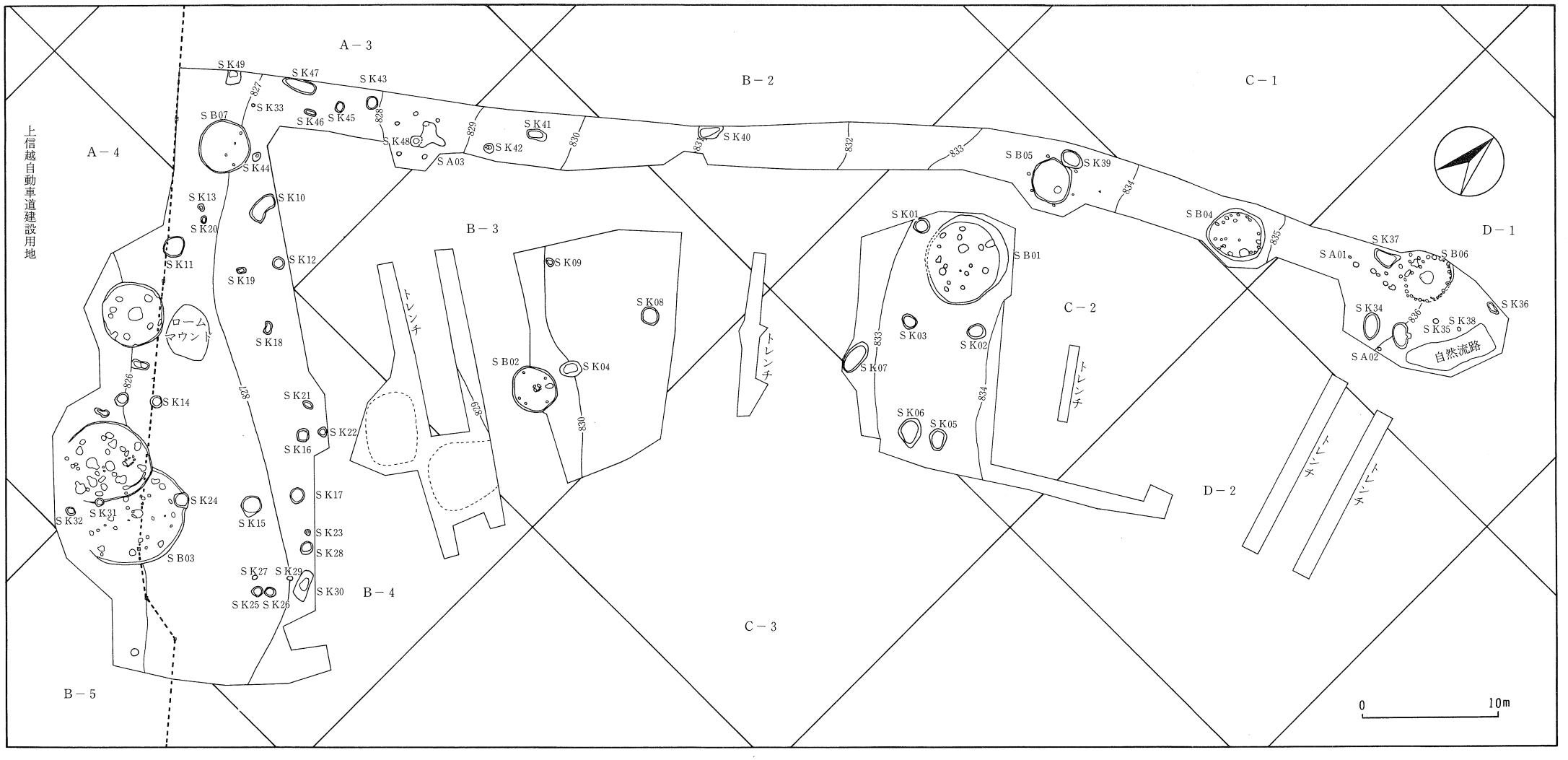
7棟の住居址所産期は、中期中葉が第1・3・4号住居址の3棟、中期後葉が第2・5号住居址の2棟、後期前葉には第6号住居址が比定される。第7号住居址については、特定できなかったが、そのプランから中期以降に位置づけられよう。7棟のうち第4・5・7号住居址からは、炉址が検出されなかった。第6号住居址は、今回の調査では唯一の後期前葉に比定される住居址であり、また柄鏡形敷石住居址である点が注目される。ただし緩斜面に位置し、後世の削平を受けているため、壁は東側で一部分を残すにとどまり、さらに北側が調査区域外に僅かではあるがかかるため、全容を把握することはできなかった。

また遺構の分布状態を調べるためにトレンチ調査を行ったわけであるが、B－3とB－4グリッドにかかるかたちで、竪穴住居址と思われるプランが2棟確認された。所産期は、遺物の出土が殆どなかったため特定できなかった。

ピット群については、いずれも所産期が明確でないが、ピット群1は、各ピットの規模から推して、壁・床面は確認されなかったが、竪穴住居址にともなう柱穴等の可能性も考えられる。

土坑は、49基検出された。詳しくは第2表に記したが、全く遺物が出土しなかった土坑が22基、出土した遺物の数が10点を越えるものが7基と、かなり偏った出土状況だった。第14号土坑からは、土器片のほか、径15cmを越える多孔石を含む礫・軽石などが13個出土した。

次に出土遺物についてふれる。まず土器であるが、縄文時代前期前半の繊維含有のものから、後期前半堀之内II式に至る資料が、整理用コンテナで7箱分出土した。前期前半の資料は、遺構外からの出土が多く、遺構からも出土したが覆土上部からに限られた。該期の住居址の検出はなかったが、かつては集落が営まれていた可能性も考えられる。また小片1点ではあったが、前期後半諸磯式の資料も遺構外から出土した。中期は、中葉から後葉にかけての資料が出土した。中葉の前半、狢沢式期の資料には、北陸新崎式系の土器にみられる結節状隆線が施された小片が出土した。中期の新道式期の資料は第3号住居址から、焼町式期から井戸尻式期の土器は、第1号住居址から多くの資料が得られた。特に井戸尻式期は、底部を欠いてはいるが第9図1の深鉢形土器、また胴部破片ではあるが同図7・8が出土した。中期後葉では、曽利式土器の出土が目立った。遺構外からではあったが、第47図4のI式期に比定される深鉢。第5号住居址出土の第24図1は、III・IV式期に該当する。また第17号土坑出土の第42図4・5は、V式期に比定される。後期の土器は、第6号住居址と第34・35号土坑から出土したものが大半を占め、堀之内II式期に



第51図　郷土遺跡遺構全体図

比定される資料が多かった。

石器は総計31点が出土した。内訳は磨石14点、石鏃及びその未製品が５点、スクレイパー３点、打製石斧３点、磨製石斧１点、多孔石１点、石皿１点、石匙１点、石核１点、刃部剝片１点である。磨石には、凹み面を有するものが３点あったが、磨り面も確認されたので磨石に分類する。

炭化材は、11点検出された。詳細は付編１で説明を加えている。

今回調査した地点に隣接している、上信越自動車道の用地内は、現在長野県埋蔵文化財センターで調査中である。郷土遺跡の性格を知る上で、その成果に注目したい。

最後に、調査・報告書作成にご協力頂いた方々、財団法人長野県埋蔵文化財センター、長野県小諸高速道事務所をはじめとする関係各位、原稿・ご教示を頂いた先生方に厚く御礼を申し上げ、総括としたい。

引用参考文献

福島邦男　　1989　『平石遺跡――緊急発掘調査報告書――』　望月町教育委員会

福島邦男　　1991　『平石遺跡――第２次緊急発掘調査報告書――』　　〃

岡村秀雄ほか　1991　「第３章　調査　第２節　吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２――佐久市内その２――本文編』　日本道路公団東京第２建設局　長野県教育委員会　㈶長野県埋蔵文化財センター

堀田雄二ほか　1986　『不動坂遺跡群II　古屋敷遺跡群II』　東部町教育委員会

林　幸彦ほか　1983　『中村』　佐久市教育委員会

鵜飼幸雄ほか　1990　『棚畑』　茅野市教育委員会

八幡一郎　　1978　『北佐久郡の考古学的調査』　歴史図書社

千曲川水系古代文化研究所編　1980　『編年』　信毎書籍出版センター

野村一寿　　1988　「時代と編年　２　縄文土器」『長野県史考古資料編　全１巻　(4)　遺構・遺物』　長野県史刊行会

付編１

郷土遺跡出土炭化材の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

郷土遺跡（小諸市大字甲字上郷土所在）は、浅間山南麓の浅間第２軽石流の堆積面（Aramaki, S., 1963)上に立地する。浅間第２軽石流は、浅間山の軽石流期に発生した軽石流の一つで、小諸市から御代田町にかけて分布している（Aramaki, S., 1963)。

本遺跡では、発掘調査により縄文時代中期中葉から後期前半の住居址、土坑等が検出された。中には、炭化材を伴う住居址や土坑も確認されている。今回の分析調査では、本遺跡の３軒の住居址（ＳＢ－01，05，06）および３基の土坑（ＳＫ－03,12，31）から検出された炭化材について同定を行う。なお、住居址のうちＳＢ－01は縄文時代中期中葉、ＳＢ－05は縄文時代中期後葉、ＳＢ－06は縄文時代後期前葉で、３基の土坑はいずれも縄文時代とみられるが、詳細な時期は不明である。

本遺跡周辺地域では、これまでにもいくつかの遺跡で住居址出土炭化材等の同定が行われている。しかし、今回のような縄文時代の炭化材を同定した例は少なく、多くは古墳時代以降の炭化材である。そのため、今回の試料は、縄文時代の用材選択を知るための貴重な資料となることが期待される。

１．試料

試料は、３軒の住居址（ＳＢ－01，05，06）および３基の土坑（ＳＫ－03，12，31）から検出された炭化材11点（①～⑪）である。

２．方法

試料を乾燥させたのち、木口（断層面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定する。

３．結果

同定結果を表１に示す。11点の試料は細片のために近似類としたものもあるが、６種類に同定された。各種類の解剖学的特徴や現生類の一般的性質等を以下に記す。なお和名・学名等は、「原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉」（北村・村田，1971，1979）にしたがい、現生種の一般的性質等については「木の事典　第１巻～第17巻」（平井，1979－1982）も参考にした。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）　クルミ科

試料名：④

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形、管陰は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性III型、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられ、現在では材積が少なくなっていると思われる。ほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科

試料名：①，②，⑥～⑧，⑩

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、断層面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椙木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

・ニシキギ属の一種（*Euonymus* sp.）　ニシキギ科

試料名：⑨a

散孔材で、年輪界付近で管径を減少させる。管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合する。単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。年輪界はやや不明瞭。

ニシキギ属には、ニシキギ（*Euonymus alatus* (Thunb.) Sieb.）、マサキ（*E. japonicus Thunb.*）、マユミ（*E. sieboldianus* Blume）など約15種が自生する。落葉または常緑性の高木または低木ときに藤本で、属としては全土に分布し、また植栽される。丸木弓・小器具・旋作材などの用途がある。

・ヤマウコギ（*Acanthopanax spinosus* (L. f.) Miq.）　ウコギ科

試料名：⑨b

環孔性を帯びた散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が斜～放射方向に複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、１～８細胞幅、数細胞高のものから広放射組織まである。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

ヤマウコギは、北海道西南部・本州・四国の山野に普通の落葉低木で、時に生け垣として栽培される。材は重硬であるが、小径であるため用途は特に知られていない。若葉は食用となる。

・トネリコ属の一種（*Fraxinus sp.*）　モクセイ科

試料名：⑤

環孔材で孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。創刊は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性(～異性III型)、１～３(5)細胞幅、１～40細胞高であるが、時に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ（*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.)、トネリコ（*F. japonica* Blume)、アオダモ(*F. serrata* (Nakai) Murata)など約８種が自生する。このうちヤマトアオダモ(*F. longicuspis* Sieb. et Zucc)・マルバアオダモ(*F. sieboldiana* Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ(*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.)は北海道・本州・(中部地方以北)に、トネリコは本州（中部地方以北）に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

４．考察

同定の結果、オニグルミ・クリ（近似種を含む）・ニシキギ属・ケヤキ・ヤマウコギ・トネリコ属の６種類の材が認められた。これらのうち、縄文時代の住居址覆土中から出土した炭化材は、いずれも床面直上ではないため、断定はできないが、住居の建築部材の可能性がある。また、炉内から出土した炭化材は燃料材の可能性がある。これらの炭化材の種類構成を見ると、ＳＢ－01およびＳＢ－05の覆土中から出土した炭化材はいずれもクリ（近似種を含む）である。一方、ＳＢ－01およびＳＢ－06の炉内から出土した炭化材はオニグルミとトネリコ属であった。この結果は、建築部材と燃料材で用材選択に違いがあった可能性を示唆する。しかし、前述のように用途が明確ではないことや、１軒の住居址から出土する炭化材としては点数が少ないこと等から、今回の結果のみで用材選択の違いを断定することはできない。また、ＳＢ－01およびＳＢ－05の覆土中から出土した炭化材は、炭化材の出土位置が明確ではなかったり、比較的狭い炭化物分布範囲中

から出土したものであり、それぞれ同一部材に由来している可能性もある。そのため、今回の結果が当時の建築部材や燃料材の組成を反映した結果とは断定できない。なお、クリとオニグルミは食料としても有用であり、その種実遺体が遺跡から出土する例も多い(粉川, 1983)。本遺跡でもクリとオニグルミが建築部材や燃料材としてだけではなく、食料としても利用されていたことが考えられる。

ところで、近接する関東地方では、遺跡出土材の材同定結果から縄文時代にクリの使用が多いことが指摘されている(千野, 1983)。また、最近では縄文時代にはクリ、弥生時代から古墳時代はコナラ属のクヌギ節・コナラ節（いわゆるドングリ類）が多く使用されていたことが指摘されている（千野, 1991)。佐久盆地周辺で行われた材同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1988ａ, 1988ｂ, 1989ａ, 1989ｂ, 1989ｃ, 1989ｄ, 1991, 1992)をみると、古墳時代以降の建築部材にクヌギ節・コナラ節が多く、今回見られたクリは少ない。一方、今回の結果ではクヌギ節・コナラ節は認められなかった。このことは、佐久盆地において縄文時代にはクリ、古墳時代以降にはクヌギ節・コナラ節という用材選択の変化があった可能性を示唆する。ただし、現時点では縄文時代の資料が少ないため断定はできない。

土坑から出土した炭化材は、４点が全て異なる種類に同定された。この結果は、周辺で入手可能な木材が土坑内にもたらされたことを示唆する。しかし、各土坑内での出土状況や炭化材の用途などが明確ではないため、今回の結果のみから木材の利用形態などを論ずることは困難である。

５．まとめ

今回の調査により、本地域の縄文時代中期～後期の木材利用の一端を知ることができた。しかし、本地域の古墳時代の資料蓄積量に比較すると、縄文時代の資料蓄積量はまだ少ない。また、焼失住居址等から出土する炭化材は、燃焼とその後の埋積過程を経て残存したものであり、当時の木材の種類構成を正確に反映しているとは断定できない。燃焼や埋積の状況により、遺存する木材にも違いがあることが予想される。この問題を解決するためには、住居址等から炭化材が出土した際にはできる限り材同定を行い、資料の蓄積量を増やしていくことが必要であろう。

また、出土した炭化材を採取する際には、出土状況（出土位置，層位，形状等）を正確に把握しておく必要がある。炭化材が細かい場合も多いが、その際には先土器時代の炭化物集中部で小田・金山(1978)行ったような調査方法を応用して、水平方向および垂直方向の位置を把握することも一つの方法であろう。

表1　炭化材同定結果

試料番号	検出遺構	樹種名
①	SB—01 床面上 10～20 cm	クリ
②	SB—01 床面上 10～20 cm	クリ
③	SB—01 床面上 10～20 cm	クリ近似種
④	SB—01 炉　第3層	オニグルミ
⑤	SB—06 炉　第1層	トネリコ属の一種
⑥	SB—05 覆土	クリ
⑦	SB—05 覆土	クリ近似種
⑧	SB—05 覆土	クリ近似種
⑨a	SK—03 第3層	ニシキギ属の一種
⑨b	SK—03 第3層	ヤマウコギ
⑩	SK—31 第1層	クリ近似種
⑪	SK—12	ニレ科

引用文献

Aramaki, S(1963)Geology of Asama volcano. J. Fac. Sci. Univ. Tokyou, Sec. II, 14,p.229－443.

平井信二（1979－1982）木の事典　第1巻～第17巻．かなえ書房．

北村四郎・村田　源（1971，1979）原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉，453ｐ.，545ｐ.，保育社．

粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧．加藤晋平．小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究2生業」，ｐ．42－49，雄山閣．

小田静夫・金山喜昭（1978）先土器時代の炭化物分布　先土器時代研究の新たな視点－．第四紀研究，17（3），ｐ．125－141．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988ａ）鋳物師屋遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳物屋遺跡群　鋳物師屋　－長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書－」，ｐ．116－117，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988ｂ）十二遺跡出土炭化材の樹種同定．「鋳師屋遺跡群　十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－」，ｐ．393－399，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ａ）根岸遺跡出土炭化材の樹種同定．　「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在　鋳師屋遺跡群　根岸遺跡発掘調査報告書」，ｐ．291－293，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ｂ）和田原遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群　和田原・中原遺跡群　鎌田原　－長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書－」，ｐ．83－88，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ｃ）広畑遺跡出土炭化材の樹種同定．　「広畑遺跡－長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書－」，ｐ．35－40，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ｄ）腰巻遺跡試料炭化材同定調査報告．　「腰巻・西久保遺跡II・曲尾II」，ｐ．55－58，佐久市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）関口Ａ・Ｂ遺跡出土材の樹種同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口Ａ・関口Ｂ・柏原遺跡群下柏原　－長野県小諸市関口Ａ・関口Ｂ・下柏原遺跡発掘調査報告書－」，ｐ．245－254，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告．佐久市埋蔵文化財調査報告第９集「国道141号線関係遺跡　長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）下芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅰ・II・III・IV，下芝宮遺跡群上高山遺跡，周防畑遺跡群下北原遺跡，近津遺跡群上宮原遺跡・下蟹沢遺跡，長土呂遺跡群上大林遺跡，長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・II」，ｐ．355－391，佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター．

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生．東京都埋蔵文化財センター研究論集II，ｐ．27－42．

千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか　－遺跡出土植物性遺物からの検討－．東京都埋蔵文化財センター研究論集Ｘ，ｐ．215－249．

図　　版

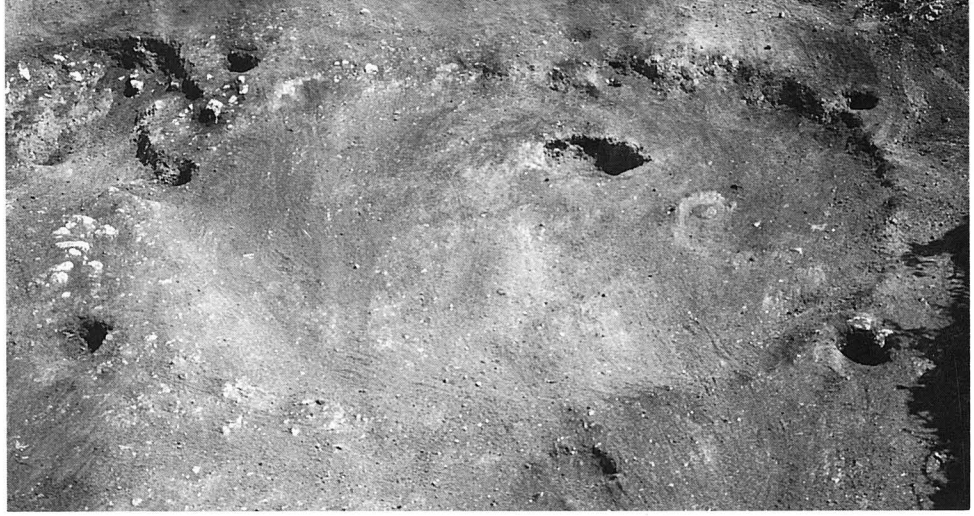
第 1 号住居址

第 2 号住居址

第 3 号住居址

第 4 号住居址

図版 2



第 5 号住居址

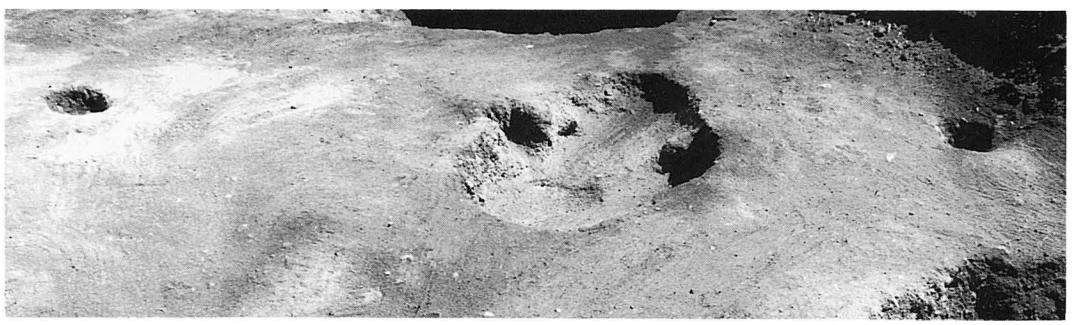
第 6 号住居址

第 6 号住居址

第 7 号住居址

ピット群

第 1 号ピット群

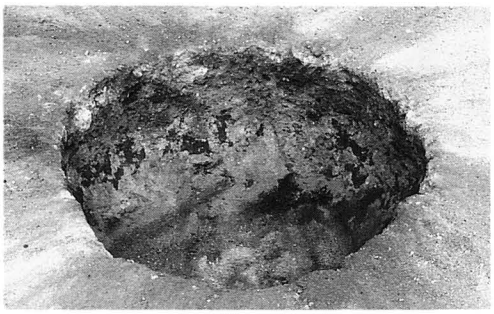


第 2 号ピット群

第 3 号ピット群

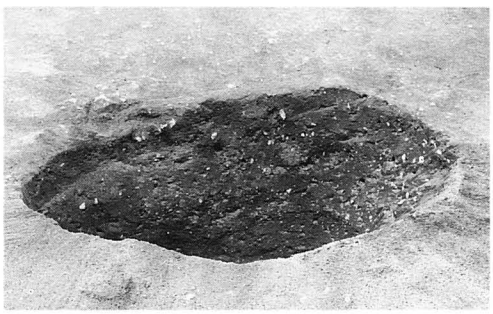
図版 4

第 1 号土坑

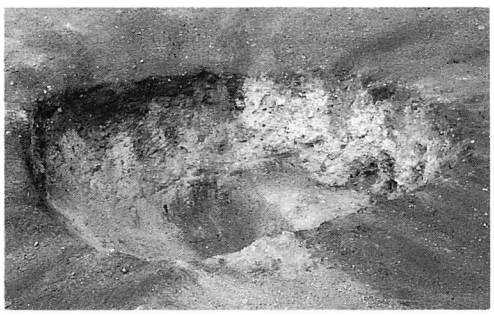


第 2 号土坑

第 3 号土坑



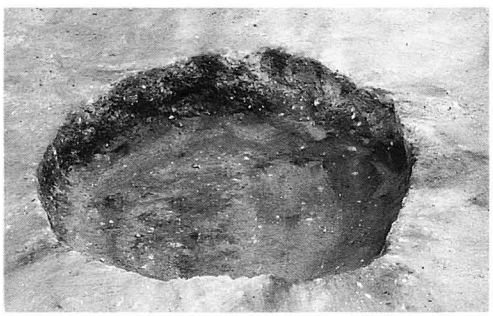
第 4 号土坑



第 5 号土坑

第 6 号土坑

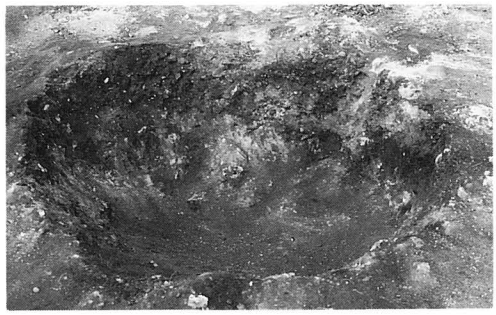
第 7 号土坑



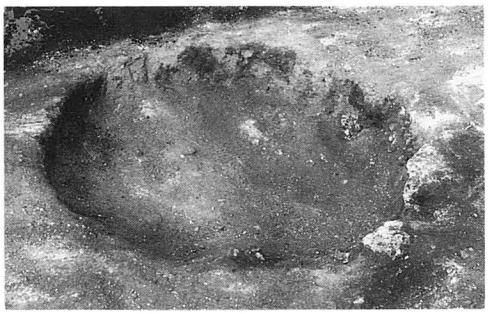
第 8 号土坑

第 9 号土坑

第10号土坑

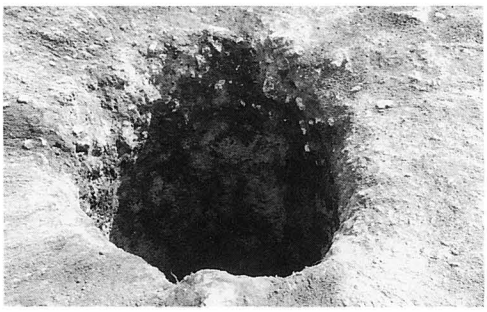


第11号土坑

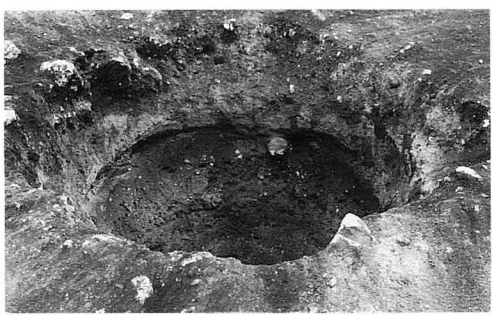


第12号土坑

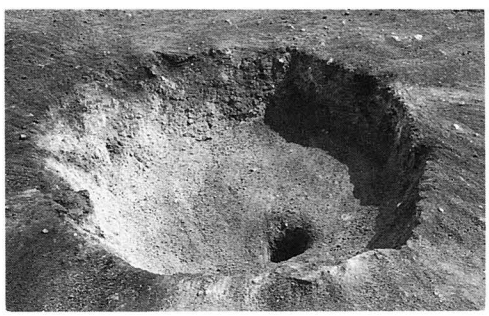
第13号土坑



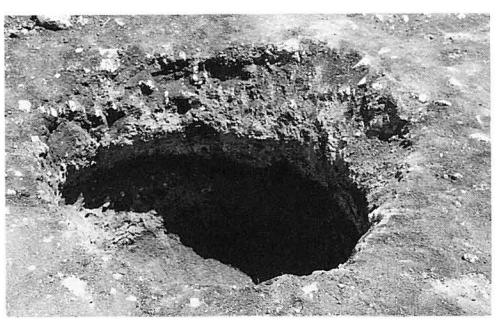
第14号土坑



第15号土坑



第16号土坑



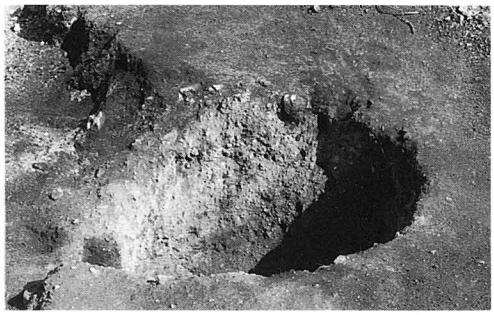
第17号土坑

第18号土坑

第19号土坑

第20号土坑

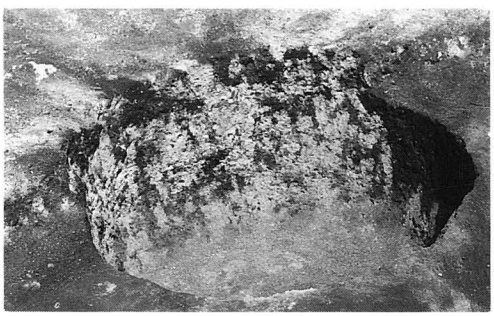
図版 6



第21号土坑

第22号土坑

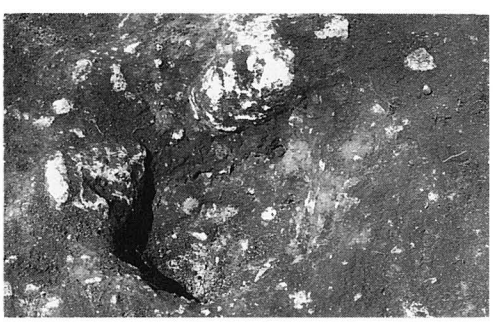
第23号土坑



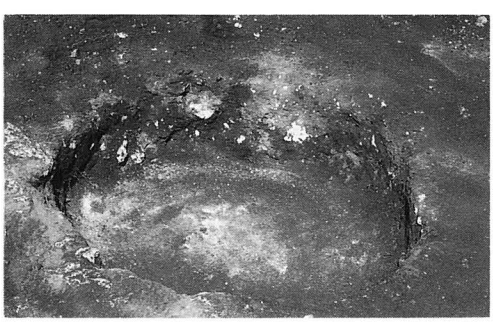
第24号土坑

第25号土坑

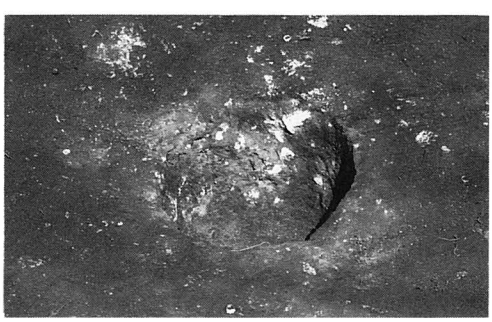
第26号土坑



第27号土坑



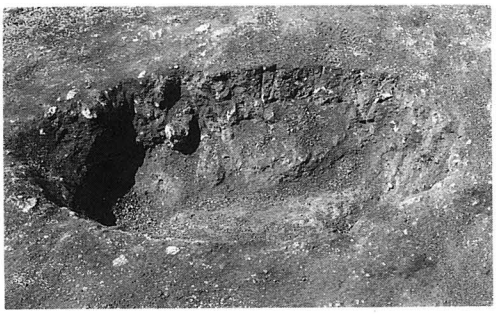
第28号土坑



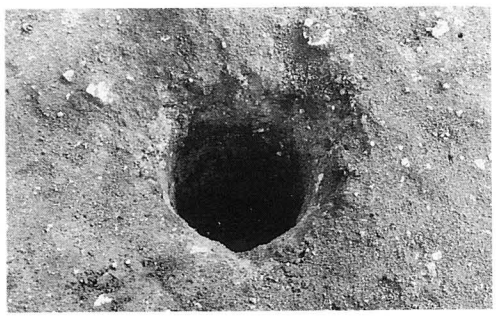
第29号土坑

第30号土坑

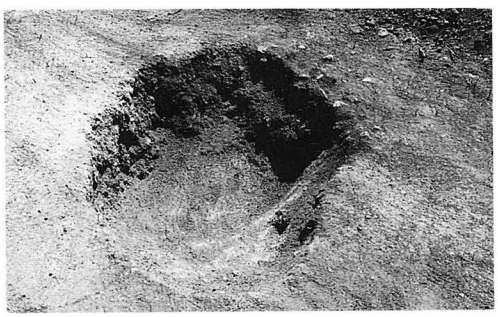
第31号土坑



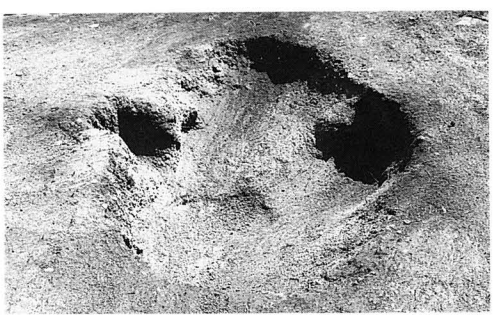
第32号土坑



第33号土坑

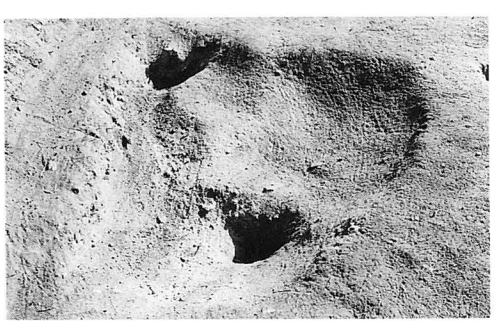


第34号土坑

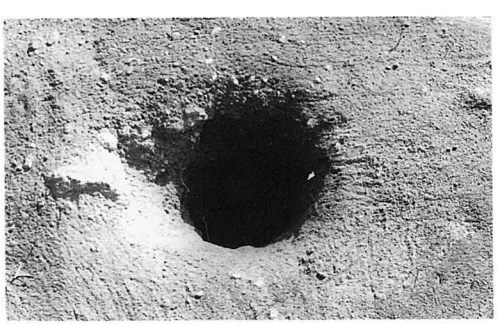


第35号土坑

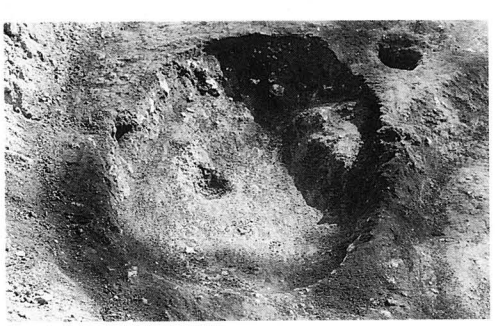
第36号土坑



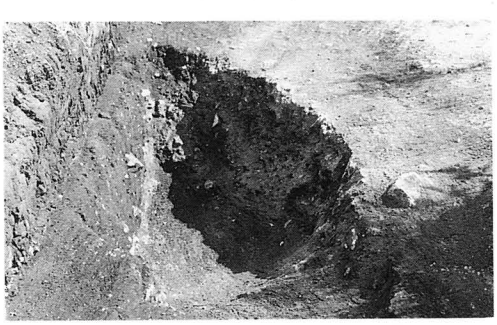
第37号土坑



第38号土坑

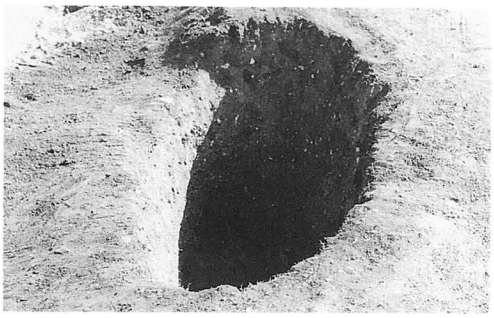


第39号土坑

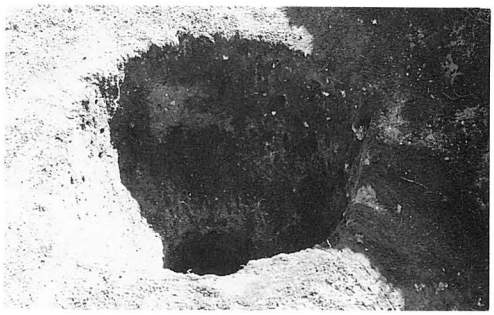


第40号土坑

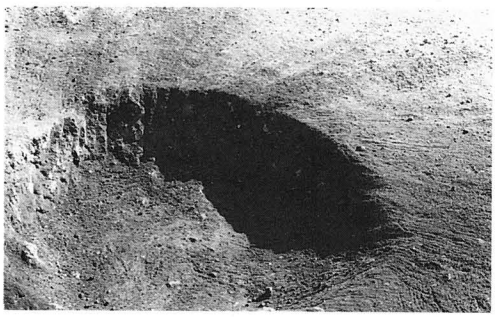
図版 8



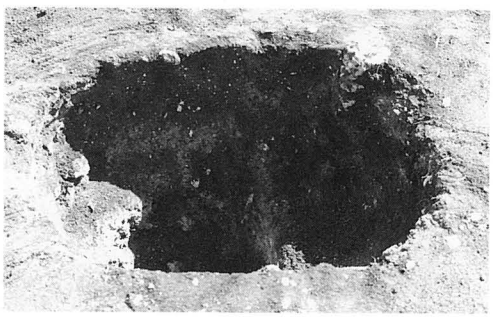
第41号土坑



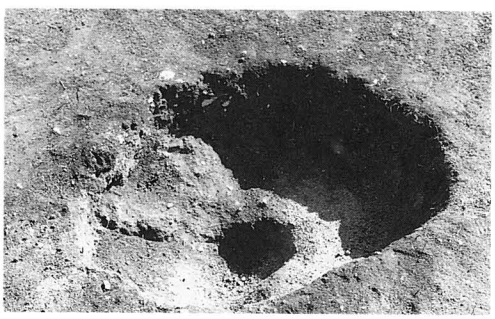
第42号土坑



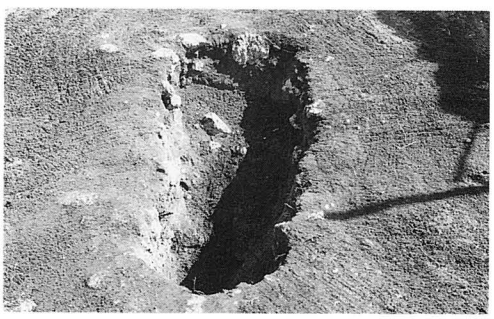
第43号土坑



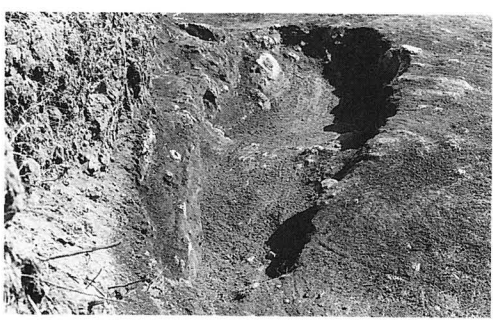
第44号土坑



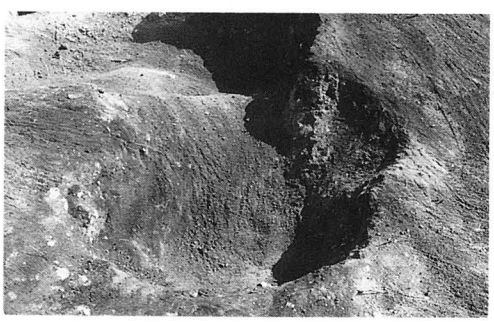
第45号土坑



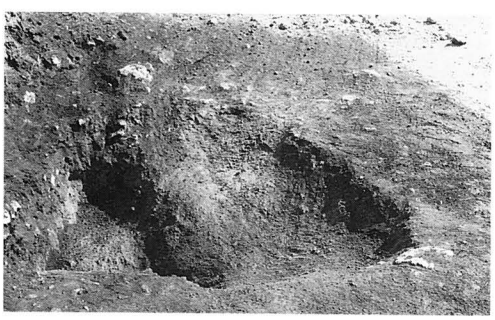
第46号土坑



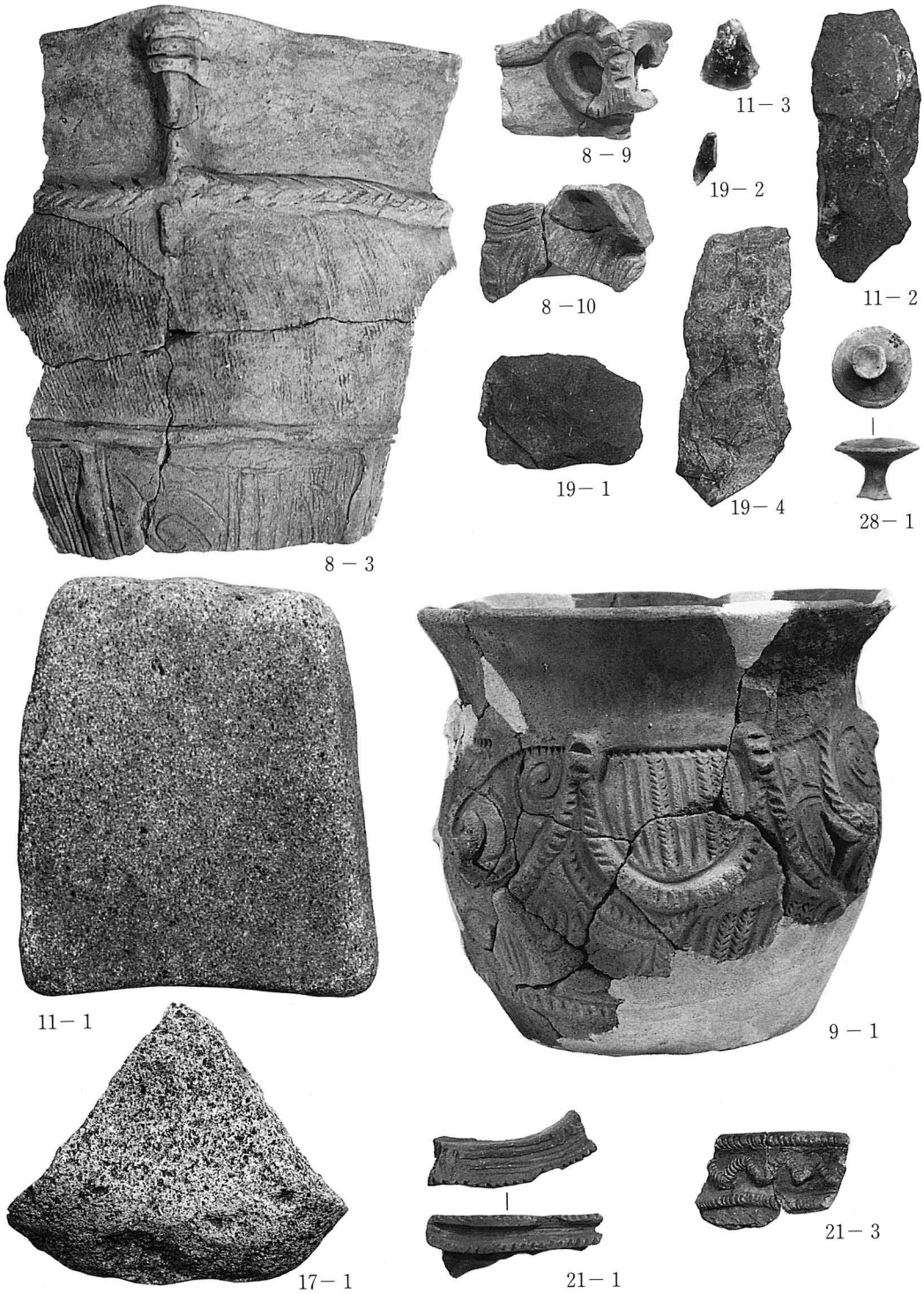
第47号土坑



第48号土坑

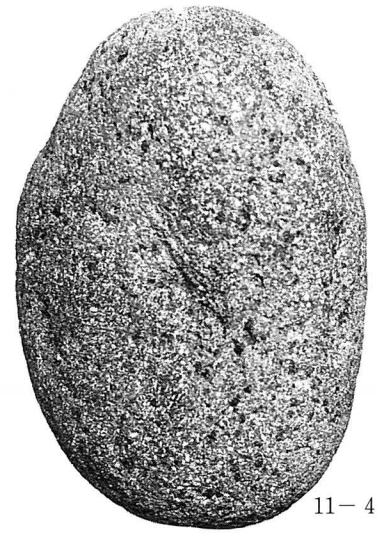


第49号土坑



第１・３・４・６号住居址出土遺物

図版10



11－4

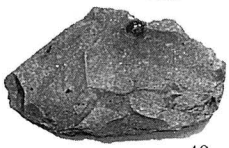
19－3

19－5

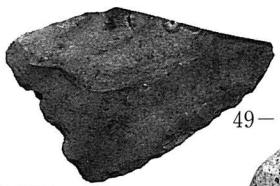
24－1

22－1

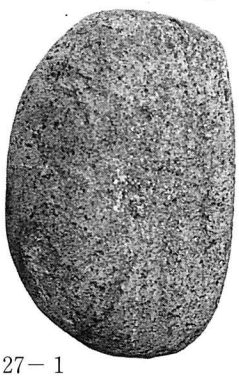
19－6



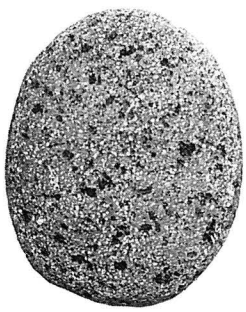
49－1



49－6

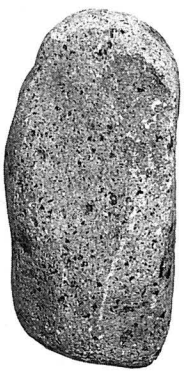


27－1



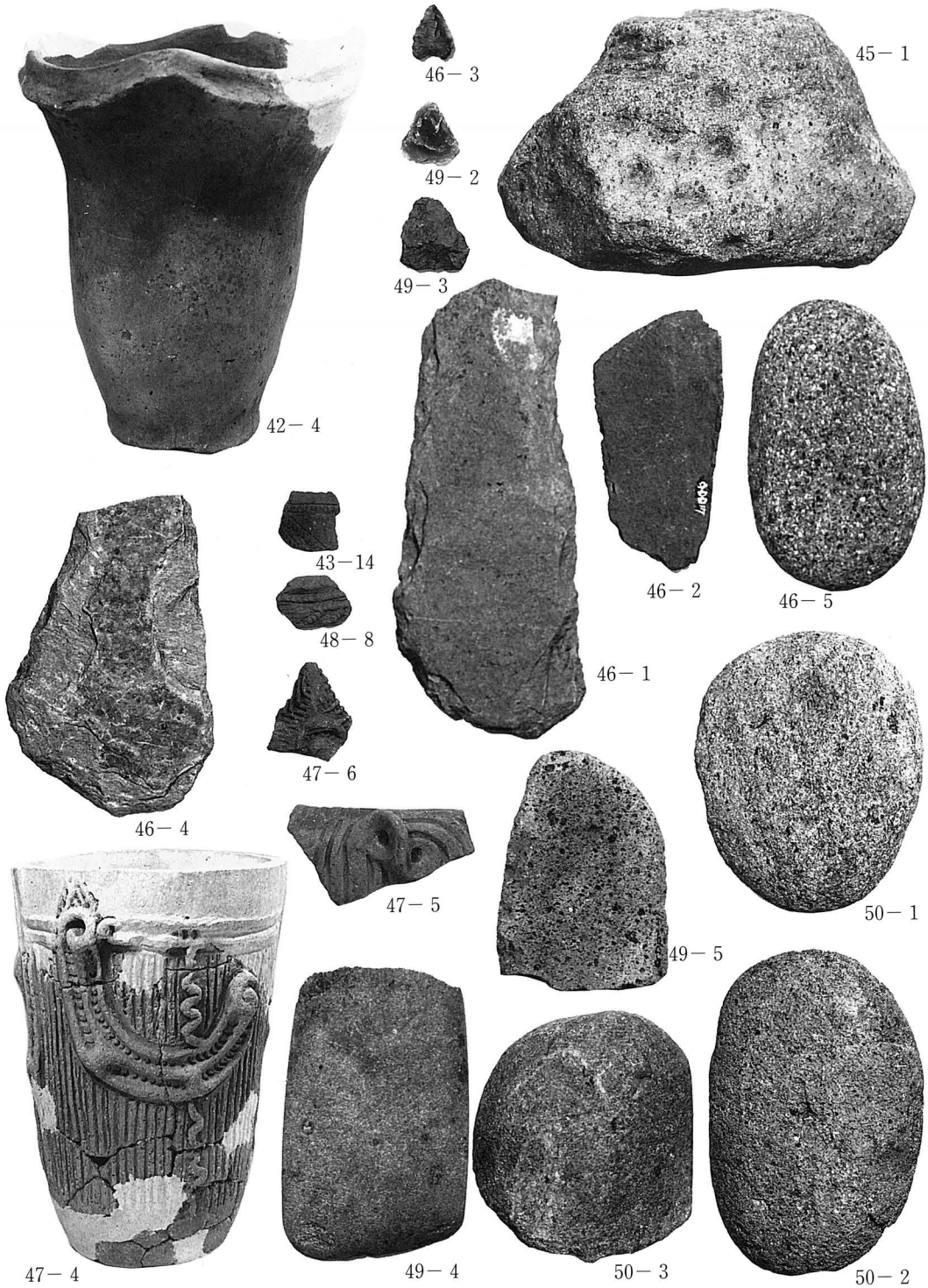
27－2

27－3

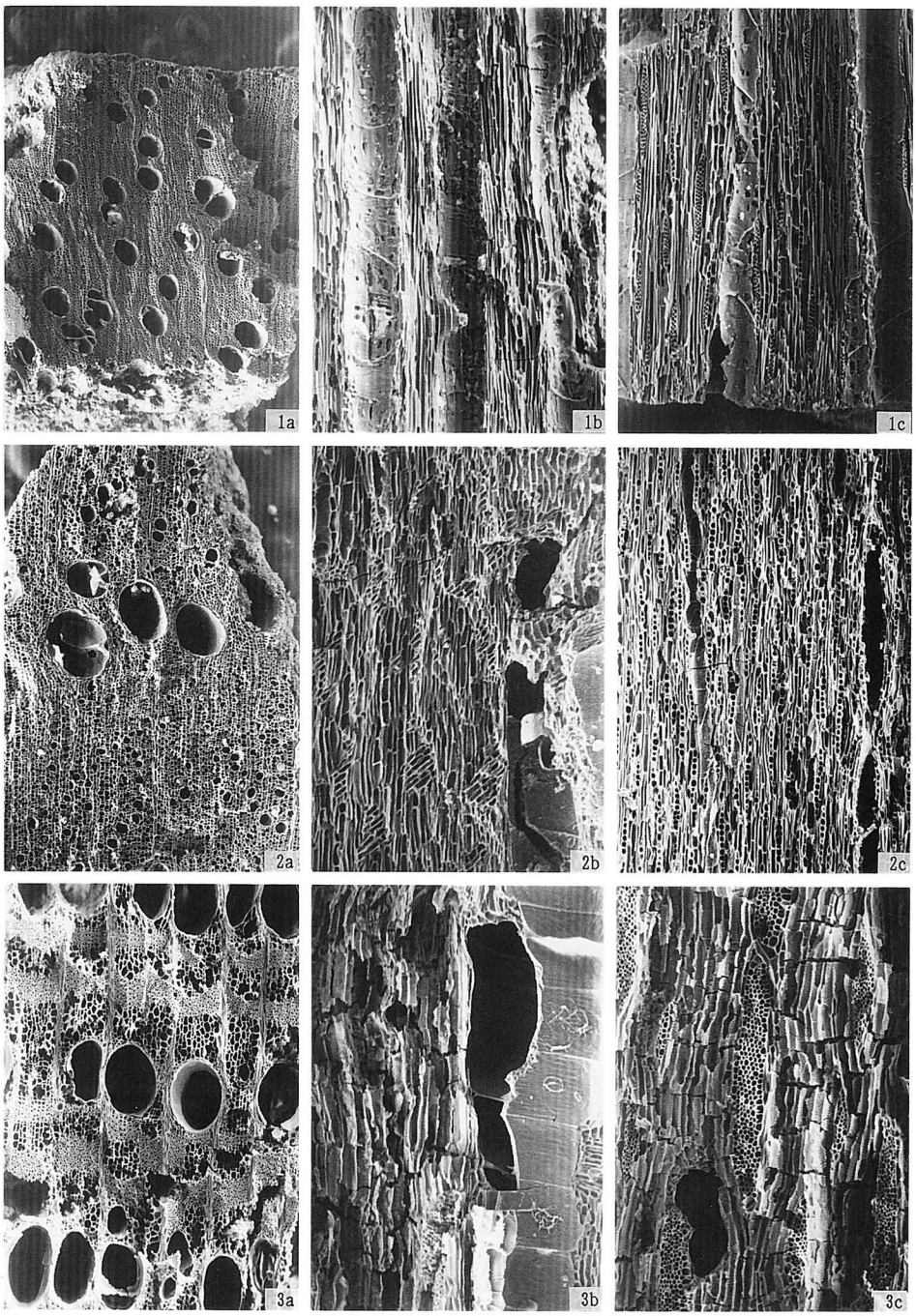


27－4

第1・3・4・5・6号住居址、遺構外出土遺物



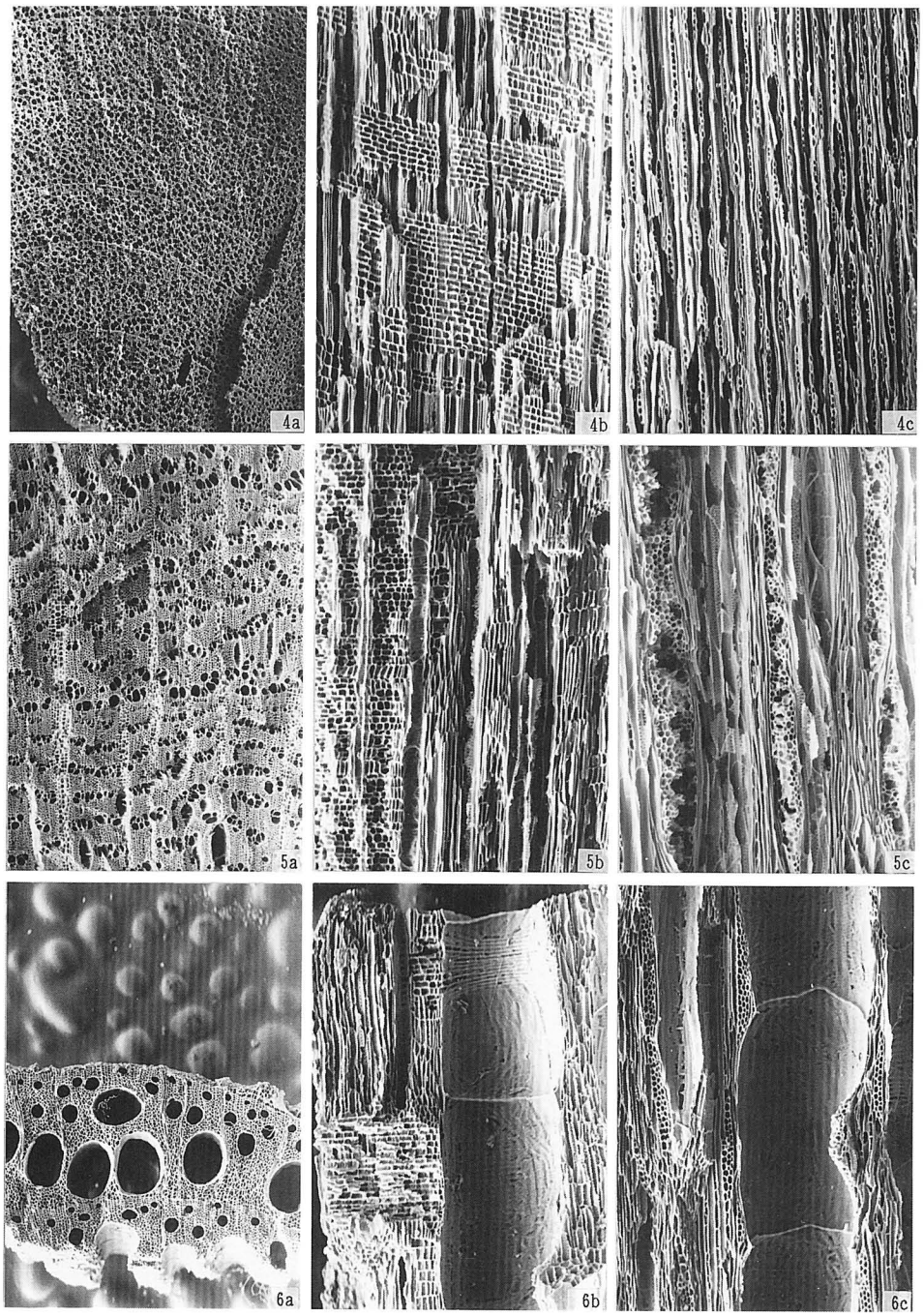
第11・14・17・36・37号土坑、遺構外出土遺物



1．オニグルミ（試料番号④）
2．クリ（試料番号⑥）
3．ケヤキ（試料番号⑪）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

炭化材の顕微鏡写真（1）



4：ニシキギ属の一種（試料番号⑨a）
5：ヤマウコギ（試料番号⑨b）
6：トネリコ属の一種（試料番号⑤）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

炭化材の顕微鏡写真（2）

郷　土

——長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書——

平成5年3月　発行

編集　長野県小諸市教育委員会

発行　長野県土地開発公社
長野県小諸市
長野県小諸市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社